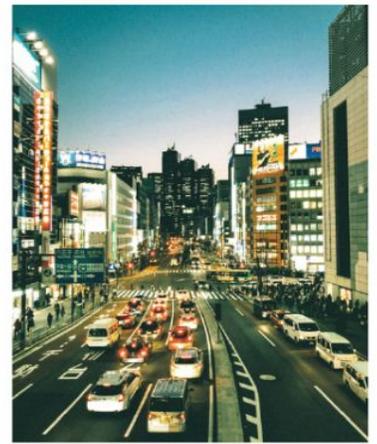


▶ Lightroomでフィルムルックに写真編集

Lightroom
Classic
対応

デジタルで *edit digital photos to look like film* フィルムを再現したい

嵐田大志 著



▶ Lightroomでフィルムルックに写真編集

Lightroom
Classic
対応

デジタルで *edit digital photos to look like film* フィルムを再現したい

嵐田大志 著



玄光社MOOK



フィルムをデジタルで再現する色には
正解がありません。

本書を通じて色調やトーンの
コントロールを身につけ、
楽しみながら自分好みの
フィルム再現を見つけられますように。

▶ Lightroomでフィルムルックに写真編集

Lightroom
Classic
対応

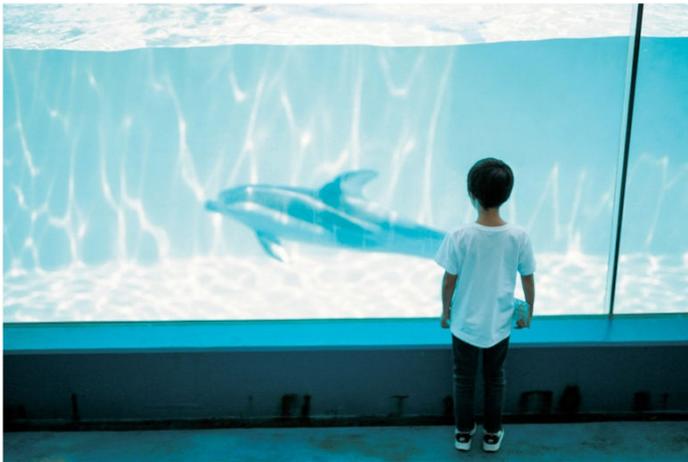
デジタルで edit digital photos to look like film フィルムを再現したい

嵐田大志著

玄光社MOOK

Gallery — 写真はやがて、記憶になる





左上／露光量を上げるとともに、背景の白飛びを抑えるためにハイライトの明るさを下げる。色温度を寒色寄りにし、爽やかなテイストに仕上げた。

左下／キラキラとした海の玉ボケがしっかり見えるように、ハイライトをしっかりと下げた。海と洋服の色に注目しながら、ブルーの色相と彩度を微調整した。

右上／カラーミキサーでブルーの色相と輝度を調整し、シアンに寄り過ぎないコクのある空に。また、雲の表情がしっかり出るように、明瞭度を上げた。

右下／シャドウを明るくし、黒潰れ気味の子供のディテールが見えるようにする。水槽のブルーの彩度の低くし、ノスタルジーを感じる色合いに。





左／写ルンですです撮ったような暖かなカラーバランスをイメージして、明暗別色補正に赤系統の色を乗せる。粒子の量を増やし、ザラっとした質感に。

右上／ポイントカーブで暗部を持ち上げ、露光不足のフィルムのようなトーンに。全体的に彩度を下げて、アンティークなトレーラーハウスの雰囲気を出した。

右下／上の写真同様、暗部を持ち上げて、フェード効果を出す。窓の外と、コーヒーの湯気のディテールをしっかりと見せるためにハイライトを下げた。





左上／遠い日の記憶のような色調にした
いので、彩度を大幅に下げる。また、色
温度を上げて、青味がかった仕上がりに。

左下／子供たちの表情がわかる程度に
シャドウを明るくする。明暗部色補正で
シャドウに青系の色を乗せる。また、周
辺光量を少し下げてオールドレンズで
撮ったような雰囲気。

右／日が高く硬質な光のため、コントラ
ストを大幅に弱める。全体の彩度を下げ
つつも、東京タワーが目立つように赤の
彩度を上げた。







左上／シャドウを上げて柔らかさを出す。モノトーンの背景を活かすために彩度を下げつつも、肌色が不健康な印象とならないよう、カラーミキサーのオレンジの彩度を少し上げた。

右上／グリーン系の彩度は低い方がフィルムライクになるため、カラーミキサーで芝生や木の葉の彩度を大幅に下げる。明暗差が大きいため、シャドウを上げて子供の表情が分かるようにする。

左下／モノクロ化したのち、白黒ミキサーで青の輝度をやや落とすことでメリハリを出す。周辺光量補正をマイナスにし、減光効果を演出。

右下／日が傾き始めた時間帯らしい色合いにするために、色温度をやや暖色寄りに。カラーミキサーで芝生のグリーンをやや黄色寄りにすることで夕方らしさを強めた。



CONTENTS

Gallery—写真はやがて、記憶になる —	002
はじめに —	012

序章

「フィルム」について

・フィルム写真のブーム —	014
・フィルムの魅力とは？ —	014
・わが国のフィルム文化 —	015
・順風満帆ではないフィルム市場 —	016
・デジタルでフィルムを再現する意義 —	016
・デジタル時代における写真編集の重み —	017
・フィルム風とは —	017
・PRO400Hは「青く」ない!? —	018
・フィルムはデジタルと何が違うのか —	019

第1章

デジタルでフィルムを再現する編集プロセス

Lightroom編集の基礎 —	022
・Lightroomのできること、できないこと —	022
Lightroomの基本構成とそれぞれの効果 —	023
①ライト —	024
②カラー —	025
③効果 —	026

フィルム再現の手順 —	027
Step 0 仕上がりをイメージする —	027
Step 1 基本補正 —	028
Step 2 カラー調整 —	030
Step 3 効果の補正 —	034
比較して検討する —	035
実物のフィルム写真との比較 —	036
プリセット作成による編集作業の効率化 —	037
ベースプリセットダウンロードURLページ —	038

第2章

シーン別フィルム再現 —屋外編—

01 爽やかなカラーネガ風の再現 —	040
02 明るくポップなカラーパレットに —	044
03 あえて色を転ばせて印象的に —	048
04 爽やかなミントグリーン調に —	052
05 フラットな光を活かした編集 —	056
06 夏の空気を感じる濃厚な青空に —	060
07 彩度が低い落ち着いた色調表現 —	064
08 ニューカラーを意識した色調 —	068
09 中判フィルムを意識した編集 —	072
10 「無補正プリント」の硬調さを再現 —	076
11 高感度フィルムのザラついた質感に —	080
12 人気写真店のテイストを意識 —	084
13 寒色調に温かみが同居する色調に —	088

- 14 ネガの広いラチチュードを再現 —— 092
- 15 青味がありつつも温かみのある描写 —— 096
- 16 PRO400Hのような青味と低彩度 —— 100
- 17 記憶色のようなフィルム再現 —— 104
- 18 懐かしさを感じる都市光景に —— 108
- 19 コンパクトフィルムカメラの再現 —— 112
- 20 フィルム×オールドレンズのように —— 116
- 21 普及版フィルムの荒々しさを再現 —— 120
- 22 高感度フィルムの色合いを再現 —— 124
- 23 赤味を乗せた温かみのある編集 —— 128

コラム スマホで撮影を楽しもう① —— 132

第3章

シーン別フィルム再現 ー屋内編ー

- 24 現像機の違いを意識した編集 —— 134
- 25 フェードを効かせたフィルム再現 —— 138
- 26 暗いものを暗いまま、静寂に —— 142
- 27 「ハイライトに青」がテーマの編集 —— 146
- 28 クセのないプレーンなフィルム風 —— 150
- 29 業務用フィルムをイメージした編集 —— 154
- 30 6×6中判フィルムを目指した編集 —— 158
- 31 あえて色かぶりを演出した編集 —— 162
- 32 アンバー×フェードでレトロ調に —— 166

- 33 光源の雰囲気を活かした色調補正 —— 170
- 34 ノーリツ機での現像をイメージ —— 174

コラム スマホで撮影を楽しもう② —— 178

第4章

ポジフィルムとモノクロフィルムの再現

ポジフィルムとモノクロフィルムの
編集プロセス —— 180

ポジフィルムの再現プロセス —— 180

- Step 0** 仕上がりをイメージする —— 181
- Step 1** ポイントカーブでベースを作る —— 181
- Step 2** ライト&カラーを補正する —— 182
- Step 3** カラーミキサーを調整する —— 182
- Step 4** 明暗別補正を調整する —— 183

- 35 マゼンタを活かした濃厚な青空に —— 184
- 36 高彩度ポジフィルムのような夕景 —— 188
- 37 90年代の広告写真のような色調 —— 192
- 38 階調豊かなモノクロフィルムの再現 —— 196
- 39 グレーが無段階に連なるモノクロに —— 200
- 40 夕日を繊細なモノクロで表現 —— 204

はじめに

本書を手にしていただき、ありがとうございます。

皆様は撮影後に写真を補正したり加工したりしていますか？ ネット上では事あるごとに、「撮影したままの“撮って出し”こそが至高」「色調やトリミングなどの補正はOKだが、合成は写真とは呼べない」等々の議論が熱く繰り広げられています。私自身は、せっかく写真を通じて何かしらの表現をしようとしているのだから、自分のイメージに近づける編集作業を積極的に行った方が良いと考えています。所謂“撮って出し”の写真は、カメラ側の演算処理によって万人に好まれる絵を自動的に生成したもので、いわば自分の撮った写真を他人（カメラの人工知能）が代わりに編集しているのと同じ状態です。私は、他人任せにするくらいなら、自分の意図を反映しながら最後まで仕上げたいと考えています。

本書は、Adobe社の写真編集ソフトLightroom Classicを使って、デジタルカメラで撮った写真をあえてフィルムカメラで撮ったような色調やトーンに仕上げていくことに特化しています。Lightroomの全般的な使い方や、Photoshopを使ったレタッチや合成などのテクニックには触れていません。「デジタルの写真が何だか綺麗過ぎてじっくりこない」「フィルムの色合いが好きでデジタルでもこれを再現したい」という方に向けています。

フィルムをデジタルで再現する色には正解がありません。本書では、著者自身のフィルム撮影の経験や、国内外の様々なフィルム写真を見てきた結果、自分なりに作り上げたフィルム感をデジタルの編集プロセスに落とし込んでいます。願わくは、皆様が本書を通じて色調やトーンのコントロールを身につけ、楽しみながら自分好みのフィルム再現を見つげられますように。

嵐田 大志

序章

「フィルム」について

フィルム風とは

● フィルム写真のブーム

近年、フィルムカメラで撮られた写真が Instagram などの SNS を中心に静かなブームとなっています。長らく減少の一途をたどっていたレンズ付フィルム「写ルンです」の販売が 2015 年頃に増加に転じたことや、インスタントカメラ「チェキ」の年間販売台数が 2018 年に 1,000 万台を突破したニュースは記憶に新しいかと思います。ムーブメントの中心を担っているのは、デジタルカメラの登場以前にフィルムカメラを使っていた 40 代以上の層というよりは、フィルム全盛時代を知らない 20 代以下の若年層だといわれています。一部の若者の間では「写ルンです」が「しゃるんです」で通っており、これはフィルムの主力ユーザーが交代したことを感じさせる事象のひとつといえるでしょう。

一方、Instagram におけるフィルム関連のハッシュタグに目を向けると、投稿件数が 100 万件以上のタグがずらりと並び、フィルムがほんの一部の人たちによるムーブメントではないことがわかります。

# フィルム	240 万件
# フィルムカメラ	230 万件
# フィルム写真	160 万件
# フィルムに恋してる	120 万件

(2020 年 3 月現在)

● フィルムの魅力とは？

デジタルカメラの出荷台数がフィルムカメラを逆転したのは 2000 年、なんと今から 20 年も前に遡ります。2018 年にキヤノンがフィルム一眼レフのフラッグシップ「EOS-1V」の販売終了を告知。2019 年 7 月現在において新品で買えるフィルムカメラは、ニコンの F6 やライカの M-A など片手で数えられるほどに減少しました。このような中、なぜフィルムを使い続ける人たちがいるのでしょうか？ フィルムの魅力を、プロセスとアウトプットの 2 つの切り口で整理すると、概ね以下になるかと思います。

プロセス面の魅力

- ・現像するまで撮影結果がわからないというドキドキ感を味わえる
- ・(コストがかかることもあり) デジタルと比べて 1 枚 1 枚よく考えて撮るようになる
- ・シャッタースピードや絞りなどを自分でコントロールして楽しめる (主に機械式のモデル)

アウトプット面の魅力

- ・デジタル写真にはない質感や色合い
- ・感光などの偶発的なエフェクト

今や 35mmフルサイズのデジタルカメラは、撮像面積が 1.6 倍もある中判フィルムの画質をも超えたとされています。ISO409600 という驚異的な感度が用意されたカメラが登場するなど、デジタルカメラはもはやフィルムでは考えられない領域に到達しています。

このように技術が目覚しく発達していく中で、興味深いことにフィルム全盛時代を知らない世代が、高画質とは異なるベクトルに価値を見出しているのです。

● わが国のフィルム文化

わが国のフィルム文化は、世界的に見ても独自の進化を遂げてきました。同じ銘柄のフィルムであっても、後処理の違いから、例えば欧米で撮られた写真と比べて大きく雰囲気異なります。中華圏では日本風のフィルム写真はしばしば「日式」と呼ばれ、日本固有の作風と見なされています。

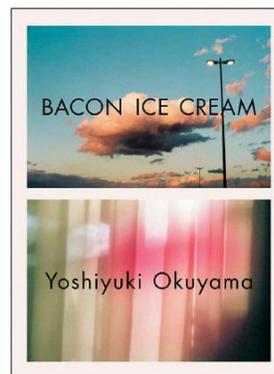
日本式のフィルム写真はSNS時代に形成されたようにも見えますが、実はSNSの登場以前から現在の日本のフィルム文化に通じる土壌がありました。1995年にHIROMIXがデビューして以降、川内倫子や市橋織江といった女性写真家の活躍が目立つようになりました。これらの女性写真家の傾向としては、私的で叙情的、時には刹那的でもあり、それまでの男性的な視点と大きく異なる写真観を打ち出していました。そして、こうした世界観を表現するために、柔らかな色合いやトーンが作りやすいカラーネガフィルムが選好されました。このムーブメントはやがて男性写真家にも波及し、近年の写真家では川島小鳥や奥山由之らの作品につながっているように見えます。こうした世界観は、デジタルカメラしか知らなかったSNS世代にも「エモい(エモーショナルな様)」と捉えられ、爆発的に広まったと推測しています。



「Gift」市橋織江写真集
MATOI PUBLISHING
実業之日本社



「未来ちゃん」川島小鳥写真集
ナナロク社



「BACON ICE CREAM」奥山由之
PARCO 出版

● 順風満帆ではないフィルム市場

ここまでの話の流れでは、フィルムを取り巻く環境は一見、良化しているように思えます。しかしながら、大きな流れにおいてはフィルムの事業環境は決して順風満帆とはいえません。写ルンですやチェキなど一部で健闘している製品はあるものの、フィルム市場は2006年から年率10%超の下落を続けており、2010年にはカラーフィルムはピーク時(2000年)の10分の1の規模となりました。数多くのフィルムが生産終了となり、今やフィルムの選択肢は数が限られる状況です。現存するフィルムに関しても値上げが相次いでいます。例えばKodak Portra 400(120フィルム5本入り)は、量販店価格で2019年12月現在で税込み約6,500円とすっかり高級品となってしまいました。現像してCD-Rに焼いてもらうのに1,000円あまりかかるとすると、67判(フィルム1本で10枚撮り)では1シャッター当たりなんと約240円かかる計算となります。フィルムを製造するメーカー側としても、生産を維持するために値上げせざるをえない状況ですし、残念ながら今後も生産終了や値上げが続く可能性が高いでしょう。



● デジタルでフィルムを再現する意義

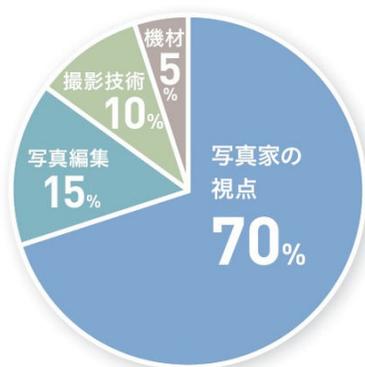
筆者はフィルムが大好きです。デジタルカメラの画質がどれだけよくなっても、フィルム写真の「0と1の間にある雑味」のような味わいには変えられません。

一方で、前述のとおりフィルムを取り巻く環境は悪化の一途をたどっていて、経済的に気軽に使えるものではなくなってきました。そのような状況に立たされたとき、デジタルカメラでもフィルムのような空気感を再現できたらとか、もし「無限に使えるフィルム」があれば、とか考えてしまうのです。そんな思いから、私はAdobe Lightroomを購入し、参考となるフィルム写真を見ながら、デジタル画像を編集し始めました。2016年のはじめ頃には、Instagramにて「#デジタルでフィルムを再現したい」というハッシュタグを作り、フィルムライクに編集した写真の投稿を始めました。ほどなくして自分以外のユーザーによる投稿も見られるようになり、このタグは今や投稿数が62万件(2020年3月現在)を超えるほどに成長しました。

デジタルでフィルムを再現するメリットはコスト面だけではなくありません。フィルムは基本的に写真店やラボなど他人の手を介して写真となります。いふならば、デジタルの画像編集プロセスを第三者にお任せする状態なのです。それ故に、自分の思ったような写真を作り上げるのが非常に難しいという側面があります。もちろん、ラボとの密なやり取りと調整を経て、自分好みに仕上げてもらうこともできますが、フィルム市場縮小に伴い、写真店やラボの絶対数も減っており、自分の感性にぴったりとハマるところを探すのも苦労する時代です。その裏返しで、デジタルのメリットは撮影から編集まですべてのプロセスを自分でコントロールできることといえます。

● デジタル時代における写真編集の重み

写真撮影において大事なことは何でしょうか？ 露出を自由自在にコントロールする技術でしょうか？ それとも機材を使いこなす知識でしょうか？ この問いに対する答えは、撮影スタイルや被写体などによって多種多様かと思えます。さまざまな考え方があるかと思いますが、筆者にとっての写真撮影における要素にウェイト付けをすると、下の円グラフのようになります。



単体露出計を使って絞りやシャッタースピードを決定する「まともに写すこと」自体が特殊技術だった頃と異なり、今はシャッターを押せば誰でも写真が撮れる時代となりました。ひと昔前はプロしか撮れなかったような背景ボケが美しいポートレートさえ、適切な機材（単焦点レンズをマウントした一眼など）を渡せば、幼稚園児でも撮れてしまいます。

そんな時代だからこそ、「写真家の視点」すなわち

- ◆ コンセプトやテーマを持ち、それを写真に落とし込む力
- ◆ 誰もが通り過ぎてしまうような事象に気付く感受性
- ◆ 他人と異なる角度や切り口で世の中を捉える視点

といったことが以前にも増して大事だと思っています。

このようなことから、写真の大部分はシャッターを切る前にすでに完成していると考えていますが、一方でシャッターを切った後の写真編集作業は、写真のコンセプトをより明確にし、世界観を増幅させる重要なプロセスと捉えています。

筆者の場合、ノスタルジーをコンセプトに写真を撮っていることもあり、デジタルの先鋭な画質より、人間の記憶のような少し曖昧で淡い雰囲気表現したいこともあり、フィルム風に編集しています。

● フィルム風とは

具体的な編集プロセスの説明に入る前に、そもそもフィルム風とはどのようなものかを考えてみたいと思います。

皆さまはフィルム風と聞いて、どのような写真を思い浮かべますか？ 答えは千差万別かと思えます。森山大道のようなアレやブレを活かしたモノクロ写真を思い浮かべる人もいれば、市橋織江の印象画のような写真をイメージする人もいるかと思えます。フィルムとひと口にいても、モノクロなのかカラーなのか？ ネガなのかポジなのか？ 35mmなのか中判なのか？ といった要素の組み合わせにより、多種多様なアウトプットとなるのです。それ故に、「フィルム風」という言葉はなかなか厄介でもあります。

● PRO400H は「青く」ない!?

さらに厄介なのが、ネガフィルムです。現像したとき、すでに写真として完成しているポジフィルムと異なり、ネガフィルムには決まった色合いがありません。ネガフィルムそのままだと画像が反転していて、これを正転したうえで補正しなければ写真にはならないのです。試しに同じフィルムを使って同じ条件下（露出や構図など）で撮影し、複数の別の写真店に出してみてください。きっと全然違うアウトプットになると思います。それはなぜか？ 現像からスキャンまで一通貫で行うことができる写真現像機（ミニラボ）の「自動補正」で仕上げるところもあれば、独自のノウハウに基づき手動で補正を行うところもあるなど、プロセスがまちまちなためです。デジタルカメラに当てはめると、写真データを Lightroom の自動補正ボタンをクリックしただけの場合と、マニュアルで各種パラメーターを補正した場合とで、仕上がりが大きく異なってくるのと同じなのです。

【参考】フィルム現像方式の違い

方式	プロセス	取り扱い店舗	
アナログプリント	引き伸ばし機を使い、フィルムに光を当てて印画紙にプリントする。ラボマンが1枚1枚、焼き込みや覆い焼きといった「写真編集」を行う。	プロラボや一部の写真店でしか行っておらず、対応店舗数は非常に少ない。	
デジタルプリント	写真現像機でフィルムをスキャンし、デジタルデータ化したものをプリントする。 【主な写真現像機】 ●富士フィルム フロンティア ●ノーリツ QSS	自動補正	ほとんどのチェーン系の写真店が写真現像機による自動補正。
		マニュアル補正	主に若者をターゲットとした非チェーン系の写真店。一部のチェーン店も簡単な対応はしてくれるとの情報もある。

富士フィルムが海外市場をターゲットに発売した富士フィルム PRO400H というフィルムがあります。写真が青味がかかった幻想的な雰囲気になるという触れ込みで人気のあるフィルムです。しかし、海外で撮られた PRO400H の写真を見てみてください。アジアは日本の影響を受けているので、できれば欧米のほうの作品をご覧ください。必ずしも青味がかかっていないとお気づきになるかと思います。むしろ、かなり忠実な絵作りです。考えてみれば「プロフェッショナル」をうたう商品で特定の色に傾けるはずもないのですが……。推測の域を出ませんが、PRO400H の発売当初は海外のみで販売されており、フロンティアに補正プロフィールがない中、輸入版のフィルムを自動補正してみたら、シアンが強めに出て「いい感じ」になった。そうした偶発的な仕上がりが徐々に市民権を得て、今の「PRO400H= 青味がかかった」というイメージにつながったのかもしれませんが。



絶対的な正解が存在しないネガフィルムについて、本書では日本のフィルムユーザーの大多数が想起するであろう絵作りを目指して編集することとします。例えば、前出の PRO400H については日本人がイメージする青味がかかった仕上がりを目指しています。どうしても筆者の主観が介入せざるをえないので、その点をご理解のうえ読み進めていただければと思います。



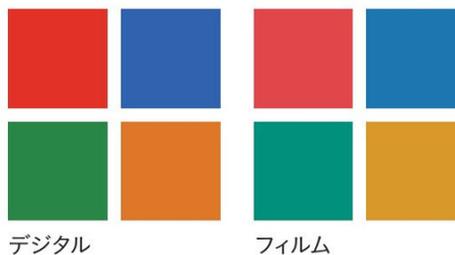
富士フィルム PRO400H 風に編集した写真

● フィルムはデジタルと何が違うのか

こうした前提のもと、フィルムがデジタルと比べてどのように違うのかを整理したいと思います。

① カラーバランス

両者の違いが最も顕著なのは恐らくカラーバランスではないでしょうか？ 筆者は同じシーンでフィルムとデジタルを撮り比べることが多いのですが、同じ撮影条件にも関わらずブルーやグリーンなどの発色が随分と違うと感じます。あくまでイメージですが、右の図のようにパレットにまったく違う絵の具を載せて絵を描いているような感覚です。



② ダイナミックレンジ（最大露光域）

ダイナミックレンジ（フィルムでは最大露光域と呼ぶ）とは、写真の最も明るい部分から最も暗い部分までどれだけ広く再現できるかの幅のことで、これが広ければ広いほど白飛びや黒潰れが少なくなります。今やデジタルカメラは、カラーネガフィルムを凌ぐダイナミックレンジを表現できるといわれています。確かに、デジタルでははっきりと再現できた暗部がフィルムでは黒潰れする場合などが散見されます。一方で、数値上のダイナミックレンジが劣るフィルムですが、デジタルでは白飛びしてしまっているような空も、フィルムではしっかりと雲のテクスチャが再現されていたりします。こうしたピーキーなダイナミックレンジ感がフィルムらしさを生み出しているように感じます。

③ 粒状感

つるつとしたデジタルとは対照的に、フィルムの特徴としてザラつとした粒状感が挙げられます。ドットで構成されるデジタルと違い、フィルムはハロゲン化銀の結晶によって構成され、この結晶が大きいほど「粒状性が荒い」とされます。また、一般的にはフィルムのフォーマットが小さくなるほど、写真にした際の拡大率が上がるため、粒子が目立ってきます。例えば 35mmフィルムの1コマを2分割にして使用するハーフカメラなどは粒状感が強い傾向にあります。



④ ホワイトバランス

ホワイトバランスを自由自在に変更できるデジタルカメラと異なり、フィルムは基本的にホワイトバランスがデーライトと呼ばれる色温度に固定されています（約 5500K）。デジタルで例えると、常にホワイトバランス「晴れ」で撮影しているようなものとイメージしてください。そのため、光源によって色かぶりが起こる点も特徴的です。例えば白熱灯を光源に撮影した場合、デジタルカメラではホワイトバランスをオートに設定しておけばニュートラルな色合いに補正してくれますが、フィルムで撮ると赤茶っぽい仕上がりがとなります。

本書ではこうしたフィルムとデジタルの特性を踏まえたうえで、さまざまなシチュエーションにおけるフィルムライクな編集方法を紹介していきます。

第1章

デジタルでフィルムを
再現する編集プロセス

Lightroom 編集の基礎

フィルムを再現する編集に進む前に、Lightroomを基本について説明したいと思います。すでにLightroomをかなり使いこなしている方が多いかと思うので、ここは斜め読みしていただいてもかまいません。なお、本書はLightroomを使ってフィルムを再現することを目的としていますので、基本といいつつも、かなりフォーカスを狭めた内容としており、例えば「カタログの概念」といった一般的な項目は割愛しています。

● Lightroomで できること、できないこと

Adobe社が提供する写真編集アプリケーションには主に2つ、LightroomとPhotoshopがあります。

Lightroomを使う主な目的は写真のトーンやカラーの補正であり、本書ではLightroomを使った編集を中心に取り上げています。例えば、逆光で暗くなってしまった部分を明るくしたり、空の色を印象的なブルーにしたりといった補正は、すべてLightroomで可能です。

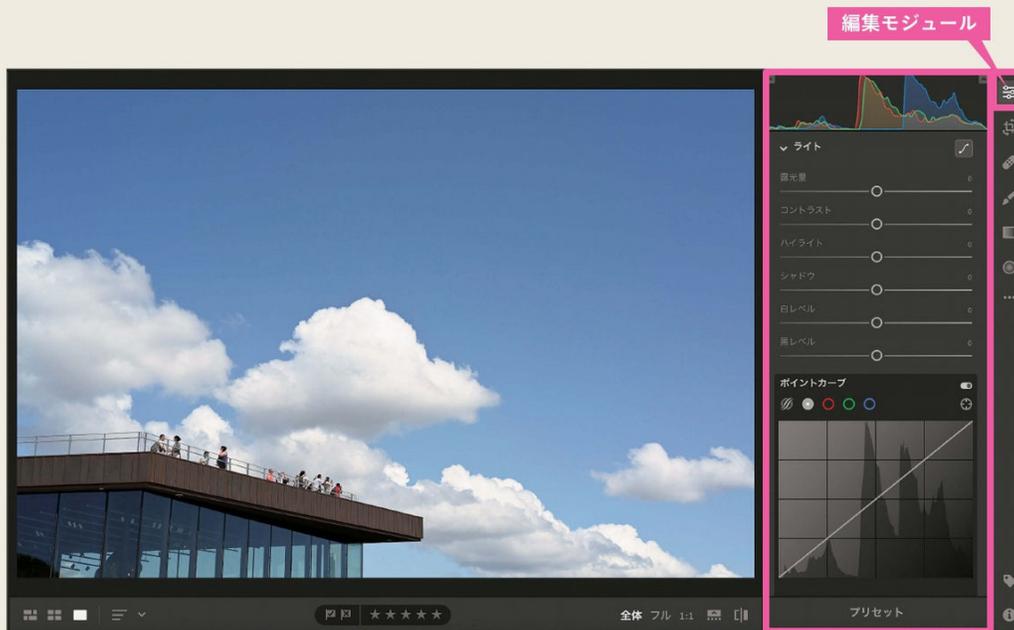
なお、本書では一貫してこれらのプロセスを「編集」と呼称していますが、RAW画像を補正する

「RAW現像」とほぼ同義語です。RAWのほうが編集耐性が高いのですが、JPEGの編集でも問題ありません。

他方、Photoshopはレイヤー機能を駆使して、より複雑な写真編集を可能としています。例えば、1枚の写真を複数のレイヤーに分けたうえでハイライトとシャドウそれぞれを補正することでダイナミックレンジの広い写真を作ったり、複数の写真を合成してこの世に存在しない景色を創り出したり。あるいは肌のレタッチをする場合など。こういった場合はPhotoshopの出番です。Photoshopのハウツーは他に譲って、本書ではLightroomを使ったカラーやトーンの編集を取り上げていきます。

Lightroomの基本構成とそれぞれの効果

それでは、いよいよLightroomの説明に移ります。Lightroomの画面右端には6つのモジュールがありますが、本書では主に編集モジュールを中心に取り上げていきます。

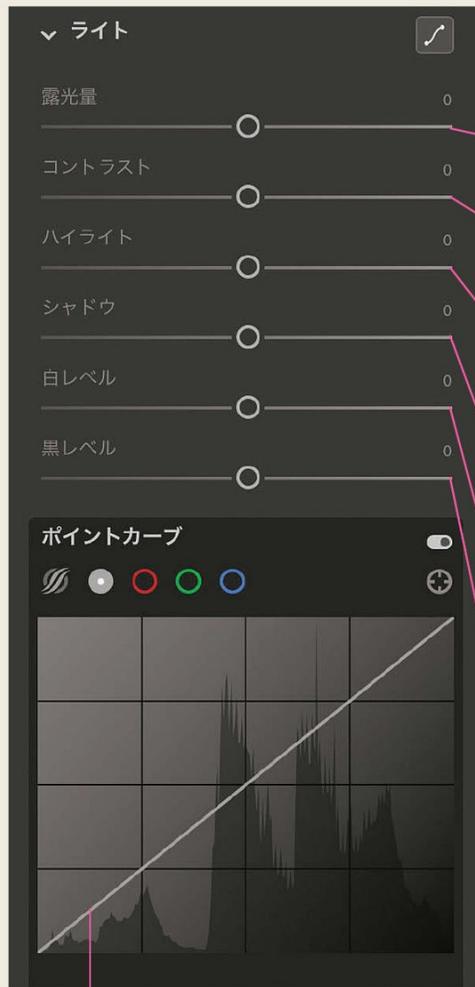


Lightroomの編集モジュールは6つの「パネル」と呼ばれるセクションで構成されています。フィルムの再現にとって重要性が高いのは、①ライト、②カラー、③効果の3つ。当該目的においては、残り3つのパネルはほぼ使うことがありません。筆者は④～⑥のパネルを非表示にしています。

編集モジュールの基本構成

- | | | |
|---------|---|------------------------|
| ① ライト | } | フィルムの再現において中心的に使用するツール |
| ② カラー | | |
| ③ 効果 | | |
| ④ ディテール | | |
| ⑤ レンズ | | |
| ⑥ ジオメトリ | | |

① ライト



明るさやコントラストなど、写真のトーン(調子)を整えるパネルです。最も基本的でありながらも、写真の印象を大きく左右するツールです。

露光量

写真全体の明るさを調整する。

コントラスト

明暗差を強めたり、弱めたりする。コントラストが高いとはっきりくっきりし、低いと柔らかな印象となる。

ハイライト

写真の明るい部分の明るさを調整する。例えば、白く飛び気味の雲の表情を取り戻したいときに使用する。なお、完全に白飛びした部分に関しては、ハイライトを補正しても効果はなく、撮影時に白飛びに留意する必要がある。

シャドウ

写真の暗い部分の明るさを調整する。例えば逆光のポートレートにおいて暗くなった部分の明るさを持ち上げて、何が写っているかを見せたい場合に使用する。

白レベル

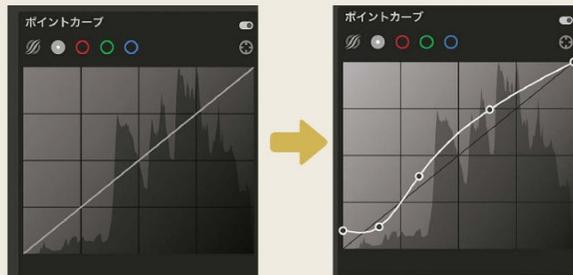
ねらいは「ハイライト」と似ているが、写真の最も明るい部分のみを補正できる点が異なる。「ハイライト」での調整と比べて、メリハリの付いた結果となる。

黒レベル

「シャドウ」の効果と似ているが、写真の最も暗い部分のみを補正できる点において異なる。「シャドウ」を使った調整よりもメリハリの効いた調整が可能。

ポイントカーブ

一般的にはトーンカーブと呼ばれるツール。対角線に伸びた線(カーブ)に点(ポイント)を打ち、そのポイントを動かすことで、写真の明るさやコントラストといったトーンをコントロールすることができる。使いこなせるようになると、上記の各種パラメーターと比べてより細かい補正が可能となる。また、R(Red)/G(Green)/B(Blue)の3原色ごとにトーンを補正することで、より複雑な色調整も可能。自由度の高いツールである一方で、慣れていないと写真の階調を損なうといった危険性もあるため、本書ではフィルムの再現においてよく使う補正方法のみ取り上げる。



2 カラー



文字どおり、写真の色を調整するためのパネルで、フィルム再現において肝となる部分です。

色温度

写真の色温度を暖色（右方向）もしくは寒色（左方向）に調整するツール。この調整だけで写真の雰囲気をごらんと変えることができる。例えば、夕焼けの写真において暖色方向に調整すれば太陽の赤っぽさを強調でき、逆に寒色方向に振れば朝日のようなクールなイメージに仕上げることができる。

色かぶり補正

写真が光源や周囲の反射などの影響などによって色かぶりを起こした場合に、マゼンタ（右方向）もしくはグリーン（左方向）に色を傾けることで、適切な色合いとなるように補正するためのツール。

彩度

彩度は写真全体の色の濃さを調整するツール。なお、オプションとして「自然な彩度」というツールもあるが、これは鮮やかさが不足した色の濃さを調整したい場合に使用する。

カラーミキサー

レッド/イエロー/ブルーなど色の系統ごとに色味や彩度などを調整することが可能で、**フィルムの再現において最も重要なツール。**

色相

簡単にいうと色味の調整に使う。例えばブルーをグリーン寄りの色味に寄せるなどの調整を行うことができる。デジタルとフィルムはそれぞれの色系統の発色が異なるので、色相の出番は非常に多い。

彩度

色の系統ごとに彩度を高くする、もしくは低くするときに使う。

輝度

色の系統ごとに明るさを調整することができる。

3 効果



主に写真の「質感」を演出するために使用するパネルです。

明瞭度

明暗差のある部分において、境目の輪郭を硬調にしたり軟調にしたりすることができる。

周辺光量補正

レンズの特性により写真の4隅が暗くなる現象を「周辺減光」などと呼ぶ。これを明るく補正する場合はスライダーを右側に、周辺減光を演出したい場合はスライダーを左側に動かす。

粒子

写真に粒子を加え、ざらざらとしたビンテージ感のある質感にしたい場合に使う。粒子のサイズや粗さを調整することもできる。



明暗別色補正

写真の明るい部分（ハイライト）と暗い部分（シャドウ）それぞれに指定した色をかぶせることができるツール。フィルムを再現する編集においては、隠し味として使用することが多く、例えば、シャドウに薄くブルーを乗せるのが王道の編集パターン。

ここまでご紹介してきたツールは、数あるLightroomの機能のほんの一部にすぎませんが、本書の目的であるフィルムの再現という点においては必要十分でしょう。

では実際に、これらのツールを用いて写真をフィルムライクに編集していきましょう。

フィルム再現の手順

それでは、実際に写真を用いてフィルムを再現する編集を行っていきましょう。それぞれのプロセスにおいて動かすパラメーターの数値以上に、どのような効果をねらっているかがポイントとなります。



写真編集の練習にあたっては、色彩要素が多めの写真を選ぶことをおすすめします。特定の色を編集した際に、他の色に対してどのような影響があるのか、あるいは全体のバランスをどのように取っていくのかの訓練になります。

上の写真は空や海のブルー、植物のグリーン、子どもたちの肌色など、筆者自身が頻繁に撮影する要素が集約されているため、この写真を例にして編集ケースのベースを紹介していきます。

Step 0

仕上がりをイメージする

編集作業を開始する前に、どのような写真に仕上げたいかをイメージすることが大事です。ゴールのイメージがないままに、行き当たりばったりで編集を始めると、途中で迷いが生じ「編集迷子」になってしまいます。最終的なアウトプットを頭の中で言語化するだけでも大きな違いが出ます。この写真について、筆者は以下のコンセプトをもとに編集しました。

- ・夏休み感、懐かしい雰囲気
- ・Kodak Portra 400のような色合い
- ・彩度が全体的に低いながらも、ブルーは濃いめに出したい

Step
1

基本補正

はじめに編集モジュールの「ライト」を使い、露光量やコントラストといった基本的な補正を行います。こちらの写真は、真夏のちょうど太陽が真上にある時刻で撮影したこともあり、光線が非常に硬調となりました。また、木陰に入っている子どもたちが暗くなっているのが気になるところです。そこで、次のようにライトを補正しました。



露光量

白飛びに注意しながら上げる。

コントラスト

元が硬調（コントラストが高い）なので、眠くならない程度に下げる。

ハイライト

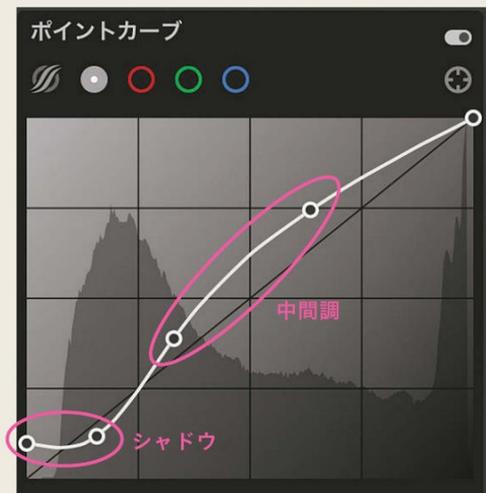
空の青さを取り戻すために大幅に下げる。

シャドウ

暗い部分のディテールが見えるように少し上げる。

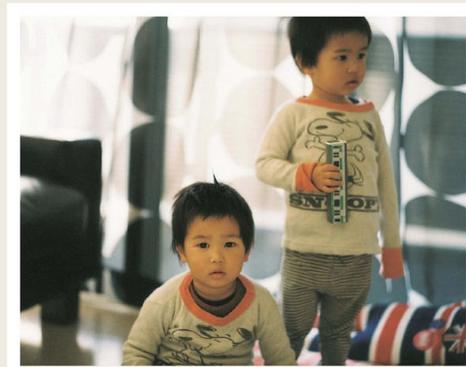


ハイライトを下げ、シャドウを上げたことで白く飛び気味であったり、黒く潰れ気味だったりした部分のディテールが浮かび上がり、ダイナミックレンジが広いネガフィルムのトーンに近づきました。



基本補正の仕上げとして、トーンカーブを使って中間調とシャドウを持ち上げます。

ここでポイントとなるのが、シャドウのトーンカーブを横軸と平行となるくらいに調整していることです。これにより、シャドウ部分の黒が「濃いグレー」のように表現されます。ネガフィルムで撮



Kodak Portra 400 を使って撮影。光量がやや不足しており、暗部が浮いている。

られた写真は暗部が締まっていない傾向が見受けられます。こうした特徴は、光量の少ないシーンで露出不足となった場合において特に顕著に表れ、フィルムライクなトーン作りにおいて肝となるものです。



トーンカーブの調整により、暗部のトーンがフィルムのようにグレー系に変化しました。

Step
2

カラー調整

続いて、フィルムの再現において最も重要なカラーの調整を行います。はじめにカラーミキサーの機能を使って色系統ごとに色相 / 彩度 / 輝度を調整し、フィルムライクなカラーバランスを作っていきます。フィルムの再現においては特に重要なのが、グリーン / ブルー / オレンジの調整です。

● グリーンの調整

冒頭で触れたとおり、ネガフィルムに決まった色はありませんが、SNS時代のフィルムユーザーが好むKodak Portra 400をリファレンスとした

場合、グリーンはやや青味がかり、彩度がかなり低い傾向にあるように感じます。

この点を意識したパラメーターは次のとおりです。



色相

プラス（ブルー寄り）にする。

彩度

思い切ってマイナスにする。

グリーンは他の色と比較して、色相のパラメーターを少し動かすだけで大きく変化します。色相をプラス寄りになると色飽和を起こしやすくなり

ますので注意してください。彩度を下げることでバランスを取りましょう。下の例では、色相 +10 くらいがほどよいと判断しました。



色相 0



色相 +10

グリーンがややブルー寄りに変化、ナチュラルなフィルム再現。



色相 +20

ブルーに寄せすぎた。また、色飽和を起こしかけている。

● ブルーの調整

標準的なデジタルカメラのブルーはややパープルに寄る傾向があります。フィルムは逆にグリー

ンに寄る傾向があります。また、光線状態やカメラ、レンズにもよりますが、ブルーが暗く濃く出る傾向が見られます。

これらの点を踏まえた調整が次のとおりです。



色相

マイナス（グリーン寄り）にする。

彩度

元画像の光線状態などにより、適宜マイナスもしくはプラスにする。

輝度

マイナス（暗く）にする。

ブルーをグリーン（色相マイナス側）に寄せると、雰囲気ガラッと変わります。そのため、楽しくなっ



色相 0



色相 - 25

ほどよくグリーン寄りの空で、流行り廃りのないナチュラルなフィルム再現。



色相 - 50

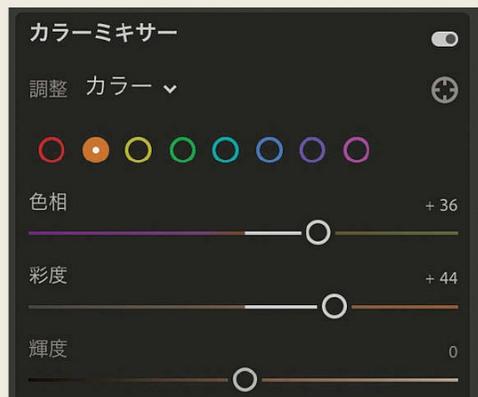
過剰にグリーンに寄せすぎた。ぱっと見のインパクトはあるが、見ていて疲れる色合い。

● オレンジの調整

オレンジの調整は主に人肌の色再現においてフィルムらしさを演出するために行います。当然ですが、人物が写っていない場合は本調整の効果

はほとんど感じられないと思います。

フィルムの再現においては、オレンジの赤味を引いてイエローに寄せていきます。その結果、彩度が下がった印象となりますので彩度を上げてバランスを取ります。



色相

プラス（イエロー寄り）にする。

彩度

色相をプラスにすることで、人肌の血色が悪く見えるのでプラスにしてバランスを取る。



色相 0



色相 + 36

カメラメーカーによって異なりますが、左の写真のように、人肌の再現において赤味を加え、健康的な印象を目指す傾向があります。

フィルムの再現においては、健康的に見せることが必ずしも最優先事項ではありません。

色相をプラスに振ることで、赤味を減らします。赤味が減った分、彩度が低くなり血色が悪くなるため、彩度を上げてバランスを取ります。

その他の色については、次のように補正しました。

	レッド	イエロー	アクア	パープル	バイオレット
色相	0	0	0	0	0
彩度	-29	-24	0	0	0
輝度	0	0	-25	0	0

● 色温度や色合いの調整

個別に色調整を行ったうえで、写真全体の色調を色温度や色かぶり補正で微調整します。本来は

「白い物を白く」再現するためのツールですが、フィルムの再現においてはあえて「色を転ばせる」ために使います。



色温度

色温度を高く (-12)

STEP1 (P.28) で調整したシャドウが少し青かぶりするくらいに調整。

彩度

グリーン側に (-16)

全体が軽くグリーンかぶりするように調整。



以上のカラー調整によって、彩度の低さと鮮やかさが同居したようなフィルムらしいカラーバランスとなりました。

Step
3

効果の補正

さて、ここからは仕上げの味付けとなります。劇的な変化はしませんが、より一層フィルムライクにするために必要なプロセスとなります。

● 明暗別色補正

前述のとおり、フィルム再現における隠し味のような補正です。写真の明るい部分（ハイライト）と暗い部分（シャドウ）それぞれに色をかぶせていきます。

Step2で色温度を高く（青く）していますが、これに対して暖色系の色を少し足し直すことでバランスを取っています。このようにフィルムの再現においては、相反するようなプロセスを組み合わせることによって微妙なニュアンスを表現することがあります。



ハイライト

色相 **317**

彩度 **9**

パープル系の色をごく薄くかぶせる。

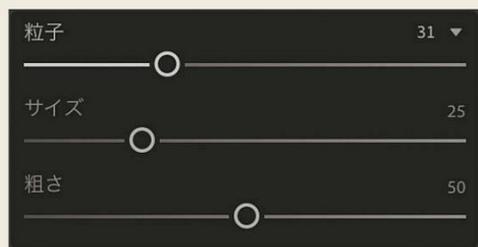


シャドウ

色相 **40**

彩度 **10**

オレンジ系の色をごく薄くかぶせる。



最後に粒子を加えて、少しざらっとした質感に仕上げます。使用するカメラの画素数などによって粒子の適用量は変わってきますが、近年のカメラであれば左のように30前後の適用量がほどよいと思います。大きくトリミングをした場合は、画素数が減るため、それに伴って粒子の適用量を減らすとよいでしょう。これで編集プロセスは完了です。

比較して検討する

編集前はやや硬調だった写真が、ネガフィルムで撮ったような柔らかなトーンと色調になりました。

Before



After



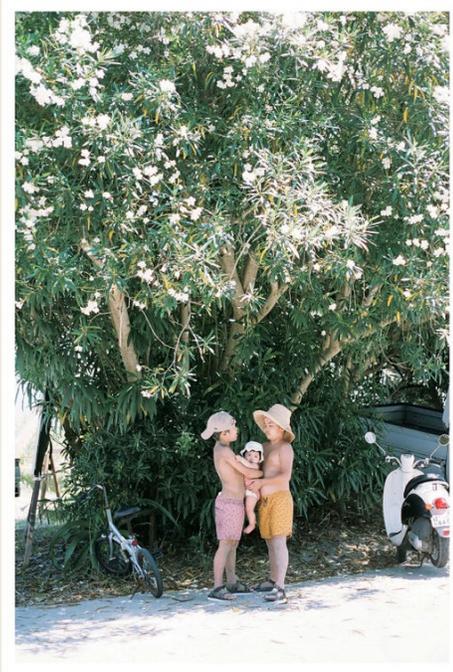
実物のフィルム写真との比較

構図はかなり違いますが、同時にネガフィルムで撮影した写真と比較しても、近い雰囲気となり、2枚を並べても違和感がない状態になりました。

デジタルで再現したフィルム



Kodak Portra 400 (フィルム)



同日同時刻に撮影したフィルム写真を参考に編集するのも、フィルムの特徴を理解するうえでおすすめです。光の条件が同じため、色合いを近づけていく作業が比較的容易かと思います。

また、自分で撮影した写真でなくても、お気に入りのフィルム写真を参考に編集をしてもよいでしょう。その場合はなるべく似たような光線状態の写真を選んでください。

プリセット作成による編集作業の効率化

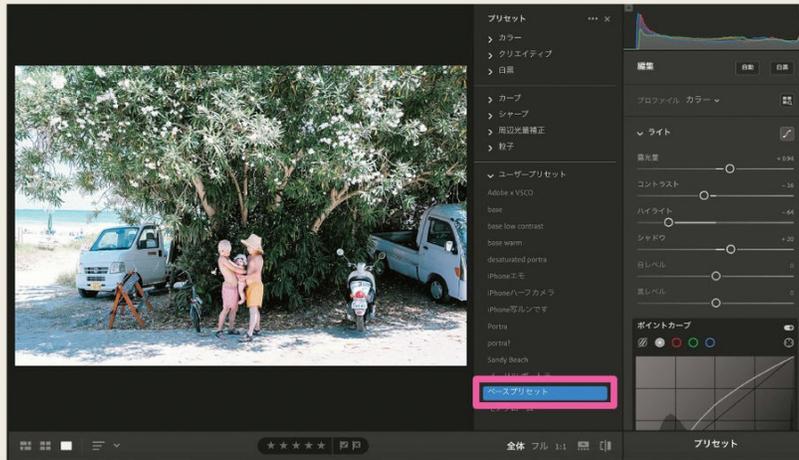
ここまでで、フィルム再現の編集プロセスを説明してきましたが、写真1枚ごとに同じ作業を繰り返すのは非常に骨が折れます。数百枚の写真を編集する必要があるときはなおさらです。そこで、共通する作業についてはLightroomのプリセット作成機能を使って、1クリックで効率的に編集できるようにしましょう。

● プリセットの作成方法

次の手順でP.27～34の編集プロセスをプリセットとして登録していきます。



- 1 編集モジュール下部の「プリセット」をクリック。
左側に展開するプリセットのメニューバーから「プリセットを作成」を選択。
- 2 次の画面が表示されたら、「ベースプリセット」など任意のプリセット名を入力し、保存をクリック。



- 3 作成したプリセットは、「ユーザープリセット」に追加され、これをクリックすることで編集内容が適用。

「ベースプリセット」の xmp ファイルを以下からダウンロードし、Lightroom に読み込むことで使用することもできる。

<http://www.genkoshia.com/download/fildigi/basepreset.zip>

- ① 「ベースプリセット .xmp」をダウンロードする。
- ② Lightroom の編集モジュール下部の「プリセット」を開く。
- ③ 「プリセット」のメニュー（・・・）の「プリセットを読み込み」から「ベースプリセット .xmp」を選択。
- ④ 以上のプロセスでプリセット一覧にベースプリセットが加わり、写真への適用ができるようになる。

追加が反映されない場合は Lightroom を再起動する。

※上記は Lightroom CC での手順です。お使いの Lightroom のバージョンや OS によりプリセットの登録方法は異なりますので、詳しくは Adobe 社の Web サイトをご覧ください。

● プリセットは万能ではない

市場ではさまざまなプリセットが提供されています。フィルム再現系で有名なところだと、米国の VSCO 社が提供するモバイル向け編集アプリを筆者も愛用しています。

とても便利なプリセット、1クリックで憧れの写真家に近いテイストになる場合もありますが、なかなか思ったようにならないことも多いのではないのでしょうか。ピーキー（極端）な効果をねらったプリセットになるほど、写真の光線状況や光源の変化によって使いどころが難しくなるはずですが。

本書で用意した「ベースプリセット」は極端な補正を行っていないため、汎用性が高いプリセット

ではあるものの、それでも万能ではありません。1クリックで思ったとおりのフィルム再現になることは少ないでしょう。最終的には、プリセットを適用しつつ自分自身でトーンやカラーをコントロールできなければ宝の持ち腐れとなるのです。本書ではプリセットを活用しつつも、Lightroom をマニュアルで操作して、自分の思い描いたとおりのフィルム風に仕上げるスキルを身につけることを目的としています。

次の章からは、さまざまなシチュエーションで撮られた写真を実際にフィルムライクに編集するケーススタディを通じて、こうしたスキルを学んでいきます。

第2章

シーン別フィルム再現
— 屋外編 —

01

Outdoor
Daytime

爽やかなカラーネガ風の再現

【作品タイトル】 異国の海と少年

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上がりをイメージする

Beforeの写真は、面積の大部分を占める空の青がややマゼンタ寄りで、撮影したときの爽やかな印象が損なわれていたため、空の色を重点的に編集したいと思いました。撮影地が海外であることから、スティーブン・ショアをはじめとするニューカラーの写真家たちの少し暖かみのある色合いを目指します。

Step 1

写真を整える

P.37～38で作成したベースプリセットを適用したのち、水平垂直の調整、トリミングなどにより写真の構図を整えます。撮影段階で完璧にフレーミングするに越したことはないのですが、筆者はトリミングを積極的に活用しています。この写真では少年が主題であることを明確にするために、トリミングによりズームイン。また、やや右肩下がりとなっていた水平を角度補正ツールで調整しました。



この写真では少年が主題であることが明確になるようトリミングし、水平を整えた。



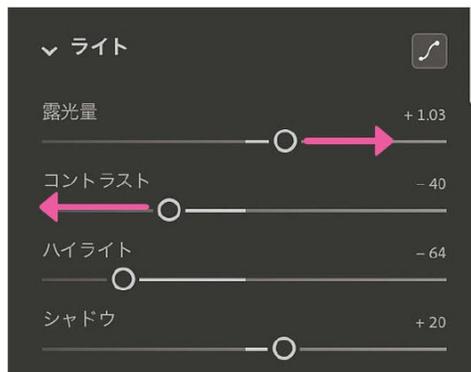
角度補正 0 ▶▶ -0.22

水平がわずかに右に傾いていたので、マイナス方向に補正した。

Step 2

基本補正を行う

ライトのパネルを使って、基本的な補正を行います。



露光量 +0.94 ▶▶ +1.03

ハイキーで爽やかにしたいため、露光量を少し上げる。

コントラスト -16 ▶▶ -40

太陽がほぼ真上にある状況でやや硬調だったため、コントラストを下げる。



Step 3

カラーを調整する

[カラー]

色温度や色かぶりのパラメーターを微調整し、写真全体の色合いをイメージに近づけます。

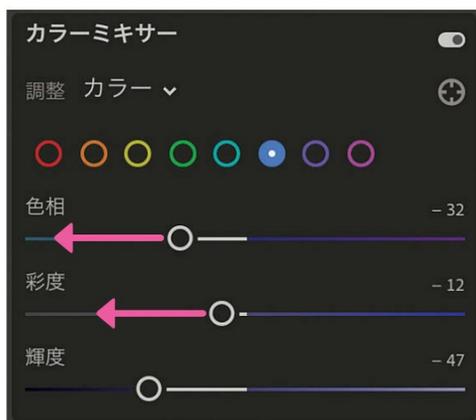


色温度	- 12 ▶▶ - 9
-----	-------------

ベースプリセットは色温度を高めめに設定しているが、やや黄色がかったKodak Portraっぽさを出すために色温度のパラメーターをやや暖色寄りに戻した。

[カラーミキサー]

色の系統ごとに色相や彩度などを調整します。



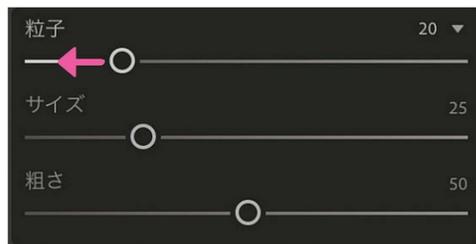
ブルー	色相	- 25 ▶▶ - 32
	彩度	- 5 ▶▶ - 12
	輝度	変更なし

ブルーをもう一段階グリーン寄りに。元画像における青系統の彩度が高いため、彩度を抑えた。

Step 4

効果を調整する

最後に粒子や明暗別色補正などを調整すれば完成です。今回は粒子のみ調整しました。



粒子	31 ▶▶ 20
----	----------

トリミングして画素数が減った分、粒子が目立ったため、適用量を減らした。

完成



全体的に明るく、マゼンタっぽさが抜けたことで、カラーネガを使って撮ったような空気感になった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

02

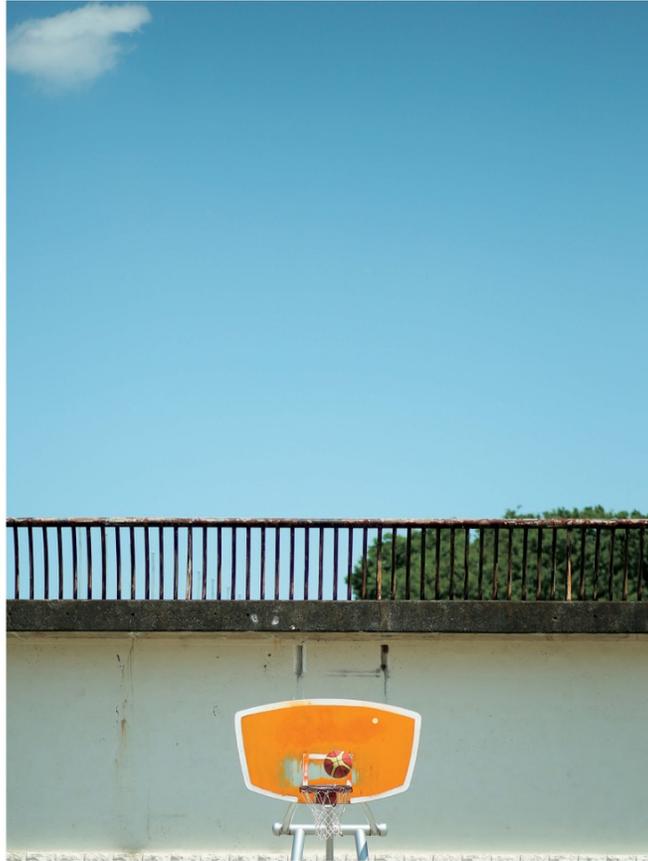
Outdoor
Daytime

明るくポップなカラーパレットに

〔作品タイトル〕 バスケットゴールと空

〔シチュエーション〕 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

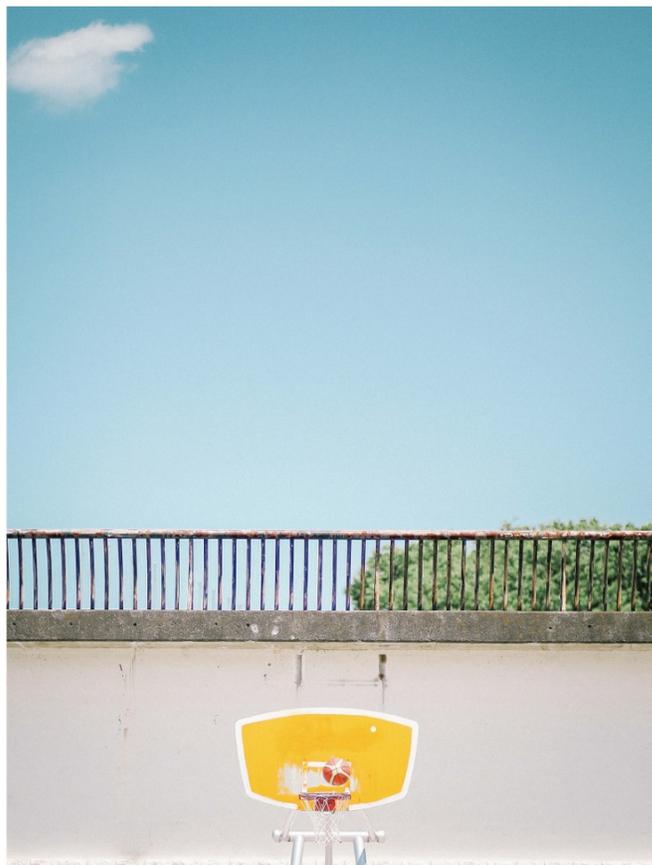
Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上がりをイメージする

Beforeの写真は、バスケットゴールとボールのオレンジをはじめ、全体的に色が沈んでいて休日の楽しい空気感が表現できていないように感じました。せっかくオレンジとブルーの補色関係が揃っているので、ポップで楽しい雰囲気を目指しました。リファレンスのフィルムはKodak Portra 400です。

Step
1

写真を整える

ベースプリセットの適用後、水平の補正やトリミングを行います。元の写真は情報量がやや多いので、ゴール下の人たちを思い切ってトリミング。縦位置で3：2のままだと間延びした印象のため、4：3のアスペクト比(縦横比)にしました。

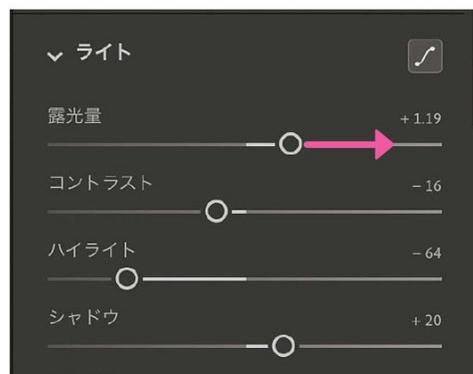


水平が左に傾いていたので、プラス方向に補正。

Step
2

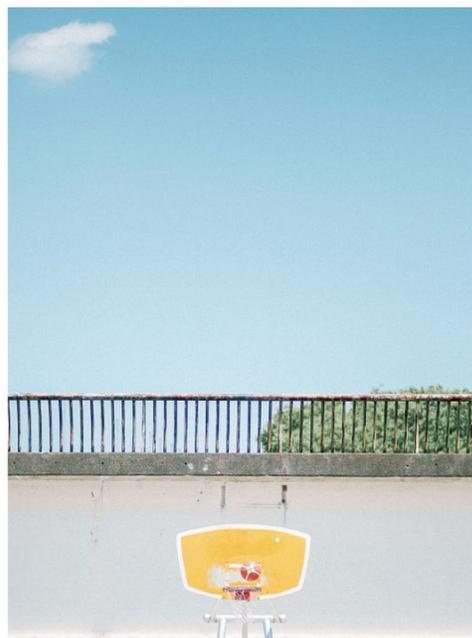
基本補正を行う

明るくポップなフィルムテイストにするために、ベストな露光量を探っていきます。



露光量 +0.94 ▶ +1.19

ベースプリセット適用ですでにイメージに近いトーンだったので、露光量のみ微調整した。



Step 3

カラーを調整する

[カラー]

温かみを感じる色合いを目指して色温度や彩度を調整します。



色温度	- 12 ▶▶ - 7
-----	-------------

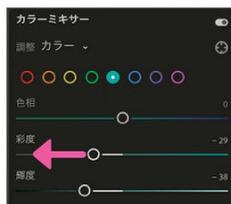
色温度のパラメーターをやや暖色方向に動かした。

彩度	0 ▶▶ + 6
----	----------

ポップさを演出するために写真全体の彩度をわずかにプラスに。

[カラーミキサー]

色の系統ごとに色相や彩度などを調整します。



アクア

彩度	0 ▶▶ 29
----	---------

ブルー

彩度	- 5 ▶▶ - 12
----	-------------

写真全体の彩度を上げたことにより、青系統の彩度がやや高い印象となったため、アクアとブルー両方の彩度を下げて落ち着かせる。

Step 4

効果を調整する

明暗別色補正や周辺光量補正でノスタルジックなニュアンスを加えます。



粒子	31 ▶▶ 20
----	----------

トリミングした分、適用量を減らした。

明暗別色補正 (ハイライト)	彩度	317 ▶▶ 335
	彩度	9 ▶▶ 10

ハイライトにかぶせる赤を少し強め、ややアンバーにする。

周辺光量補正	0 ▶▶ - 12
--------	-----------

隠し味程度に周辺減光を演出した。

完成



Before After

やや濁りがあり地味だった色合いが、明るく楽しげになった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

03

Outdoor
Daytime

あえて色を転ばせて印象的に

【作品タイトル】 満開の桜

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

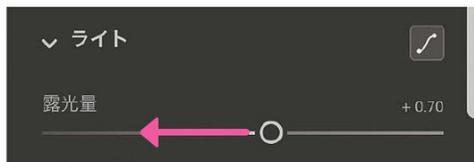
仕上りをイメージする

Beforeの写真も一般的には十分にきれいといえますが、優等生的なカラーバランスがいかにもデジタルカメラ的で味気がない印象です。少し色を転ばせたカラーネガのような雰囲気編集で再現していきます。

Step 1

基本補正を行う

この写真は、角度補正やトリミングといった写真を整えるプロセスは必要ないと判断し、ベースプリセットを適用後、基本補正から始めました。

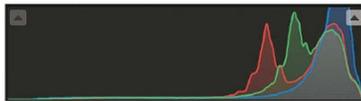


露光量 +0.94 ▶▶ +0.70

花びらが白飛び直前のため、露光量を下げる。

Memo

編 集モジュール最上部のヒストグラム上にある右側の▲をクリックすると、白飛びしている部分を赤色で表示できます（ハイライトのクリッピング）。特にハイキーに編集する場合、このツールを使って白飛びに気を付けながら露光量を補正しましょう。



白飛びしている箇所を赤色で警告。

Step 2

カラーを調整する

[カラー]

カラーネガの色かぶり感を再現するために、色温度と色かぶりのパラメーターを動かします。前章でも触れましたが、本来は「白い物を白くする」ためのツールを、逆の目的で使います。

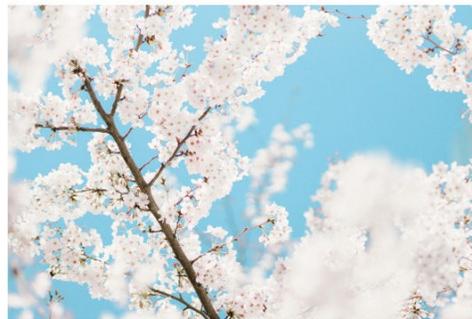


色温度 -12 ▶▶ -5

わずかに暖色寄りにする。

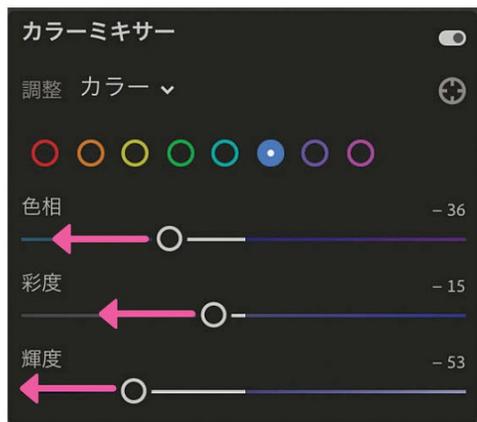
色かぶり -16 ▶▶ -35

写真全体をグリーン寄りにすることで、色かぶり感を演出。



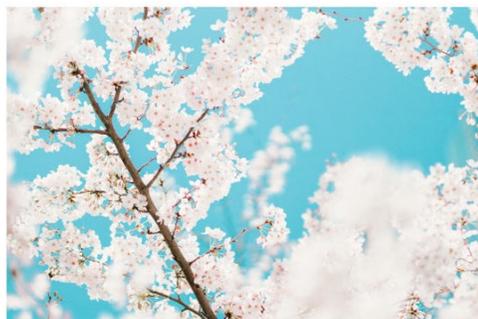
[カラーミキサー]

ブルーにおける色相、彩度、輝度を調整し、青空の色をややグリーンに寄せることで色かぶり感をより一層強めます。



ブルー	色相	- 25 ▶▶ - 36
	彩度	- 5 ▶▶ - 15
	輝度	- 47 ▶▶ - 53

筆者は流行り廃りのないベーシックなフィルム感を目指しているため、通常はここまでブルーの色相をマイナス（グリーン側）に振ることはないが、偶発的におもしろい色転びを起こすフィルムを表現するために、時折このような調整を行うこともある。



Step 3

効果を調整する

最後に桜の花びらがほんのリピンク色になるように、明暗別色補正でハイライトに色をかぶせれば完成です。



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 323
	彩度	9 ▶▶ 13

プリセットの段階ですでにハイライト側に赤味を足しているが、これを少し強めることで、桜の花びらがほんのリピンク色になる。

完成



Before After

Before の状態と比べ、あえて少しクセのある色合いに仕上げた。シンプルな画面構成のため、色でアクセントが付いたように感じる。

04

Outdoor
Daytime

爽やかなミントグリーン調に

【作品タイトル】 公園沿いの通り

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上りをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

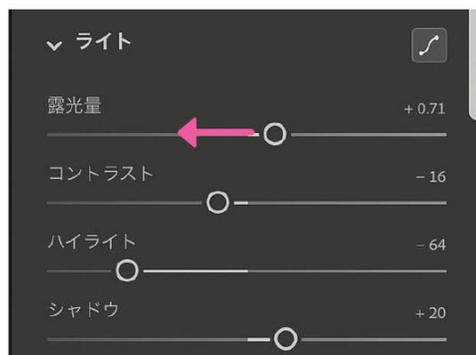
Step
0

仕上がりをイメージする

週末の公園沿いの穏やかな空気感が伝わるようにしたいと考えました。富士フィルムPRO400Hをミントグリーン風にプリントしたときのような色調をイメージして、編集を進めていきます。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用後、ライトの調整を行います。



露光量 +0.94 ▶▶ +0.71

プリセットの露光量が少し明るすぎたため、プラス補正の度合いをやや落とした。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
PRO400Hの青味がかかったイメージを色温度と色かぶり補正を使って作っていきます。



色温度 -12 ▶▶ -19

パラメーターを左に動かして、色温度をもう一段階低く（青く）する。

色かぶり補正 -16 ▶▶ -26

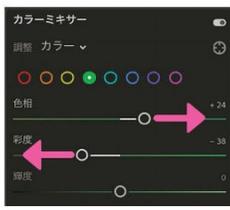
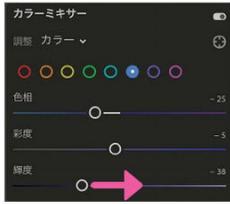
ミントグリーン感を出すために、色かぶり補正についてもパラメーターをマイナス側（グリーン側）に動かす。



いっきに PRO400H のようなトーンになった。

[カラーミキサー]

プリセットの段階でグリーンの色をやや青味がからせていますが、これをもう一段階強めます。また、ブルーの輝度が暗いことが原因で、空と木々のつながりが不自然でしたので、輝度を調整します。

	グリーン
色相	+18 ▶▶ +24
彩度	-44 ▶▶ -38
輝度	0
<hr/>	
	ブルー
輝度	-47 ▶▶ -38

完成



Before After

シャドウ部分がしっかりと黒かった Before と比べ、シャドウに青味が入りネガフィルムらしくなった。

Memo

ハ イライトとシャドウにそれぞれ赤系統の色をかぶせているプリセットに対して、今回は色温度を寒色にすることでPRO400H感を演出しました。

逆のアプローチとして、明暗別色補正のシャドウをブルー系統にし、青くなりすぎた分を色温度で調整していく方法もあります。



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 200
	彩度	9 ▶▶ 12
色温度	-12 ▶▶ -9	



同じようなアウトプットとなるが、前者のプロセス（色温度で青味を出す方法）のほうが空の色に深みが出るため、おすすめ。

05

Outdoor
Daytime

フラットな光を活かした編集

【作品タイトル】 ぴかぴかの1年生

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

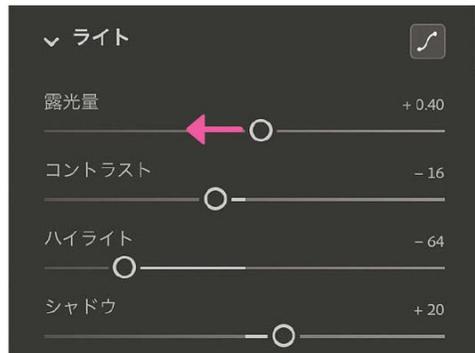
Step
0

仕上がりをイメージする

薄曇りで光が拡散し、きれいに回っている状況での写真です。フラットな光を活かしつつ、全体的に明るく、ややグリーンかぶりしているような仕上がりを目指します。リファレンスとしたフィルムはPRO400Hです。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用後、ライトの調整を行います。



露光量 +0.94 ▶▶ +0.40

プリセット適用のままだと、明るすぎたため、露光量をやや落とした。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]

色温度と色かぶり補正を調整し、PRO400Hのミントグリーン調にしていきます。



色温度	-12 ▶▶ -14
色かぶり補正	-16 ▶▶ -27
色かぶり補正	0 ▶▶ -16

完成



Before

After

プリセットとの相性がよかったため、たった2つのSTEPでイメージどおりとなった。

Before



- 色温度 マイナス
- 色かぶり補正 マイナス
- 彩度 マイナス



富士フィルム PRO400H 風

- 色温度 プラス
- 色かぶり補正 プラス
- 彩度 マイナス
- 明暗別色補正 ハイライト
にイエロー系統をかぶせる



Kodak Portra 400 風

- コントラスト プラス
- 明暗別色補正 ハイライト
にレッド系統をかぶせる



Lomography Color Negative 400 風

ベースプリセットは汎用性が高く、色温度/色かぶり補正もしくは明暗別色補正の調整により、さまざまなフィルムの再現が可能です。

06

Outdoor
Daytime

夏の空気を感ずる濃厚な青空に

【作品タイトル】 新宿、夏の空

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上りをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

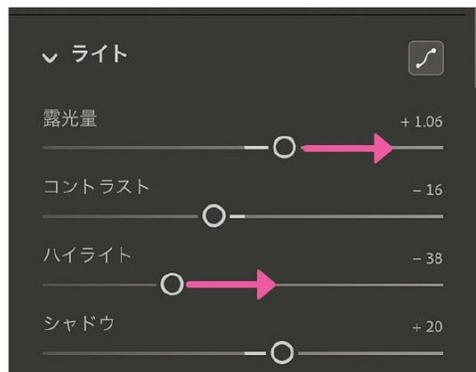
Step
0

仕上りをイメージする

CONTAX T2などのコンパクトフィルムカメラに富士フィルム業務用400を詰めて撮ったような青空を再現したいと思いました。東京の「今」を切り撮っているにも関わらず、どことなくノスタルジーを感じる空気感を目指します。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用し、ライトの調整から始めます。



露光量 + 0.94 ▶▶ + 1.06

白飛びに気を付けながら、明るくする。

ハイライト - 64 ▶▶ - 38

雲にグレー色のディテールが残りすぎて、重く感じるためハイライトの補正を弱める。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
カラーミキサーのブルーを中心に調整し、濃厚な青空の色を作っていきます。



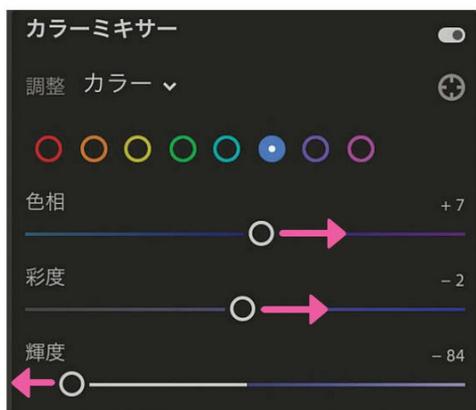
色温度 - 12 ▶▶ - 7

色温度のパラメーターを暖色方向に動かす。調整するときに、空の色と建物の色の変化を注視する。寒色寄りの色温度も爽やかでよかったが、少し暖色にすることでノスタルジックな印象が加わったように感じる。



[カラーミキサー]

筆者は青空をややグリーンに寄せ、爽やかなブルーにする編集パターンが多いのですが、今回はややパープル側(プラス側)にパラメーターを動かしました。



ブルー	色相	- 25 ▶▶ + 7
	彩度	- 5 ▶▶ - 2
	輝度	- 47 ▶▶ - 84

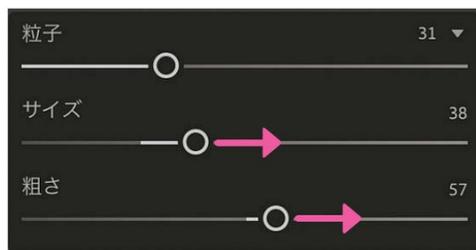
輝度を大胆に下げて35mmのコンパクトフィルムカメラで撮ったコクのある青空を再現する。



Step 3

効果を調整する

粒子をフィルムごとに分析し、不規則な粒状感まで再現するVSCOアプリなどと比べて、Lightroomの粒子は正直なところリアリティはあまりありません。ただ、今回は35mm感を出したかったので、粒子のサイズと粗さを上げ、ザラザラ感をアップさせました。



サイズ	25 ▶▶ 38
粗さ	50 ▶▶ 57

完成



Before : After

メリハリがなく、抜けた悪かった写真が、夏らしい気持ちのよい青空になった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

07

Outdoor
Daytime

彩度が低い落ち着いた色調表現

【作品タイトル】 縁側とラムネ

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

この写真を撮った瞬間から、Kodak Portra 400のような色合いにするつもりでした（撮影時に最終的なアウトプットのイメージを持つことが重要です）。彩度が全体的に低く、グリーンは青味がかかり、肌色は赤味が少ないという3点を特に意識して仕上げました。

Step 1

写真を整える

左下りのため、角度補正ツールを使って水平を整えます。写真のように、柱など縦方向の直線があると水平が取れていないことが、なおのこと目立ちますので、しっかりと直しましょう。



Memo

意 図的に水平を傾けることで、構図にリズム感やスピード感を付ける技法がありますが、なかなか意図が伝わりにくく、ただの失敗写真に見えてしまいがちですので、あまりおすすめできません。フィルムライクな絵作りは「ゆるい」雰囲気だからこそ、水平垂直をきちんと出したほうがバランスが取りやすいでしょう。

Step 2

基本補正を行う

ライトを使って、基本的な補正を行っていきます。



露光量 +0.94 ▶▶ +0.43

ベースプリセットの補正量だと明るすぎるため、やや暗くした。

シャドウ +20 ▶▶ +37

影になっている部分が暗いと感じたため、シャドウをベースプリセットよりも持ち上げた。



Step
3

カラーを調整する

[カラー]

全体の色合いを重視しつつ、今回は細かい部分の色の調整も行います。

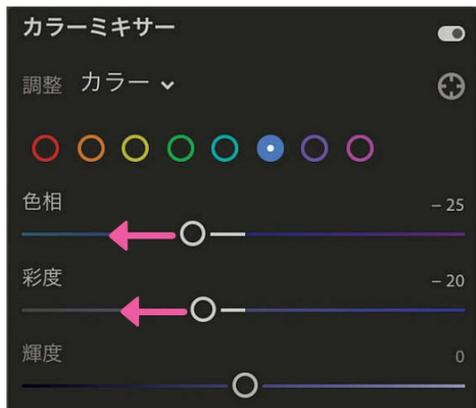


色温度	- 12 ▶▶ - 18
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 30

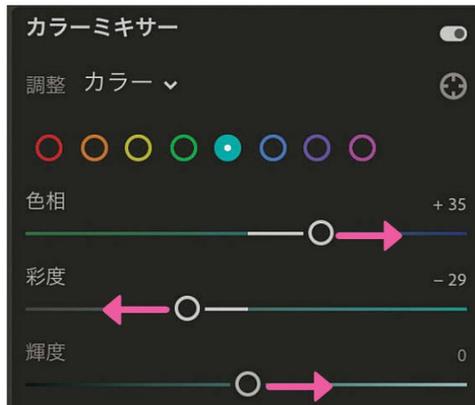
光線や画面の構成要素の影響により、暖色寄りだったため、色温度と色かぶり補正のパラメーターを左方向に動かす。

[カラーミキサー]

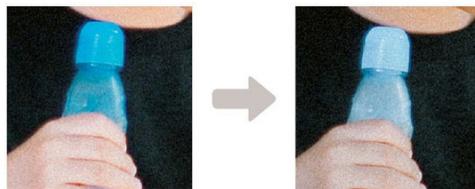
画面を占める割合は小さいですが、ラムネ瓶の青いフタの彩度が高く、悪目立ちしているため、ブルーとアクアを調整します。



ブルー	彩度	- 5 ▶▶ - 20
	輝度	- 47 ▶▶ 0



アクア	色相	0 ▶▶ + 35
	彩度	- 5 ▶▶ - 29
	輝度	- 38 ▶▶ 0



この調整により、ラムネ瓶のフタが色あせたポスターのようなノスタルジックな青色になる。

完成



Before

After

彩度が低く落ち着いた色調ながらも、肌色が不健康的に見えない仕上がりになった。

08

Outdoor
Daytime

ニューカラーを意識した色調

【作品タイトル】 屋下がりの駐車場

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

筆者が最も好きなニューカラーの時代（ウィリアム・エグルストンやスティーン・ショアラ）の作風を意識して編集しました。他の写真でも同じことがいえませんが、色温度が高いような低いような絶妙なバランスを目指して色彩をコントロールします。

Step 1

基本補正を行う

水平の補正やトリミングは不要と判断、ベースプリセットを適用したのち、ライトツールを使って基本の補正を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.88
-----	------------------

コントラスト	- 16 ▶▶ - 32
--------	--------------

太陽が真上にあり、光が硬い状況だったため、コントラストを弱めた。



元の写真は雲が白飛び気味だったが、ハイライトを大幅に下げているベースプリセットの適用により、空の表情がわかるようになってきた。

Step 2

カラーを調整する

[カラー]

全体をブルー寄りにしつつ、目立ちすぎる色の処理を行います。



色温度	- 12 ▶▶ - 17
-----	--------------

色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 22
--------	--------------

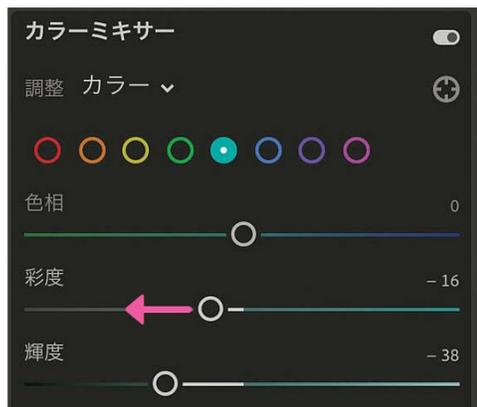
色温度、色かぶり補正ともにややマイナス側にパラメーターを動かす。全体的に青っぽくなりすぎないギリギリの線を探りながら調整を行った。



わずかなニュアンスの違いだが、STEP1の状態よりもメロウな雰囲気になってきた。

[カラーミキサー]

アパートのグリーンっぽいドアが浮いているように感じたため、カラーミキサーのアクアを調整していきます。



アクア

彩度

0 ▶▶ -16



悪目立ちしていたドアが、少し色あせたような彩度になり、全体の色調に馴染んだ。写真の色調を編集する際は、変に彩度が高い色系がないか確認する習慣をつけるとよい。

完成



Before

After

単なるニューカラーの物真似ではなく、ハイキーでドリーミーな要素も加わった。

Memo

画

素数が大幅に増加した昨今のデジタルカメラはトリミング耐性も非常に優れています。筆者はノートリミングにこだわるのはもったいないと考えており、1枚の写真から、さまざまなパターンのカットを作成しています。



縦位置にトリミングし、ミニマルに仕上げた。

2章

日中

朝

夕刻

夜

09

Outdoor
Daytime

中判フィルムを意識した編集

【作品タイトル】 港にたたずむ

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

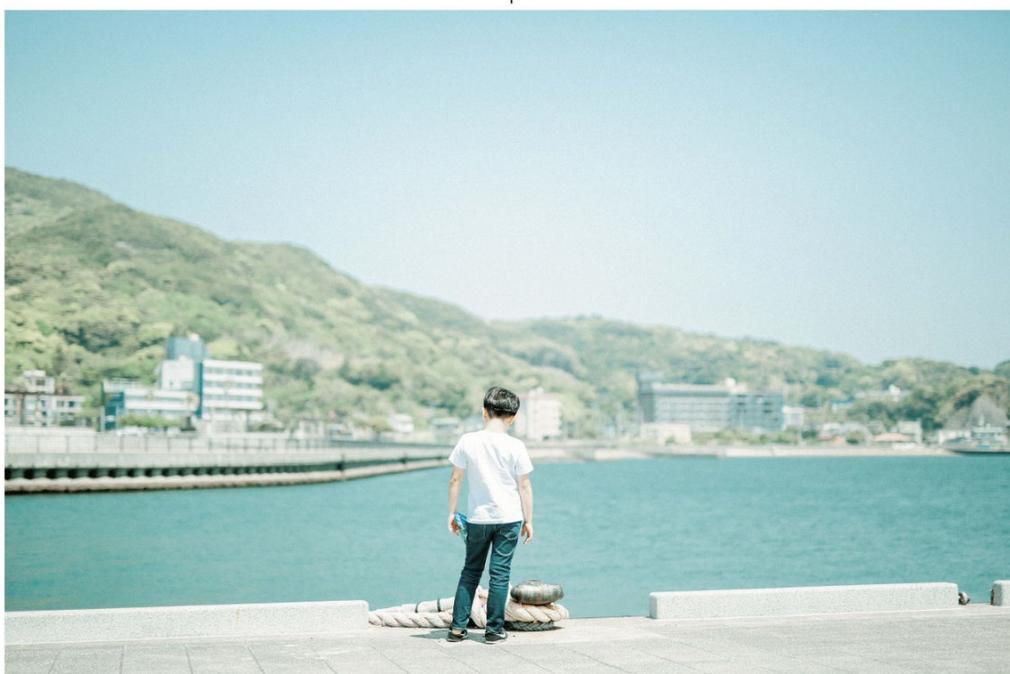
Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

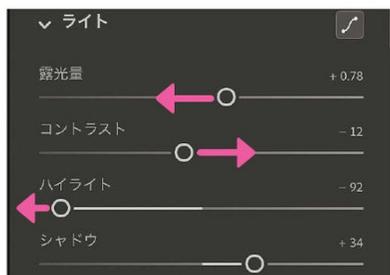
Step
0

仕上がりをイメージする

中判フィルムカメラ×Kodak Portra 400で撮った写真をイメージしました。同じ銘柄のフィルムでも、フォーマットや感度によって、色合いやトーンが異なる傾向があります。個人的に、Kodak Portra 400は、35mm判より中判のほうがはるかにトーンが美しいと感じており、これを再現したいと思いました。

Step 1 基本補正を行う

元の写真は「ハイライトのクリッピング」を見ると白いTシャツ部分が白飛びしていることがわかります。この点に注意しながら、編集を進めていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.78
コントラスト	- 16 ▶▶ - 12
ハイライト	- 64 ▶▶ - 92

「ハイライトのクリッピング」の赤い警告部分がなくなるまで露光量とハイライトを下げる。ハイライトを下げて軟調になった分、コントラストを僅かに上げてバランスを取る。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
低彩度でシアン調の中判フィルムを目指してカラーを調整します。



色温度	- 12 ▶▶ - 22
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 32
彩度	0 ▶▶ - 16

色温度と色かぶり補正をマイナス側に補正し、全体をシアン調にする。彩度も下げる。



Step1 の写真と比べて、山の木々の赤味が減ったことがわかる。

[カラーミキサー]

背景において大きな面積を占める山の木々の色合いを微調整します。



グリーン 彩度 -44 ▶ -31

山の木々のグリーンをもう少し鮮やかに見せたかったため、彩度のパラメーターをプラス側に動かす。



Step 3

効果を調整する

Step2までで完成としてもよいのですが、もう一步Portraらしさを出したいと思い、ハイライト系の色補正をイエロー系にしました。



明暗別色補正 (ハイライト) 色相 317 ▶ 47 彩度 9 ▶ 8

完成



Before After

ハイライトがイエローっぽくなり、Portraのノスタルジックな雰囲気近づいた。

2章

日中

朝

夕刻

夜

10

Outdoor
Morning

「無補正プリント」の硬調さを再現

【作品タイトル】 トンネルの先に海

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
順光 逆光/斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

海に抜けるトンネル、という明暗差が大きいシチュエーションです。通常であればコントラストを落とすなどして、明暗差を和らげる編集を行うところですが、今回は「35mmフィルムをチェーン店にて無補正でプリントする」イメージで、あえて硬さを残した仕上りを目指します。

Step 1

写真を整える

水平がかなり傾いているので、ベースプリセットを適用したのち、水平をしっかり補正します。



水平がかなり左に傾いていたため、プラス方向に補正。

水平の補正は便利ですが、上の画像を見てもわかるように、元の写真と比べるとフレーミングの範囲が狭くなります。撮影の段階でできるだけ水平を取ることを意識するのはいうまでもありません。なお、人それぞれどちらかに傾くクセがあるので自分のクセを把握しておきましょう。

Step 2

基本補正を行う

[ライト]

コントラストや黒レベルを調整して、硬めのトーンにしていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.44
コントラスト	- 16 ▶▶ + 20
黒レベル	0 ▶▶ - 40

チェーン店のミニラボを使った無補正プリントはコントラストが高くなることが多い。これを再現すべく、コントラストを思いっきり上げた。

写真の最も暗い部分（この写真ではトンネルの壁など）の明るさを下げる。ピーキー感を出すことに加え、トンネルの壁の暗い部分がより暗くし、フレームの中央に視線を集中させるねらいがある。

[ポイントカーブ]

ベースプリセットのポイントカーブは、中間調を明るくしてありますが、今回は中間調をそのままに修正します。



ベースプリセットと異なるトーンになる。

Step 3

カラーを調整する

ミニラボ無補正はアンバーな仕上がりになることが多いですが、今回はあえて寒色寄りにします。



色温度 -12 ▶▶ -17

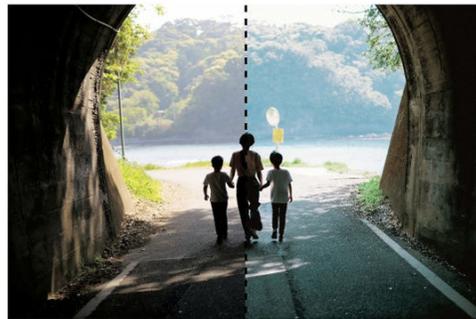
色かぶり補正 -16 ▶▶ -22

彩度 0 ▶▶ +9

色温度と色かぶり補正を使って、全体的にブルー、グリーン寄りにした。

全体的に彩度が低すぎると感じたため、最後に調整した。

完成



Before

After

街角の写真店で仕上げたようなやや硬調なトーンが、懐かしい雰囲気の写真とマッチした。

2章

日中

朝

夕刻

夜

11

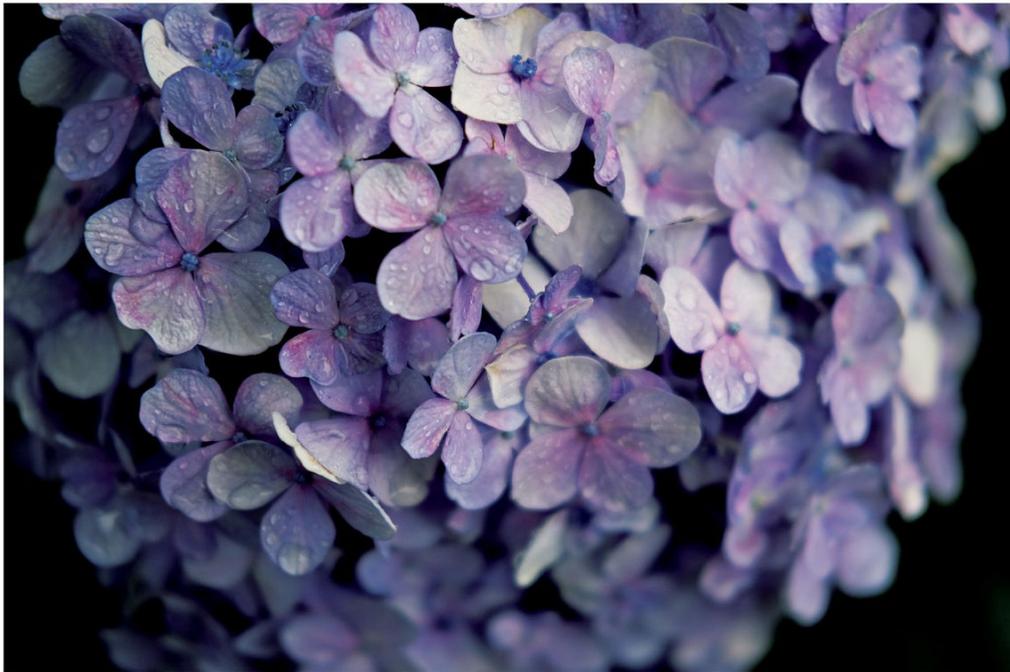
Outdoor
Morning

高感度フィルムのザラついた質感に

【作品タイトル】 雨に濡れた紫陽花

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

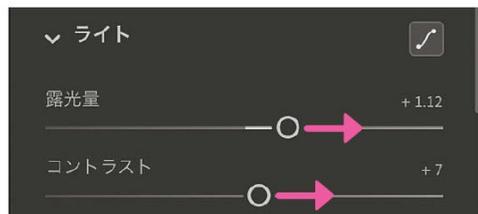
Step
0

仕上りをイメージする

雨の日、片手に傘をさしながら撮った紫陽花です。日中にも関わらず、光量が非常に少なく、露出を切り詰めて撮ったこともあり、暗闇に浮かび上がるような効果が生まれました。編集では紫陽花の紫をブルーに傾けつつ、富士フィルムNatura1600のような高感度フィルムの少しザラつきのある質感を目指しました。

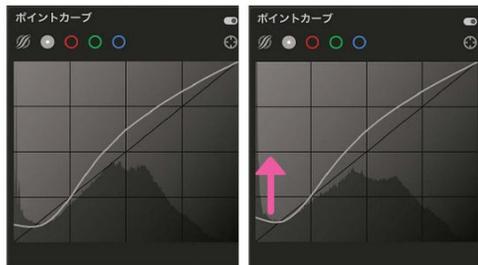
Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用後、ライトの調整を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.12
コントラスト	- 16 ▶▶ + 7

暗い部分と明るい部分の対比を出すためにコントラストを強める。



露出不足の際にシャドウが浮くフィルムの特徴を強調すべく、ポイントカーブのシャドウ部分を持ち上げる。



ポイントカーブの調整により、よりマットな雰囲気になった。

Step 2 カラーを調整する

[カラー]
元の写真は紫陽花の花びらの色を比較的忠実に再現していますが、あえて色合いを変えていきます。



色温度	- 12 ▶▶ - 16
-----	--------------

パラメーターを左に動かして、色温度をもう一段階低く（青く）する。

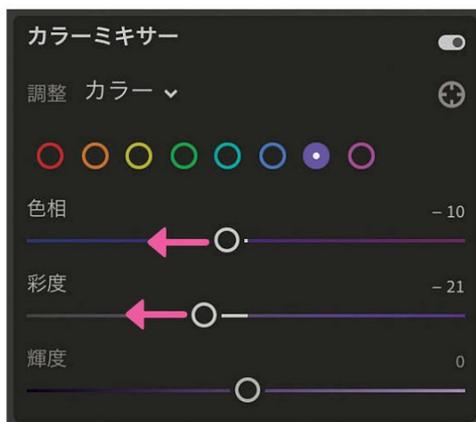
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 12
--------	--------------

パラメーターを右（マゼンタ方向）に少し動かし、色味のバランスを取る。



[カラーミキサー]

全体的に彩度が高い印象であったため、パープルの色相と彩度を調整、花びらをややブルー寄りにして落ち着いた色合いにします。

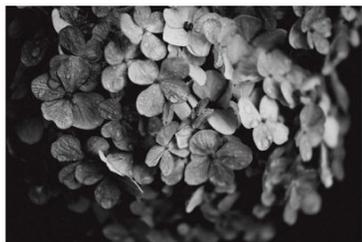


パープル	色相	0 ▶▶ -10
	彩度	0 ▶▶ -21

Memo

花 は彩度を上げた派手な編集をしがちですが、彩度を下げた落ち着いた雰囲気フィルム風の編集によく合います。

紫陽花についてはモノクロとの相性もよいので機会があればお試しください。



Step 3

効果を調整する

周辺光量補正のパラメーターをマイナス方向に動かし、周辺減光を演出します。これにより、暗闇に紫陽花が浮かび上がるような視覚効果がより強まります。また、Natura1600のような高感度フィルムのザラザラとした質感に近づけるために、粒子量を増やします。



周辺光量補正	0 ▶▶ -8
粒子	33 ▶▶ 49

完成



Before

After

漆黒に浮かび上がる紫陽花がアーティストチックに表現できた。ザラザラ感もポイント。

2章

日中

朝

夕刻

夜

12

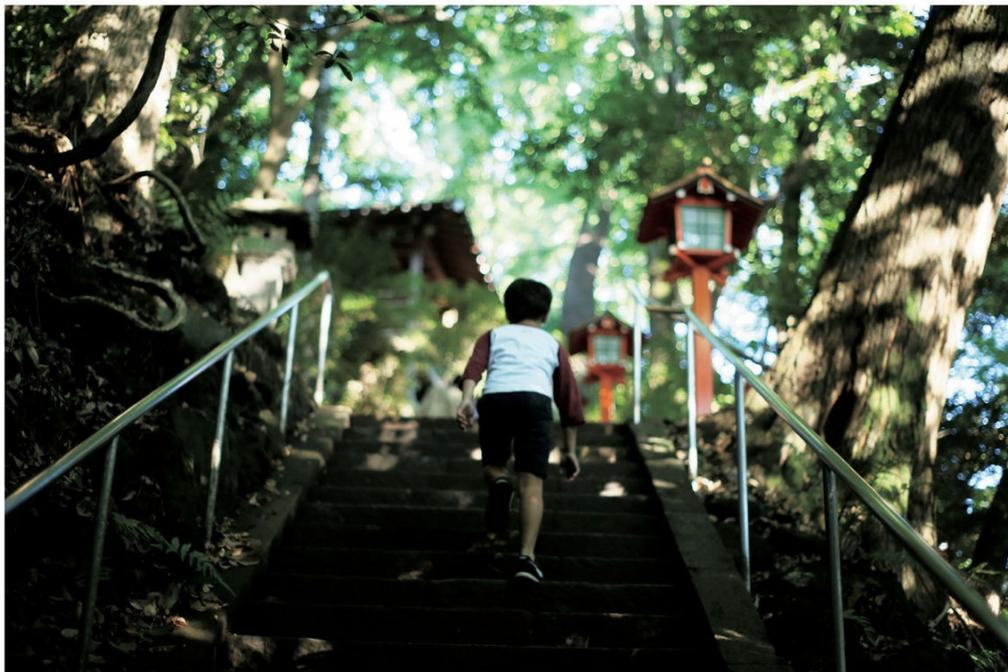
Outdoor
Evening

人気写真店のテイストを意識

【作品タイトル】 境内への階段

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

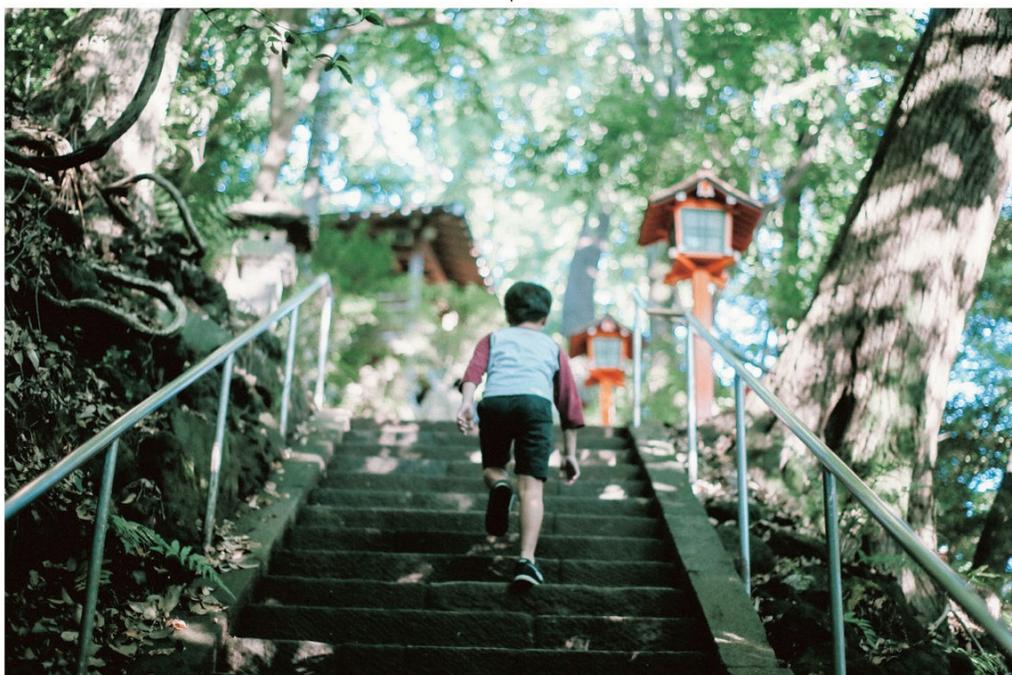
Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

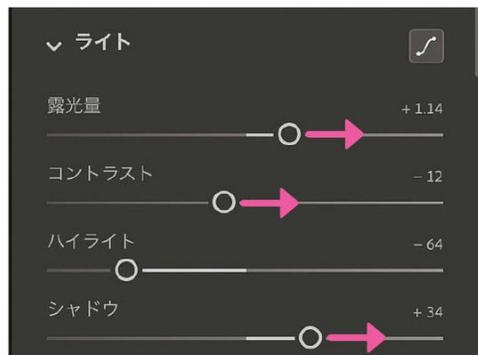
Step
0

仕上りをイメージする

富士フィルム業務用400などの廉価版フィルム(といっても今や高価ですが)を若年層に人気の写真店でプリントしてもらったように仕上げたいと思いました。なお、この写真ではオールドレンズを使って撮影しているため、少し緩い描写となっています。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用、特に水平補正やトリミングは行わず、基本補正から開始します。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.14
コントラスト	- 16 ▶▶ - 12
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 34

元の写真が暗めだったため、露光量とシャドウを上げて階段などの暗部のディテールが見えるようにした。また、廉価版フィルムのコントラスト高めめの雰囲気を出すために、コントラスト補正も行った。



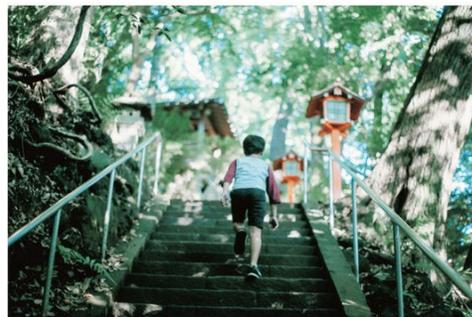
Step 2 カラーを調整する

[カラー]
暖色寄りの仕上げも人気ですが、この作品ではシアン寄りに調整していきます。



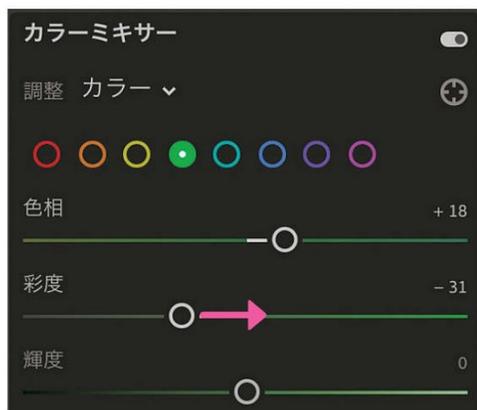
色温度	- 12 ▶▶ - 28
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 32
彩度	0 ▶▶ - 16

人気の写真店のレシピとしては、やはりシアン調のプリントが鉄板。これを色温度と色かぶり補正の調整で表現する。彩度は落とす。



[カラーミキサー]

木々のグリーンが全体の印象を左右するため、カラーミキサーで微調整を行います。



ベースプリセットはグリーンの彩度をかなり下げるチューニングとなっているが、この写真では、全体の彩度をSTEP2で下げたこともあり、グリーンの彩度を個別で上げてバランスを取った。



Step 3

効果を調整する

青味を強くしたところに赤を足す作業でバランスを取ります。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 >> 24
	彩度	10 >> 18
明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 >> 322
	彩度	9 >> 14

STEP2のカラー補正でかなりブルー寄りにしたため、シャドウとハイライトに乗せる赤系統の色を少し濃いめにしてバランスを取った。写真の光線状態などによって、このプロセスはいろいろと試すとよい。

完成



オールドレンズの緩い描写を活かしたふんわりとしたトーンと色調に仕上げる事ができた。

13

Outdoor
Evening

寒色調に温かみが同居する色調に

【作品タイトル】 夕方の帰り道

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

リファレンスとしたのは一番好きなフィルムKodak Portra 400。木々のグリーンは寒色系の色合いにも関わらず、人肌などは温かみのある色調というバランスを目指します。

Step
1

写真を整える

ベースプリセットを適用後、トリミングします。今回はズームアップすることが目的ではなく、アスペクト比を変更するためです。これは筆者の好みですが、フルサイズ(3:2)での縦位置は縦に細長すぎて落ち着きが悪いと感じるので、4:3もしくは5:4にトリミングすることが多いです。

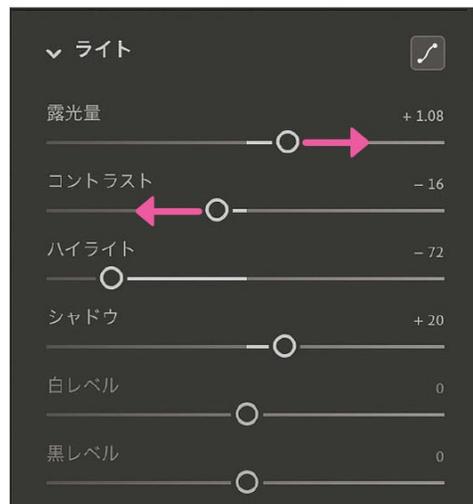


切り抜きツールから好みのアスペクト比(縦横比)を選ぶ。今回は4:3を選んだ。

Step
2

基本補正を行う

ハイキーでやわらかなトーンを目指して、露光量などを調整します。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.08
ハイライト	- 64 ▶▶ - 72

露光量を動かして全体を少し明るくしつつ、ハイライトのパラメーターをマイナス側に動かす。



Step 2

カラーを調整する

温かみのある色調にするために、色温度を中心に調整します。ちょうどよい塩梅を探っていきましょう。



色温度 -12 ▶▶ -7

日が傾き始めた時間帯の雰囲気を出すために、色温度のパラメーターをやや暖色寄りに動かす。

色かぶり補正 -16 ▶▶ -20

色かぶり補正をややマイナス側に動かす。



STEP2と比べて、ほんのわずかなニュアンスの変化だが、筆者は、フィルム再現においても「神は細部に宿る」と考えている。

Step 4

効果を調整する

もう少し夕方の雰囲気が欲しかったので、明暗別色補正を使ってハイライトに赤系統の色をほんのりと乗せます。



明暗別色補正 (ハイライト) 色相 317 ▶▶ 22 彩度 9 ▶▶ 15

完成



Before : After

やや硬調だった写真が Portra 400 で撮ったようなやらかく温かみのあるトーンになった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

14

Outdoor
Evening

ネガの広いラチチュードを再現

【作品タイトル】 黄昏の街

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

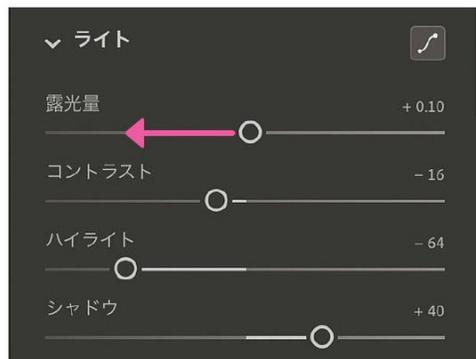
仕上りをイメージする

Beforeの写真は空が白飛び気味で、雲の表情が乏しいうえに、手前の道路が暗すぎる印象でした。カラーネガフィルムで夕景を撮ったときのような広いラチチュードを再現することを念頭に編集をしていきます。なお、この写真は撮影時にソフトフィルターを装着して光を滲ませています。

Step 1

基本補正を行う

ベースプリセットを適用後、ライトの調整を行います。



露光量 + 0.94 ▶▶ + 0.10

空が白飛び気味だったので、写真全体の露光量を下げる。

シャドウ + 20 ▶▶ + 40

手前の道路が暗く、様子がわかりにくいためシャドウを持ち上げる。



雲と手前の道路の詳細が浮かび上がってきた。

Step 2

カラーを調整する

[カラー]

夕焼けらしさを出すために、色温度のパラメーターをわずかに暖色方向に振ります。



色温度 - 12 ▶▶ - 9

Memo

一般的夕焼けの編集は色温度を低くする(パラメーターをプラス方向にする)のが定石です。

色温度
- 9

今回、採用した数値



色温度
+ 20



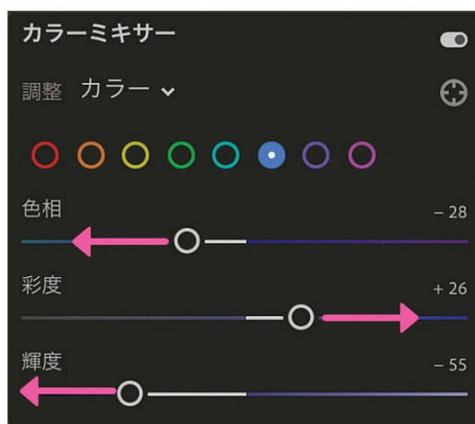
色温度
+ 50



教科書どおりであれば、色温度+50くらいが夕焼けらしさが出ていますが、フィルムライクな青味を残したかったため、今回は色温度-9にとどめました。

[カラーミキサー]

ブルーの彩度を上げ、輝度を下げること、夕暮れに残る青空を強調します。



ブルー	色相	- 25 ▶▶ - 28
	彩度	- 5 ▶▶ + 26
	輝度	- 47 ▶▶ - 55



フィルムが現像から返ってきたとき、青空が飛ばずにしっかり残っていることに感動することが少なくない。そのような感動を編集で再現しようとした。

Step 3

効果を調整する

STEP2の色温度の補正ではパラメーターをわずかに暖色方向に動かし、青味を残しましたが、夕焼けのノスタルジックな空気感を演出するためにハイライトにオレンジよりの赤をかぶせます。



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 16
	彩度	9 ▶▶ 17

完成



Before After

青空や夕日の色が濃くなり、情緒のある光景が再現できた。

2章
日中
朝
夕刻
夜

15

Outdoor
Evening

青味がありつつも温かみのある描写

【作品タイトル】 夕暮れのビーチ

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

日が沈む砂浜を家族で歩いた思い出の写真を、情緒たっぷりに表現したいと思いました。リファレンスのフィルムはKodak Portra 400。青味がありつつも、暖かな色合いを目指して編集していきます。

Step
1

基本補正を行う

ベースプリセットを適用後、ライトの調整を行います。



露光量 + 0.94 ▶▶ + 0.50

夕暮れのほの暗い雰囲気を損ねていたため、プラス補正の度合いを落とした。

コントラスト - 16 ▶▶ - 36

子どもの髪の毛のディテールが潰れ気味だったため、コントラストを弱めた。



Step
2

カラーを調整する

[カラー]

青味が強すぎると夕方の情感が薄れるため、空の色などをよく見ながら色温度を追い込みます。



色温度 - 12 ▶▶ - 8

パラメーターを右側に動かして、夕暮れの暖かな雰囲気を出す。

色かぶり補正 - 16 ▶▶ - 22

マゼンタ側にパラメーターを動かしても悪くないが、今回はグリーン側に動かしネガフィルム特有の色かぶり感を出す。

彩度 0 ▶▶ - 18

元の写真の彩度が高かったため、彩度を大幅に下げる。



Step
3

効果を調整する

Step2にて、写真全体の色合いをグリーン方向に転ばせましたが、これにより空の夕暮れらしさが失ってしまいました。明暗別色補正を使ってハイライトの赤味を少し強くします。



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 328
	彩度	9 ▶▶ 13



周辺光量補正	0 ▶▶ -6
--------	---------

元の写真はレンズの特性もあり、周辺の光量がやや落ちていたが、周辺光量補正をマイナスにすることで、周辺減光をさらに強めた。

周辺減光効果は手軽に写真をそれらしい雰囲気に行けるため、場合によっては効果を強めにかけがちとなります。あまり強く周辺減光させるとわざとらしく見えるため、最大でも-12くらいで止めることがおすすめです。

完成



Before

After

プレーンな印象だった Before と比べ、After はピンクがかった空により情感が増した。

2章

日中

朝

夕刻

夜

Memo

第

1章でも触れましたが、明暗別色補正はフィルム再現における隠し味のような存在です。ハイライトやシャドウに自由自在に色を乗せることができますが、彩度については上げすぎないように注意しましょう。



夕暮れ感を出すために、ハイライトに彩度の高いオレンジをかぶせた。本書が目指す、自然なフィルム再現とはかけ離れてしまった。

16

Outdoor
Evening

PRO400H のような青味と低彩度

【作品タイトル】 屋上の眺め

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

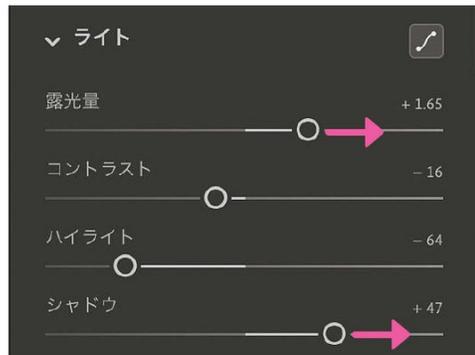
Step
0

仕上がりをイメージする

富士フィルムPRO400Hをリファレンスに。低彩度で色温度が高いながらも、人肌が不健康にならないよう、「青いだけ」の写真にならないよう気をつけながら編集を進めていきます。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用したのち、ライトツールを使って基本の補正を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.65
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 47

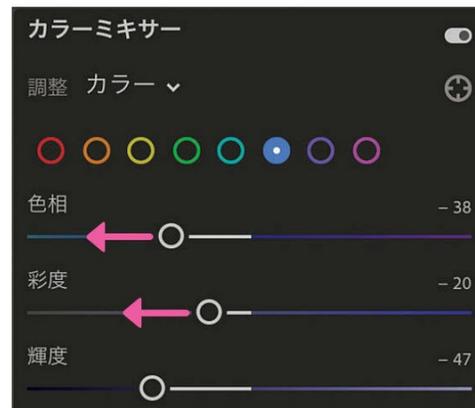
白飛びしないようアンダー目に撮影していたため、ベースプリセットの補正值だけでは、まだ全体的に暗い状況だった。これを露光量とシャドウを持ち上げて、抜きのよいトーンにしていく。



Step 2 カラーを調整する

[カラーミキサー]

青空の色が肝となる写真ですので、先にカラーミキサーのブルーの調整を行います。



ブルー	色相	- 25 ▶▶ - 36
	彩度	- 5 ▶▶ - 15

色相を少しグリーンに寄せつつ、彩度を下げてなめらかな雰囲気を目指す。



[カラー]

色温度と色かぶり補正を使って、全体の色調をミントグリーンに寄せます。



色温度	- 12 ▶▶ - 17
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 23
彩度	0 ▶▶ - 9

全体の彩度が依然として高く感じたため、パラメーターを少しマイナスに動かす。



Step 3

効果を調整する

シャドウが青くなりすぎているため、明暗別色補正を使ってシャドウの赤味でバランスを取ります。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 29
	彩度	10 ▶▶ 18

完成



濁りのある Before の写真と比べ、低彩度ながらも青さが爽やかな 1 枚となった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

17

Outdoor
Evening

記憶色のようなフィルム再現

【作品タイトル】 芝滑り

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

- Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする
- Step 1 ▶ 基本補正を行う
- Step 2 ▶ カラーを調整する
- Step 3 ▶ グラデーションツールで調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

日が傾き始めたくらいの時刻、肉眼で見た空は青にほんのりピンクの絵の具を混ぜたような印象の色合いでした。ハイライトの再現が弱いデジタルカメラでこういったシチュエーションを撮ると思ったより味気ない感じになることがあります。フィルムが得意とする記憶的な再現を目指して編集していきます。

Step 1 基本補正を行う

ベースプリセットを適用し、ライトツールを使って基本の補正を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.55
-----	------------------

ベースプリセットのパラメーターでは明るすぎて、日が傾きかけた時刻の雰囲気損ねていたため、露光量を少し下げた。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
プリセット適用により、不自然になってしまった写真を補正していきます。ライトのパネルを使って、基本的な補正を行っていきます。



色温度	- 12 ▶▶ - 15
-----	--------------

色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 10
--------	--------------

筆者は色かぶり補正をグリーン方向に動かすことが多く、ベースプリセットもかなりグリーン寄りとなっている。今回は夕刻の雰囲気を出すために、パラメーターをややマゼンタ方向に戻した。



[カラーミキサー]

ベースプリセットでは、空の色を濃くする目的でブルーの輝度をかなり下げています。ただ、この写真においては、芝生の丘と空のつながりが不自然になっていたため、いったんブルーの輝度をゼロに戻しました。



境界線が不自然な状態。



ブルー 輝度 -47 ▶▶ 0



空と丘の境界が自然になった。

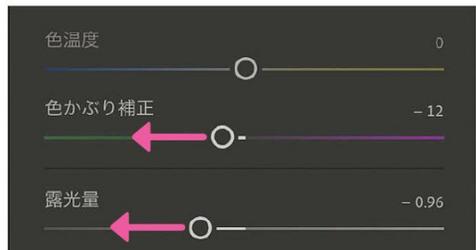
Step 3

グラデーションツールで調整する

Step 2でブルーの輝度を0に戻したことで、今度は空の色が薄口になりました。これをグラデーションツールを使って、記憶色に近づけていきます。

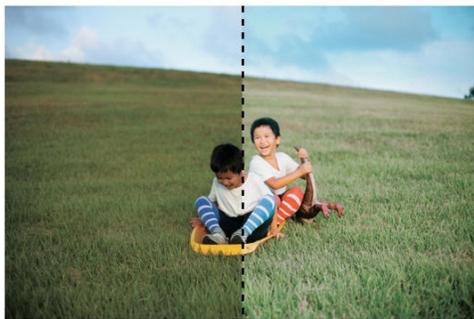


線形グラデーションツールの選択範囲を丘の形に合わせて斜めにする（赤くハイライトされた部分が選択範囲）。



選択範囲の露光量を下げ、色かぶり補正を使ってグリーン寄りにする。

完成



Before After

空と雲の色を記憶の中の色合いに近づけることができた。

2章

日中

朝

夕刻

夜

18

Outdoor
Evening

懐かしさを感じる都市光景に

【作品タイトル】 日没前の高層ビル群

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

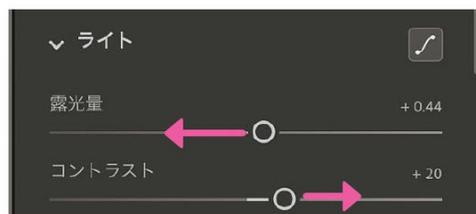
Step
0

仕上りをイメージする

筆者は海や山などの自然風景をノスタルジックに表現することが好きですが、一方で都会の街並みの中にも懐かしさや郷愁を感じさせるシーンがあると感じており、これをフィルムライクな編集により表現しようとしています。この写真はまさにそのようなイメージで編集を行いました。

Step 1 基本補正を行う

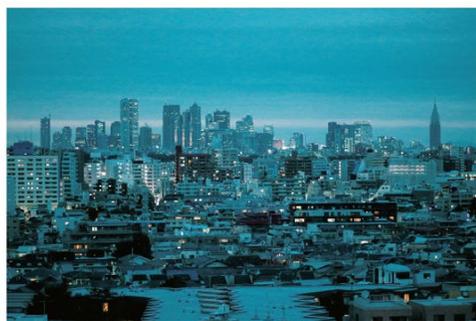
ベースプリセットを当ててから、ライトツールを使って基本の補正を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.44
シャドウ	- 16 ▶▶ + 20



ベースプリセットのポイントカーブは暗部をかなり持ち上げていて、シャドウが浮きすぎて見えため、最暗部のポイントを少し下げたためシャドウを引き締めた。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
プリセット適用のみだと彩度が高くなりすぎたため、彩度を中心に補正します。



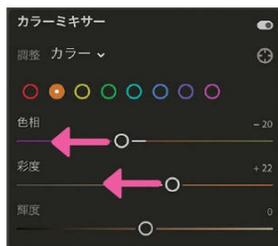
色温度	- 12 ▶▶ + 1
色かぶり補正	- 16 ▶▶ + 13
彩度	0 ▶▶ - 17

全体的に青すぎるため、色温度と色かぶり補正をプラス方向に補正。また、彩度が高く感じたため彩度を思い切って下げた。



[カラーミキサー]

画面を占める割合が小さい色でも印象を大きく左右される場合があります。ここでは主に街灯りのオレンジを調整します。



オレンジ	色相	+ 36 ▶▶ - 20
	彩度	+ 44 ▶▶ + 22

灯火の色を暖かく強調したかったため、オレンジの色相を赤側に動かした。見た目の彩度が高くなるため、彩度を下げてバランスを取った。



ブルー	彩度	- 5 ▶▶ + 12
-----	----	-------------

STEP2で全体の彩度を下げたが、ブルーの存在感がもう少し欲しかったため、彩度を上げた。



Step 3

効果を調整する

周辺光量を落として、画面の中心に視線が集中するようにします。また、周辺減光はノスタルジックな雰囲気を演出するのに効果的です。



周辺光量補正 0 ▶▶ - 20

完成



Before After

ビルの灯り一つひとつの印象が強まり、ドラマを感じる仕上がりがなった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

19

Outdoor
Nighttime

コンパクトフィルムカメラの再現

【作品タイトル】 新宿トワイライト

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

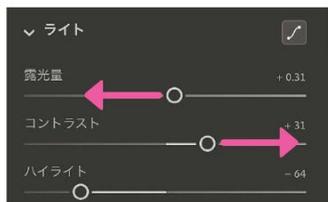
仕上りをイメージする

高級コンパクトカメラCONTAX T2に富士フィルムのスタンダードフィルムであるSUPERIA X-TRA400を詰めて撮ったトーンと色調を再現したいと思いました。このカメラとフィルムの組み合わせは暖かく情緒的な描写となるため、必要以上に青くならないように注意しながら編集していきます。

Step 1

基本補正を行う

コントラストを上げて35mmの硬調な雰囲気近づけます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.31
コントラスト	- 16 ▶▶ + 31

コントラストを上げて、35mmの少し硬いトーンを表現する。



Memo

「フィルム＝コントラストが低い」とイメージするかもしれませんが、必ずしもそうではありません。35mmフィルムをミニラボで自動補正すると案外、デジタルよりコントラストが高くなります。筆者の 패턴の多くは、編集の方向性として中判をイメージした場合はコントラストを下げてもや軟調に、35mm判の場合は上げて硬調にします。

Step 2

カラーを調整する

[カラー]

街中の写真店で現像(自動補正)したような色調を再現していきます。



色温度	-12 ▶▶ + 5
彩度	0 ▶▶ - 19

色温度のパラメーターをプラス方向に動かし、暖かな雰囲気に。元写真の彩度が高すぎると感じたため、彩度を大幅に下げる。

[カラーミキサー]



ブルー	
彩度	- 25 ▶▶ - 15

この写真では空をグリーンに寄り過ぎない青さにしたかったため、パラメーターを少しプラス側に戻した。



Step
3

効果を調整する

もう一步、35mmフィルムっぽさに近づけるためにハイライトや周辺光量を補正します。



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 37
	彩度	10 ▶▶ 20

色温度を低くしただけでは得られないアンバーさ(くすんだ赤黄色)を出すために、ハイライトの色相をベースプリセットのマゼンタ色からオレンジと黄色の境目くらいの色に変更する。



周辺光量補正	0 ▶▶ -9
--------	---------

CONTAX T2のレンズは周辺減光がはっきりと出るタイプのため、これを周辺光量補正をマイナスにすることで表現する。

粒子	31 ▶▶ 48
----	----------

ざらっとした質感となるように、粒子量を増やした。

完成



Before After

現代的な Before と比べ、After ではどこか 90 年代のような空気を感じることができる。

Memo

同 写真を35mm判ではなく、中判フィルムで撮った場合を想定した場合の編集結果は以下のようになります。



35mm判と比べ粒子のキメが細かい中判フィルムを意識し、クリアで透明感のある仕上がりにしている。また、ブルー寄りのカラーバランスにしている。

20

Outdoor
Nighttime

フィルム×オールレンズのように

【作品タイトル】 夜の帳が降りるとき

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
順光 逆光/斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

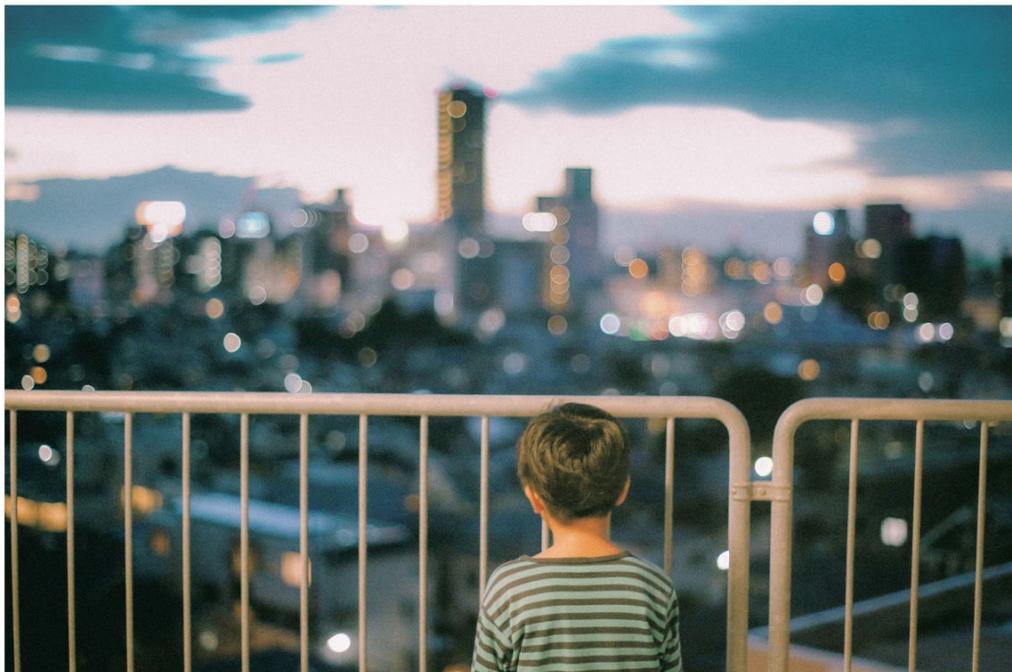
Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 明暗別色補正を調整する

Step 4 ▶ 効果を補正する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

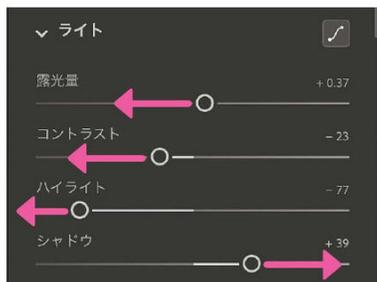
仕上りをイメージする

少しクモリのあるオールドレンズを、フィルム一眼レフにマウントして撮ったときの空気感を目指して編集していきます。他の事例でも触れていますが、ただ青いだけの編集にならないように適度に赤味を足しながらバランスを取っていきます。

Step 1

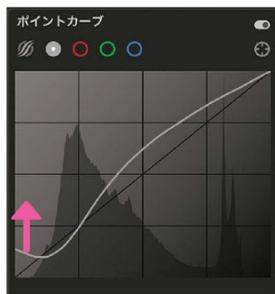
基本補正を行う

プリセット適用のみだとやや硬調なため、やわらかくなるように補正をしていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.37
コントラスト	- 16 ▶▶ - 23
ハイライト	- 64 ▶▶ - 77
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 39

軟調なトーンにしたいため、コントラストを下げるとともに、ハイライトも下げ、シャドウを上げる。



ポイントカーブの暗部を上げて、一層軟調にする。



Step 2

カラーを調整する

夕暮れらしさを出すためにやや暖色寄りに補正するとともに、空の青を微調整します。



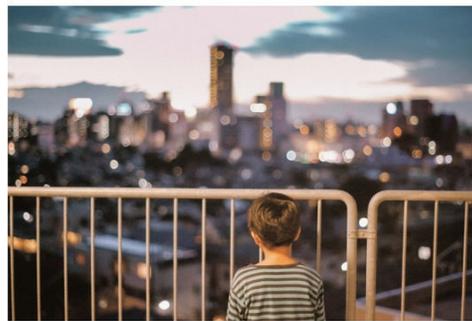
色温度	- 12 ▶▶ - 6
色かぶり補正	- 16 ▶▶ + 8
彩度	0 ▶▶ - 23

色温度、色かぶり補正とともに、ベースプリセットの設定値よりもプラス方向にし、温かみを出す。全体の彩度も下げておく。



アクア	
色相	- 25 ▶▶ - 21
彩度	- 5 ▶▶ - 12
輝度	- 47 ▶▶ 0

空の青さが不自然なため、輝度をデフォルトの設定に戻すなどの調整を行う。



Step 3

明暗別色補正を調整する

夕景はハイライトとシャドウにかぶせる色によって印象が大きく変わります。イメージに近づくよう、さまざまな組み合わせを試してみましょう。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 173
	彩度	10 ▶▶ 21



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 305
	彩度	10 ▶▶ 15

シャドウをブルー系にして色調を落ち着かせる。



Step 4

効果を補正する

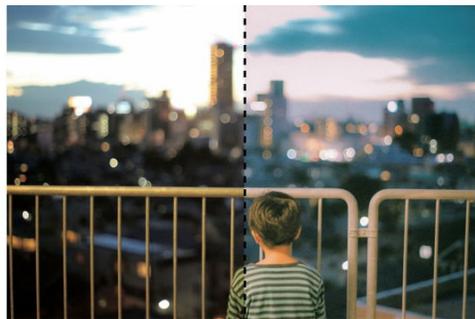
明瞭度を落としてオールドレンズのクモリのような雰囲気 연출します。また、粒子量を少し増やして35mmフィルムの質感を出します。



明瞭度 0 ▶▶ -37

粒子 31 ▶▶ 37

完成



Before After

最後に明瞭度を下げたことで、暮れゆく街並みが一層情緒のある雰囲気となった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

21

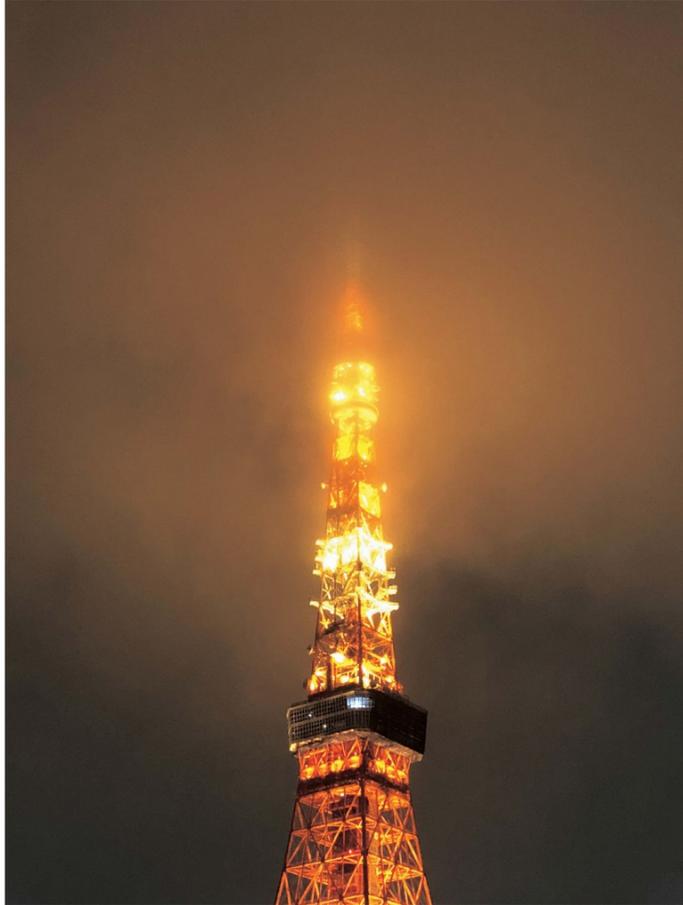
Outdoor
Nighttime

普及版フィルムの荒々しさを再現

【作品タイトル】 夜雨の東京タワー

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

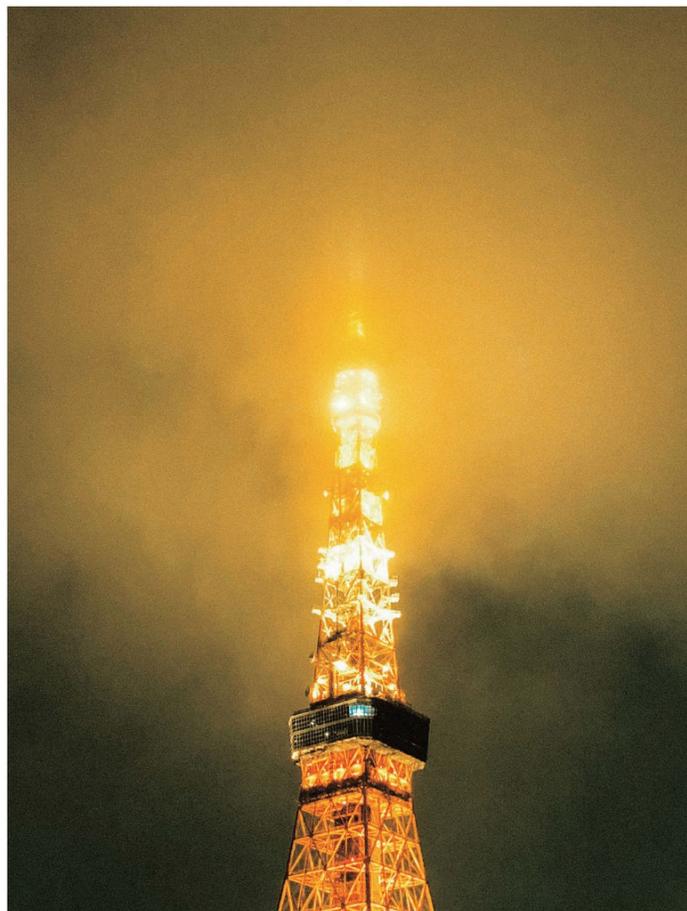
Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

冬の夜、東京タワーを見上げたら雨が照明で温められ蒸気が上がっているのが見えました。これを富士フィルム業務用400（35mm）で撮った少しザラつきのある質感のようにしたいと思いました。また、東京タワーの色をオレンジ寄りにする方向性で色補正をしていきます。

Step 1

基本補正を行う

廉価版の35mmフィルムをイメージして、硬調なトーンにしていきます。



露光量 + 0.94 ▶ + 0.22

コントラスト -16 ▶ +22

35mmフィルムをコントラスト高めにプリントしたときのようなトーンを意識して、パラメーターをプラス側に動かす。

黒レベル 0 ▶ -15

暗部（画面の端）を引き締めてタワーが浮き立つようにする。



Step 2

カラーを調整する

[カラー]

東京タワーの特殊な照明に対してデーライトフィルムの色が転ぶ様子を再現します。



色温度 -12 ▶ +3

デーライトフィルムで人工照明を撮ったときに、暖色に転ぶ雰囲気を出すために色温度をプラス側にする。

色かぶり補正 -16 ▶ -54

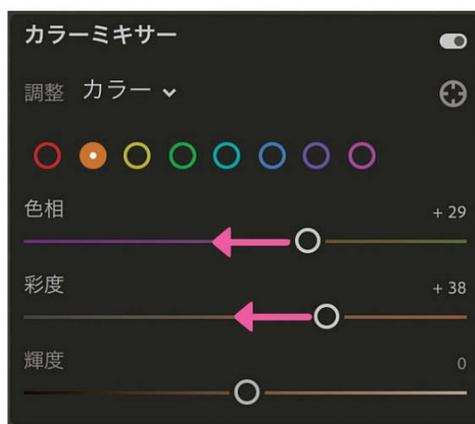
「グリーンに寄せる＝マゼンタを抜く」というイメージで思い切りマイナスにする。



今回の編集の9割はこのステップで決まる。色かぶり補正を効果的に使うのがフィルム再現において鍵となる。

[カラーミキサー]

カラーミキサーを使って東京タワーの色を調整します。



オレンジ	色相	+ 36 ▶▶ + 29
	彩度	+ 44 ▶▶ + 38

ベースプリセットは人肌の赤味をやわらげることを主眼としているが、今回の編集では東京タワーのオレンジ色を引き立てるために、色相をマイナス側に動かす。そのままだと彩度が高く感じるため、やや彩度を下げる。



Step 3

効果を調整する

この写真は水蒸気がポイントですので、水蒸気の質感をしっかりと見せるための調整を行います。



明瞭度 0 ▶▶ + 22

水蒸気の質感をはっきり見せたかったため、明瞭度を上げた。

粒子 31 ▶▶ 43

光量が少ないときのフィルムらしく、粒子を多めにする。

完成



Before : After

シャドウはつぶれ気味、ハイライトはディテールが細かく表現されているというピーキーな描写で35mmフィルムらしくなった。

2章

日中

朝

夕刻

夜

22

Outdoor
Nighttime

高感度フィルムの色合いを再現

【作品タイトル】 夜の海

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

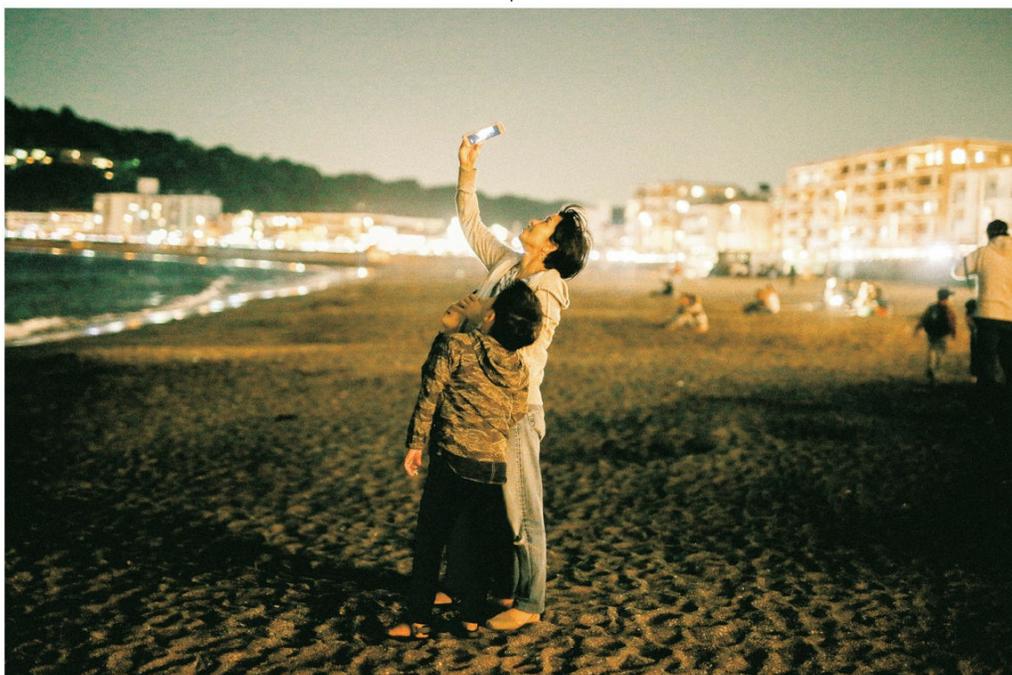
Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

仕上りをイメージする

感度を自由に変えられないフィルムは夜の写真が苦手ですが、富士フィルムのNATURA1600(現在は生産終了)のような高感度フィルムを使えば夜のスナップも可能です。今回の写真はNATURA1600で撮ったようなトーンと色調を目指して編集していきます。

Step 1 基本補正を行う

高感度フィルムを再現するために、基本補正でしっかりとトーンを作っていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.58
コントラスト	- 16 ▶▶ + 32

NATURA1600 はコントラストが高めのため、パラメーターをプラス側にする。

ハイライト	- 76 ▶▶ - 86
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 28
白レベル	0 ▶▶ + 34

背景の灯りを強調するために白レベルを上げる。



Step 2 カラーを調整する

デーライトフィルムが人工光源の作用で暖色に振れる特性を再現していきます。



色温度	- 12 ▶▶ + 3
-----	-------------

NATURA1600 を夜間に撮ったときの暖かな色合いをイメージして色温度を調整する。

色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 29
彩度	0 ▶▶ - 14



Step
3

効果を調整する

隠し味として使っている明暗別色補正ですが、今回は比較的しっかりと味付けに使います。



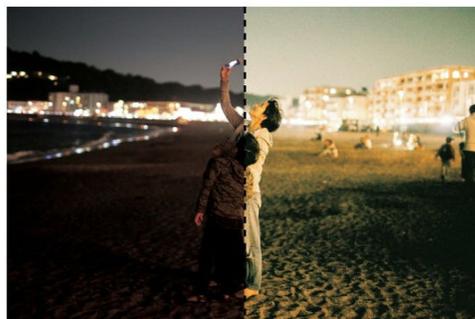
明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 141
	彩度	10 ▶▶ 17
明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 34
	彩度	9 ▶▶ 23

色調がいまいちっくりこない場合は、明暗別色補正のマトリックスにおいてシャドウとハイライトの位置関係を逆にしてみるとハマる場合がある。今回はシャドウをグリーン系に、ハイライトをオレンジ系にしたところ、自分のイメージする NATURA1600 的な色調に近づいた。



高感度フィルムは粒状性が荒くなるため、粒子の適用量を増やした。

完成



Before After

人工光源下の環境における NATURA1600 の特徴を忠実に再現できたと感じる。

2章

日中

朝

夕刻

夜

23

Outdoor
Nighttime

赤味を乗せた温かみのある編集

【作品タイトル】 夜の自販機

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



2章

日中

朝

夕刻

夜

Step
0

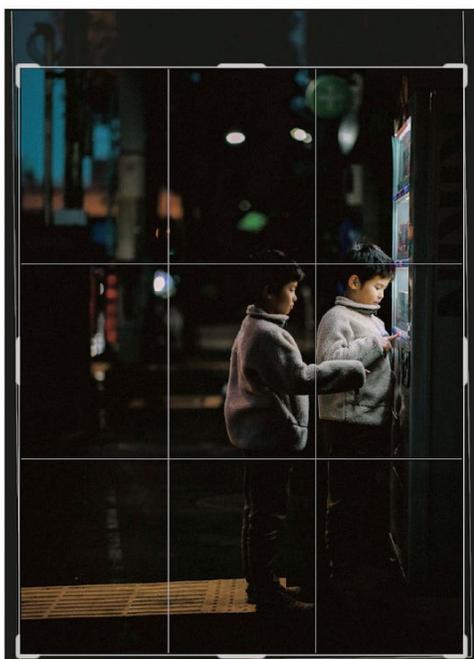
仕上がりをイメージする

煌々と暗闇を照らしている夜の自動販売機と、それを眺める子どもたちを情感のある絵にしたいと考えました。撮影時期は冬でしたが、富士フィルムのベーシックタイプのフィルム（SUPERIAなど）のようにやや赤味のある色調で、温かな雰囲気を目指していきます。

Step
1

写真を整える

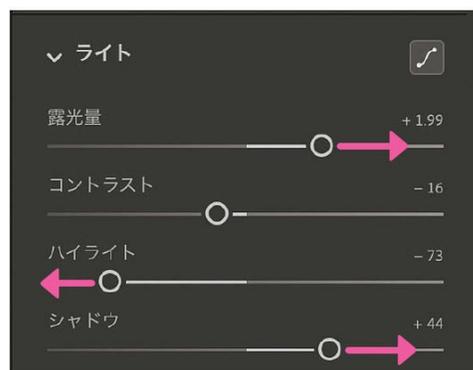
ベースプリセットの適用後、水平を補正し、トリミングします。筆者の好みで4:3にしていますが、3:2のままでも問題ありません。



Step
2

基本補正を行う

夜のスナップでは灯りを白飛びさせないために、かなりアンダーに撮るのが鉄則です。基本補正ではハイライトを保持しながら、全体を明るくしていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 1.99
ハイライト	- 64 ▶▶ - 73
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 44

露光量をかなり上げていく中、この写真のポイントである自動販売機の灯りが白飛びしないように、しっかり目にハイライトを下げる。



Step
3

カラーを調整する

[カラー]

低照度で彩度が落ちるフィルムの特徴を意識しながらカラーを補正していきます。



色温度のパラメーターを暖色方向に動かして温かな雰囲気。色かぶり補正については、グリーン方向にし、暖色になりすぎないようにバランスを取る。フィルムの「低照度で彩度が低くなる」傾向を意識して彩度を下げる。

[カラーミキサー]

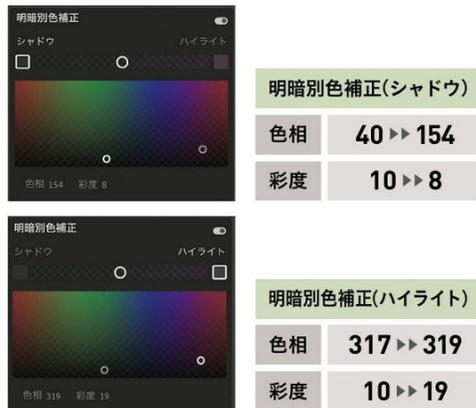
カラーミキサーを調整して人肌の色を補正します。



Step
4

効果を調整する

明暗別色補正を使って全体の色調のバランスを取ります。



STEP3でかなり暖色寄りにしたため、シャドウをブルー系統にすることでバランスを取った。

完成



Before : After

夜の自動販売機というありきたりな光景がドラマチックに仕上がった。



スマホカメラの機能の進化には目を見張るものがあります。これまで、カメラの進化は光学系やセンサーなどのハード面で画質を向上させてきましたが、近年のスマホカメラは人工知能などのソフト面で画質を向上させており、これまでスマホでは表現が難しかったボケや暗所撮影なども可能としているほか、一眼カメラの高級レンズでしか得られなかったような超広角の画角での撮影もできるようになりました。

● スマホ撮影のメリット

どんなに高画質なカメラを所有していても、それを持ち歩いていない限りは写真を撮ることはできません。筆者は可能な限り一眼カメラを持ち歩くようにしていますが、荷物が多いとどうしても家に置いて行かざるをえない場合もあります。一方でスマホは身につけるように常に持ち歩いていますので、その点においては一眼カメラを上回るポテンシャルを持っています。

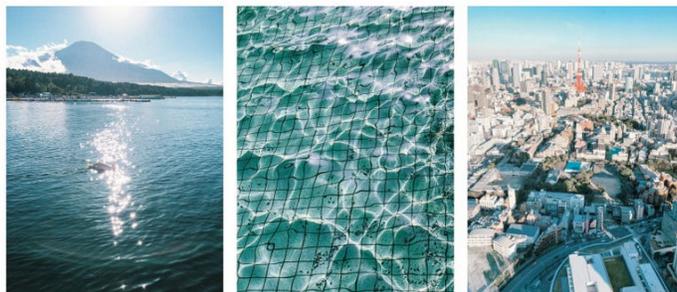
● カメラは持ち歩かないと始まらない

常に持ち歩けることが最大のメリットですが、その他にも以下のようなメリットがあります。

- ・大きなカメラと比べ心理的圧迫感がなく、街中に溶け込んだり、撮られる側がリラックスしやすい
- ・スマホで撮影してから編集、SNS などへのアップロードまで一気通貫で行うことができる
- ・(スマホカメラが進化したとはいえ) 焦点距離やボケの表現では一眼カメラには敵わず、制限のある中で撮ることで、純粋に撮影対象に集中しやすくなる

● スマホ撮影のポイント

普段カメラで撮影を行っている方だと、絞りやシャッタースピードの変更など、カメラらしい操作を行いたいかもしれません。ですが、スマホ撮影ではそういった部分はすべて人工知能に任せ、何を撮影するか？ どのようなアングルから撮るのか？ フレーミングは？ といった面に意識を集中させましょう (P.178 に続く)。



いずれも iPhone で撮影。
Lightroom Mobile でベー
スプリセットを適用。

第3章

シーン別フィルム再現
— 屋内編 —

24

Indoor
Daytime

現像機の違いを意識した編集

【作品タイトル】 和室にて

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

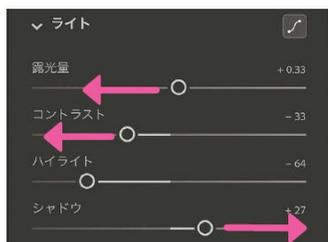
仕上がりをイメージする

室内に自然光が差し込んでいるものの、少し薄暗いシチュエーションです。いたずらに明るくせず、元の雰囲気を活かしたフィルム再現にしたいと思いました。Kodak系のネガフィルムをノーリツの現像機でプリントしたときの少しグリーンが強めの仕上がりをイメージしました。

Step 1

基本補正を行う

屋外編と同じベースプリセットを活用します。プリセットを適用したのち、基本補正でトーンを整えます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.33
コントラスト	- 16 ▶▶ - 33
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 27



ベースプリセットはもともと暗部を持ち上げているが、低照条件におけるネガフィルムのシャドウの浮いた感じを再現するために、ポイントカーブのシャドウ部分をさらに上げる。



Step 2

カラーを調整する

[カラー]

フィルム再現では、グリーンに寄せるか、マゼンタに寄せるかの選択がありますが、ノーリツ機はグリーンが強い印象があるため、思い切りグリーンに傾けます。



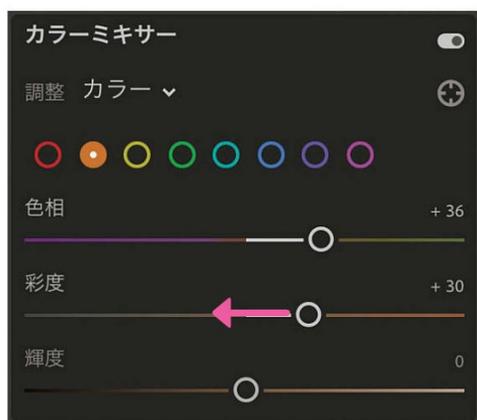
色温度	- 12 ▶▶ - 15
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 35
彩度	0 ▶▶ + 12

STEP 0 でイメージしたとおり、色かぶり補正を使ってグリーンを強めた。また、元の写真の鮮やかさが足りなかったため、彩度を少し上げた。



[カラーミキサー]

カラーミキサーを使って人肌の微調整を行います。



STEP 2 で全体の彩度を上げたことで、人肌が濃くなりすぎたため、オレンジ系統を少し抑えめにしてバランスを取る。



人肌が落ち着いた色調になる。

Step 3

効果を調整する

最後にStep2までで行った微調整と逆の補正を行い、全体の調子を整えます。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 28
	彩度	10 ▶▶ 19
明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 320
	彩度	9 ▶▶ 14

STEP 2 でかなりグリーン寄りにしたため、シャドウとハイライトにかぶせている赤系統の彩度を上げ、健康的な色合いをプラスして完成。

完成



ふすまの枠の色を見るとわかるように、茶色系統の色合いが明るくフィルムらしい色合いに仕上がった。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

25

Indoor
Evening

フェードを効かせたフィルム再現

【作品タイトル】 夕方のコーヒー

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ ポイントカーブを調整する

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

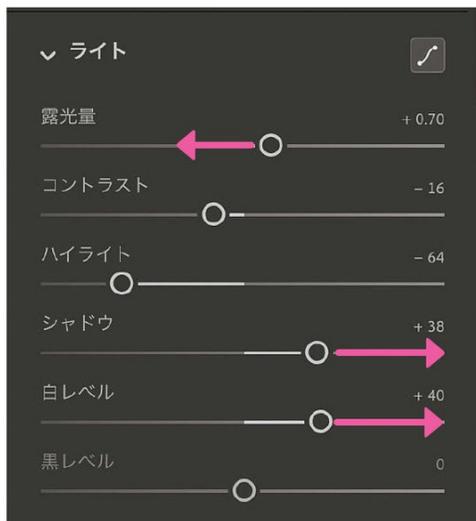
仕上がりをイメージする

夕方の光が窓から差し込み、湯気を浮かび上がらせているシチュエーションです。光量が少ない状況でのネガフィルムらしさ、具体的にはシャドウの浮き、ややグリーンがかった色合いを目指して編集を進めていきます。

Step
1

基本補正を行う

湯気を見せたいので、ハイライトを損なわないよう留意しながら、調整を行っていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.70
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 38
白レベル	0 ▶▶ + 40

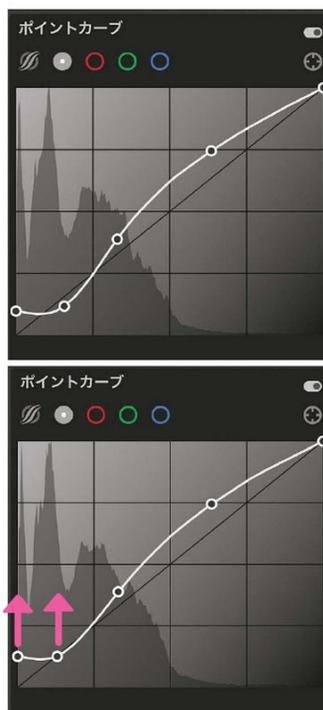
暗部のディテールをもう少し見せたかったため、シャドウのパラメーターを上げた。また、白レベル（ハイライトの中で最も明るい部分）を上げることで、湯気を強調した。



Step
2

ポイントカーブを調整する

ベースプリセットはシャドウの「浮き」を表現するために、カーブの暗部を上げていますが、これをさらに持ち上げて強調します。



今回はカーブのポイント2箇所を持ち上げた。



かなりマットなトーンになった印象を受ける。写真編集アプリVSCOでは「フェード」という調整項目となっていることから、一連の工程を「フェードをかける」ということもある。

Step 3

カラーを調整する

ベースプリセット適用で青味が強く出たので、色温度を中心に調整を行います。



色温度	- 12 ▶▶ - 2
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 20
彩度	0 ▶▶ - 15

夕方の雰囲気を出すために、色温度を暖色側に寄せる。フィルムは光量が少ない状態で彩度が低くなりがちなので、彩度を下げる。



Step 4

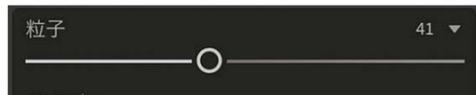
効果を調整する

明暗別色補正を使い、Step2で作ったシャドウの「浮き」に色を乗せます。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 96
	彩度	10 ▶▶ 13

シャドウにグリーン系の色を隠し味として加える。



粒子	31 ▶▶ 41
----	----------

光量が少ないときのフィルムらしく、粒子を多めにする。

完成



Before After

フェード感を効かせたことで、湿度を感じる描写になった。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

26

Indoor
Daytime

暗いものを暗いまま、静寂に

【作品タイトル】 新緑の窓

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

明暗差が大きいシチュエーションですが、無理に暗部を明るくせずに、ほの暗い雰囲気を活かした編集を心がけました。窓の外に見える緑がやや黄色っぽいと感じるので、この部分に特に注目して調整していきます。リファレンスはKodak Portra 400です。

Step
1

基本補正を行う

元の写真の雰囲気を活かすために、必要最低限の補正を行います。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.91
ハイライト	-76 ▶▶ -86

窓の外が白飛びしかけているため、ハイライトをベースプリセットの値よりさらに下げる。

シャドウ	+ 20 ▶▶ + 37
------	--------------

暗部の様子がうっすら認識できる程度にシャドウを上げる。



Step
2

カラーを調整する

[カラー]

暖色寄りとするか、寒色寄りとするかは写真のイメージで決めます。この写真は瑞々しい空気感にしたかったため、寒色方向に編集していきます。



色温度	-12 ▶▶ -20
色かぶり補正	-16 ▶▶ -30

全体的にアンバーな色調だったため、色温度を上げ、色かぶり補正をグリーン側にした。

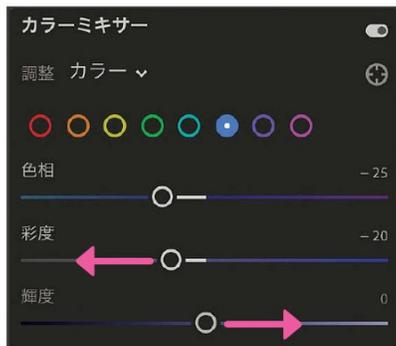
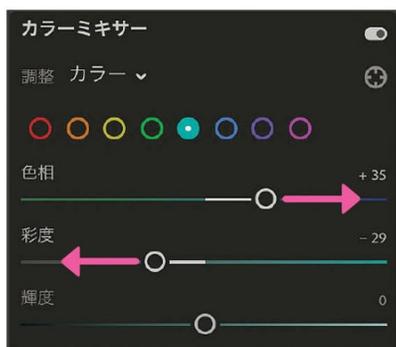
彩度	0 ▶▶ + 16
----	-----------

彩度がやや低いと感じたため、少し上げた。



[カラーミキサー]

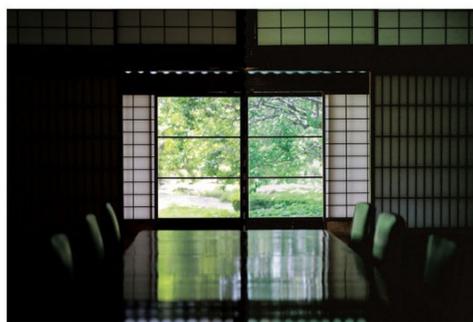
木々の緑の色をグリーンではなく、あえてアクアとブルーのカラーミキサーで微調整します。



アクア	色相	0 ▶▶ +35
	彩度	0 ▶▶ -29
	輝度	-38 ▶▶ 0
ブルー	彩度	-5 ▶▶ -20
	輝度	-47 ▶▶ 0

「植物の緑＝グリーン」という先入観を捨て、緑の中に含まれる青系統の色を調整。青味の彩度が高いと感じたため、アクアとブルーともに彩度を下げ、輝度を上げた。

完成



Before After

一見、あまり変化していないように見えるが、全体的に青味が加わって新緑の爽やかさが強調されている。

Memo

カ ラーミキサーのアクアとブルーを使って植物の色を調整しましたが、他の事例と同様にグリーンを使って補正しても問題ありません。下はグリーンの色相をプラスにし、彩度を下げて調整しました。似たようなアウトプットとなりますが、アプローチが異なることで微妙なニュアンスの違いが生まれることに注目してください。



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

27

Indoor
Daytime

「ハイライトに青」がテーマの編集

【作品タイトル】 雨の日の室内ポートレート

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

雨の日の室内の雰囲気を出すために、ハイライトに青味がかかった色調が合いそうだと思いました。今回はリファレンスとしているフィルムは特になく、「ハイライトの青味」のみをキーワードに自由な気持ちで編集していきます。

Step 1 写真を整える

ベースプリセットの適用後、水平を補正し、4:3のアスペクト比(縦横比)にトリミングしました。



水平がかなり右に傾いていたため、角度補正ツールを使って水平にする。



Step 2 基本補正を行う

寄りのポートレートで、トーン(調子)に目がいきやすいタイプの写真ですので、きめ細かな調整を行っていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.06
コントラスト	- 16 ▶▶ + 20
ハイライト	- 64 ▶▶ - 62
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 15

上の4項目はまさに「微調整」を目的に、パラメーターを細かく調整する。

白レベル	0 ▶▶ - 35
黒レベル	0 ▶▶ - 40

白レベルを下げて抜きの悪い感じをあえて出しつつ、黒レベルも下げて暗部を引き締める。今回のトーン作りで最も特徴的なプロセスである。



Step 3

カラーを調整する

色温度を寒色、色かぶり補正をグリーンへ大胆に寄せてミントグリーンのような色調にします。



色温度	- 12 ▶▶ - 25
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 32

上の4項目はまさに「微調整」を目的に、パラメーターを細かく調整する。



オレンジ	
色相	+36 ▶▶ +13
彩度	+44 ▶▶ +27

肌色の彩度を下げ落ち着いた雰囲気にする。



ブルー	
色相	- 25 ▶▶ - 13
彩度	- 5 ▶▶ - 8
輝度	- 47 ▶▶ - 30

一見、青の要素はないが、ブルーの調整で写真全体のバランスを取る。



Step 4

効果を調整する

最後に肌色を見ながら、明暗別色補正で色調の微調整を行います。



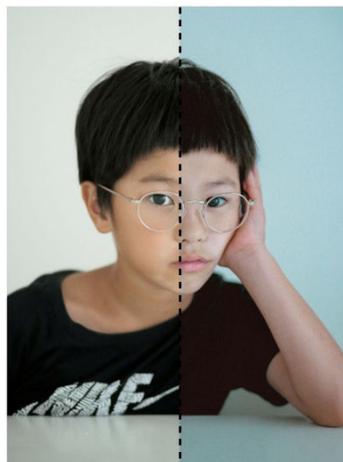
明暗別色補正(シャドウ)	
色相	40 ▶▶ 23
彩度	10 ▶▶ 22



(ハイライト)	
色相	317 ▶▶ 302

シャドウ、ハイライトともに赤味を強めて、STEP3までのプロセスで「青くしすぎた分」を中和して完成。

完成



Before After

中庸なBeforeの写真に対して、イメージ的な要素（雨の日の室内）を盛り込めたと感じる。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

28

Indoor
Morning

クセのないプレーンなフィルム風

【作品タイトル】 電話機あそび

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上りをイメージする

誰もが子どもの頃、電話機で遊んだ経験があるのではないのでしょうか？ そのような普遍的な光景を、なるべく流行り廃りのないプレーンなフィルム再現で表現したいと思いました。Kodak Portra 400や富士フィルムPRO400といったハイエンドのフィルムを極端に色転びさせずプリントするイメージです。

Step 1 基本補正を行う

「ハイライトのクリッピング表示」などを活用して明るい部分の白飛びに注意しながら露光量を決めていきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.32
シャドウ	+ 20 ▶▶ + 37

ベースプリセットの露光量の設定値では面積の大部分が白飛びを起こしていたため、露光量を下げた。全体を暗くした分、シャドウを上げて明るい朝の光らしさを演出した。



Step 2 カラーを調整する

[カラー]
朝の凛とした空気感を出すために、クールな色合いに調整します。



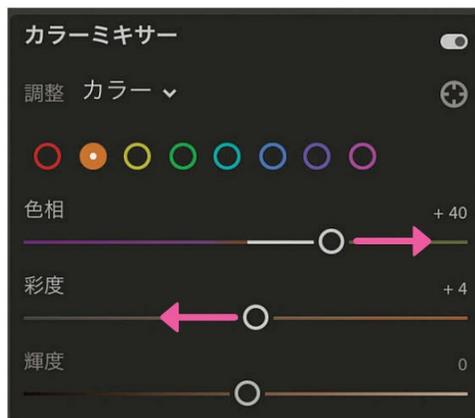
色温度	- 12 ▶▶ - 24
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 30

色温度、色かぶり補正ともに、ベースプリセットの設定値よりもマイナス方向にパラメーターを設定し、ミントブルー感を出す。



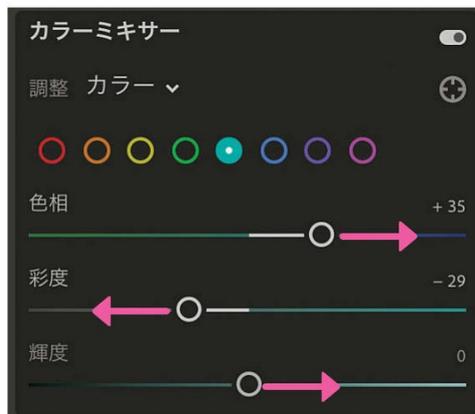
[カラーミキサー]

人肌と電話機の色に着目して、カラーミキサーの調整を行っていきます。



オレンジ	彩度	+ 36 ▶▶ + 40
	輝度	+ 40 ▶▶ + 4

この写真では人肌に関係してくるオレンジの色相を黄色側（赤味を引くイメージ）に動かすとともに、彩度を落とし人肌が明るくなるようにする。



アクア	色相	0 ▶▶ + 35
	彩度	0 ▶▶ - 29
	輝度	- 38 ▶▶ 0



ブルー	彩度	- 5 ▶▶ - 20
	輝度	- 47 ▶▶ 0

アクアとブルーを交互に調整しながら、電話機をよりポップな色合いにする。

完成



Before After

人物の肌が濁り、朝の爽やかさを損なっていた Before と比べ、グリーンな印象の仕上がりがりとなった。

3章

自然光

人工光

自然光 × 人工光

29

Indoor
Daytime

業務用フィルムをイメージした編集

【作品タイトル】 古民家のかき氷

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

35mm一眼レフに富士フィルム業務用400を詰めてラフに撮ったフードフォートのイメージです。なお、ハイライトが黄色っぽくなる傾向にあるKodakに対し、富士フィルムはハイライトが赤っぽくなる傾向があるので、この写真はそのへんを意識して編集していきます。

Step
1

写真を整える

これは筆者の選択ミスなのですが、この日は広角レンズ1本を付けて出かけたため、漫然としたフードフォトとなりました。背景には他のお客さんが写り込んでおり雑然とした印象です。



いろいろと写り込んでしまっているため、大幅にトリミング。横位置から縦位置に変更した。広角特有のパース感をやわらげるように切り取った。

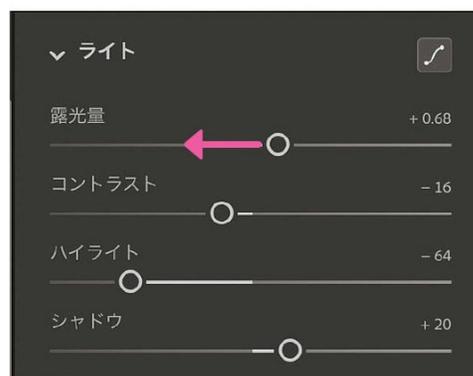


これにベースプリセットを適用。すでに完成形に近くなった。よくよく見ると広角特有のパース感が残っているが、パッと見、50mm付近の標準レンズで撮ったような印象となった。

Step
2

基本補正を行う

写真編集においていろいろとパラメーターを動かしたくなるのが人情ですが、最小プロセスで理想のトーンを目指しましょう。



露光量

+ 0.94 ▶▶ + 0.68

今回は露出を少し下げるだけにとどめる。



Step
3

カラーを調整する

[カラー]

彩度の数値と写真の色の濃さは別物です。写真の実質的な色の濃さを見極めながら調整を行います。

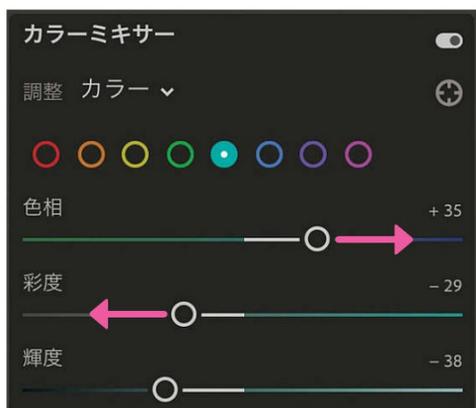


彩度 0 ▶▶ +13

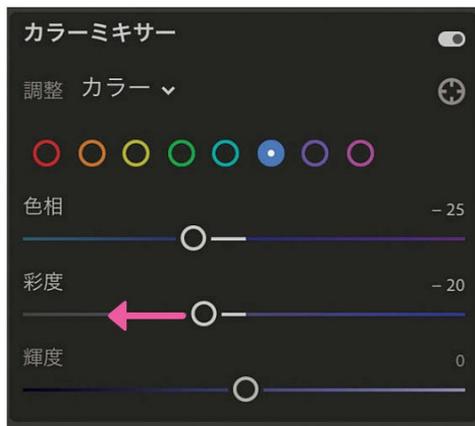
色温度と色かぶり補正の色合いはイメージどおりだったため、ベースプリセットの設定値のままとした。色味がやや薄い印象だったため、彩度を少し上げた。

[カラーミキサー]

写真の赤味みを強調するために、赤を足すのではなく、「青を抜く」プロセスを踏みます。



アクア 色相 0 ▶▶ +35
彩度 0 ▶▶ -29



ブルー 彩度 -5 ▶▶ -20

今回の編集では、赤を足すのではなく暗部などに見られた青っぽさをアクアとブルーのカラーミキサーでやわらげる方法を取った。

完成



Before After

明るくポップなフィルムテイストとするために、ベストな露光量を探った編集ができた。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

30

Indoor
Morning

6 × 6 中判フィルムを目指した編集

【作品タイトル】 海に見える部屋

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 明暗別色補正を調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

ハッセルブラッドやローライフレックスに富士フィルムPRO160NSを詰めて、6×6（正方形）で撮ったときの仕上がりをイメージしました。窓の外からの光を受けている典型的な室内逆光のシチュエーションですが、無理に明るくせずに元の写真の雰囲気を活かした編集を目指します。

Step 1

写真を整える

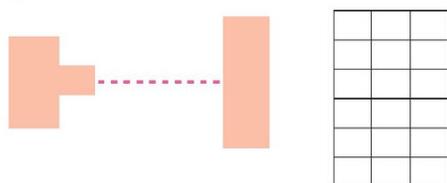
元の写真は、水平は大きく傾いていますし、部屋の雑多なものが写り込みすぎていて、かなり残念な状況です。角度補正とトリミングで写真を整えていきます。



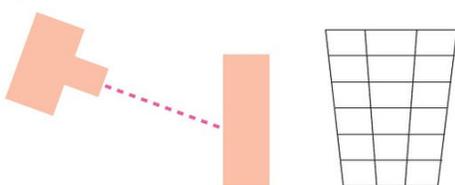
ベースプリセットを適用したのち、角度補正で水平を整えるとともに、1:1に切り抜く。

また窓枠に注目すると、垂直方向についても下図Bのように上から見下ろし気味に撮っているため、下がすぼまって落ち着が悪いです。

A カメラが被写体に正対している



B カメラがハイアングル



[[ジオメトリ]で垂直方向を補正]

編集モジュール最下部にある「ジオメトリ」で垂直方向を補正する。



垂直方向のゆがみを修正したことで、写真右上に余白が生まれてしまったため、再度トリミングして画面を整える。



水平と垂直が正しい「端正な」写真となった。

Step 2

カラーを調整する

Beforeの写真の海の色がくすんでいるため、ブルーを際立たせる調整を行います。



色温度	-12 ▶▶ -5
色かぶり補正	-16 ▶▶ -24



アクア	色相	-25 ▶▶ -21
	彩度	-5 ▶▶ +27
	輝度	-47 ▶▶ -30

窓から見える海の青さを強調するために、ブルーの調整を行う。



Step 3

明暗別色補正を調整する

モノトーンな部屋で青を強調すぎると、クールすぎるため、赤を隠し味程度に入れます。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 47
	彩度	10 ▶▶ 7

シャドウを微調整して、全体の色調を整える。

完成



Before : After

少ない編集プロセスで、まるで海外のビーチリゾートのような雰囲気を出すことができた。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

31
indoor

あえて色かぶりを演出した編集

【作品タイトル】 水槽をのぞく子どもたち

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 写真を整える

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 効果を調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

水槽を照らす人工光のみのシチュエーションです。現在、市場に出回っているカラーネガフィルムは太陽光で正しい色合いになるように設計されていて、色温度が自然光と異なる人工光の場合は色かぶりを起こす傾向があります。今回の編集ではそうした色かぶりをあえて再現していきます。

Step 1

写真を整える

水槽のガラスに反射した照明が気になりますので、「修復ブラシ」のモジュールを使ってレタッチで消します。



四角で囲った部分の反射が気になるため、修復ブラシでレタッチする。



ベースプリセットを適用したのち、わずかに傾いた水平を角度補正ツールで整える。



Step 2

カラーを調整する

[カラー]

色温度が約5500Kに設定されているデライトフィルムを使って室内の照明で撮影した場合、全体的にやや黄色味が増す傾向があります。この後のステップでも微調整を行いますが、色温度、色かぶり補正は全体の雰囲気を決める重要なプロセスです。



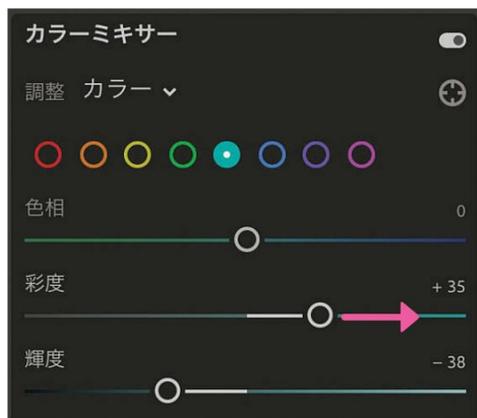
色温度	- 12 ▶▶ + 9
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 22

色温度と色かぶり補正、両者の補正幅のバランスによって、色合いは無段階に変化する。いろいろ試して自分のイメージに最も近いバランスに追い込むことがポイント。



[カラーミキサー]

水族館フォトにおいては水の色をどのような色調に仕上げるかが重要です。カラーミキサーのパラメーターを少しずつ動かしてみましょう。



アクア 彩度 0 ▶▶ +35

水の色は、カラーミキサーのアクアの彩度を上げることでコクを出す。



Step 3

効果を調整する

仕上げに、シャドウの色合いにひと工夫加えます。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 225
	彩度	10 ▶▶ 23

ベースプリセットはシャドウに赤系統の色を隠し味程度に入れているが、今回の編集ではSTEP2で黄色味を増やした分、シャドウに青系統の色をかぶせてバランスを取る。

完成



Before After

一見、ベースプリセットを当てただけの状態と大差がないようだが、途中の工程で黄色味を強くするプロセスを挟んだことで、人工光源下の微妙なニュアンスのブルーを再現できた。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

32

Indoor
Daytime

アンバー×フェードでレトロ調に

【作品タイトル】 丹頂金魚

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

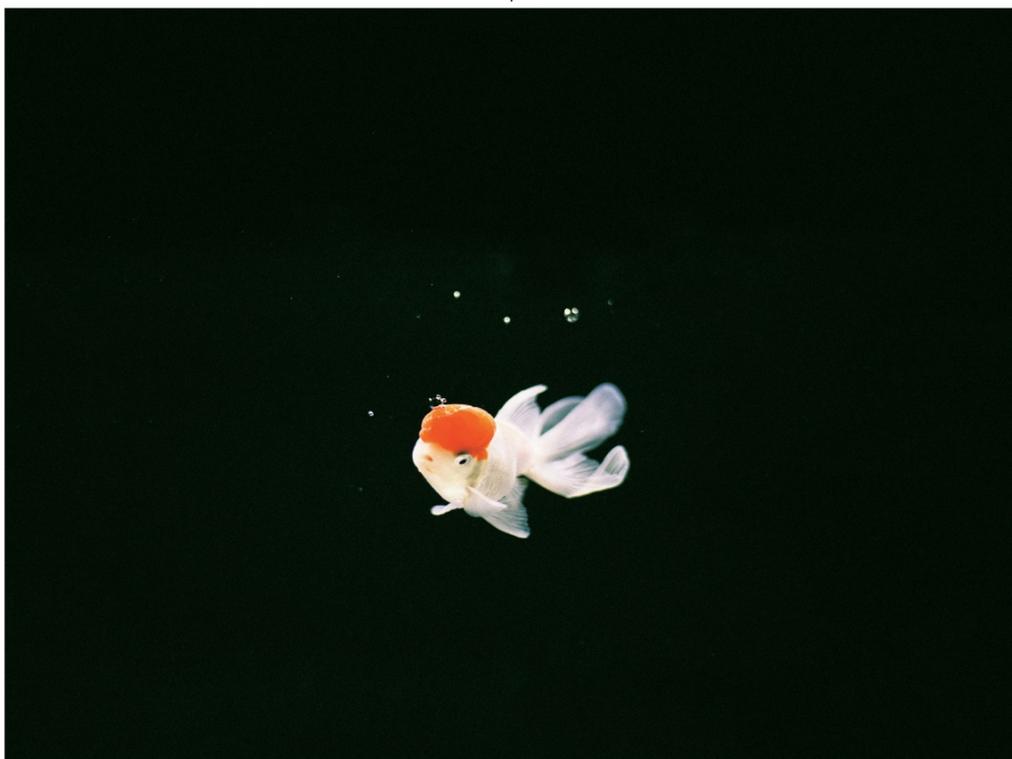
Before



Process

- Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする
- Step 1 ▶ 基本補正を行う
- Step 2 ▶ ポイントカーブを調整する
- Step 3 ▶ 効果を調整する
- Step 4 ▶ カラーを調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

仕上がりをイメージする

非常に光量の少ない状況での撮影です。フィルムは高い感度のものでもISO1600ということもあり、この写真のような暗い場所でラフにスナップしたフィルムの作例は少なめで、通常のフィルム再現より仕上がりをイメージするのが難しいでしょう。今回は暗部を浮かせることと、ハイライトをややアンバーにすることの2点を意識して編集していきます。

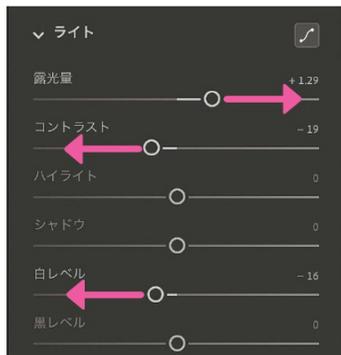
Step 1

基本補正を行う

はじめにベースプリセットを適用してみましたが、光線状況が特殊なため、イメージとかけ離れてしまいました。



汎用性の高いベースプリセットではあるが、このような特殊な状況には必ずしも適さない。プリセットの適用を解除し、元の写真からマニュアルで編集する。



露光量	+ 1.29
シャドウ	- 19
白レベル	- 16

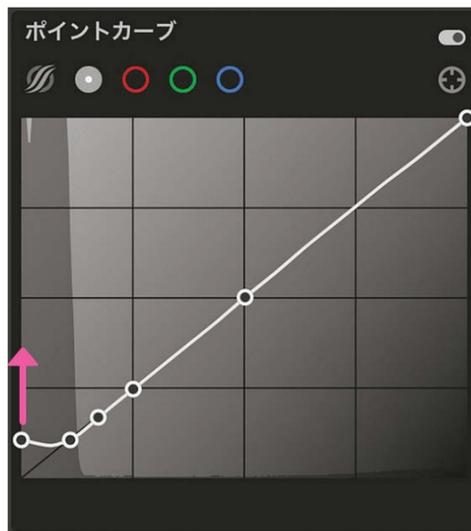
金魚の鱗などのディテールが見えるように白レベルを下げる。



Step 2

ポイントカーブを調整する

ポイントカーブの調整で、画面の9割を占める黒を「濃いグレー」にします。



低照度の状況でネガフィルムを使うとシャドウが浮く（黒がグレーっぽくなる）傾向がある。ポイントカーブの暗部を持ち上げて、これを再現する。



Step 3

効果を調整する

暗闇でスポットライト、という特殊なライティングにおけるフィルムの色転び感をイメージして、明暗別色補正を大胆に補正します。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	121
	彩度	36
明暗別色補正 (ハイライト)	色相	38
	彩度	27

シャドウはかなり濃いグリーン、ハイライトは濃いめにレッドを乗せて色転び感を演出する。



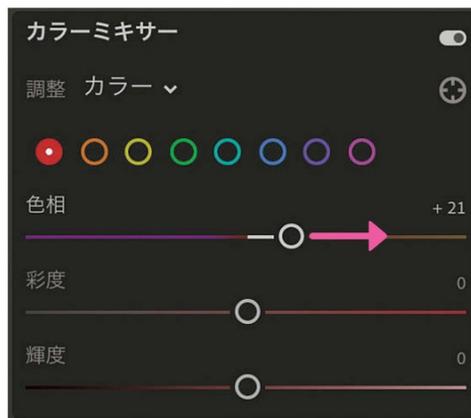
粒子をやや多めにして、低照度の条件下でフィルムを使ったときのようなザラつきを出す。

Step 4

カラーを調整する

最後に金魚の頭の赤い部分をカラーミキサーでやや朱色寄りに調整します。

[カラーミキサーを微調整する]



完成



Before After

はっきりくっきりだった Before と比べ、フェードがかかり、褐色したような色合いに仕上がった。

3章
自然光
人工光
自然光×人工光

33

Indoor
Nighttime

光源の雰囲気を活かした色調補正

【作品タイトル】 秘密基地

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

Step 3 ▶ 明暗別色補正を調整する

Step 4 ▶ 効果を補正する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

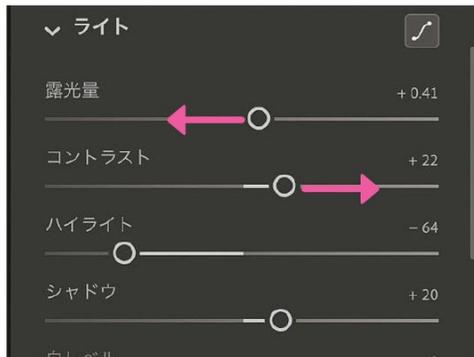
仕上りをイメージする

二段ベッドの中でキャンプ用のランタンを照らして遊んでいるシチュエーションです。白熱灯に対するネガフィルムの色の出方は、デジタルのそれと大きく異なります。一般的には色が転んでいて好まれないかもしれませんが、この写真では意図的に転んだ色調を再現していきます。

Step 1

基本補正を行う

硬調に現像した35mmフィルムをイメージしてコントラストを中心に調整していきます。



露光量	+ 0.94 ▶▶ + 0.41
コントラスト	- 16 ▶▶ + 22

低照度時のネガフィルムのやや硬調なトーンを想定して、コントラストを大幅に上げる。



Step 2

カラーを調整する

人工光源におけるネガフィルムらしさを演出するために、カラーツールを使って全体のグリーンを強めます。



色温度	- 12 ▶▶ - 15
色かぶり補正	- 16 ▶▶ - 25
彩度	0 ▶▶ - 4

デーライトフィルムの人工光源に対する色のかぶり方を再現することにおいては、色かぶり補正をグリーン側に寄せることがポイントとなる。



Step
3

明暗別色補正を調整する

この作品では、「隠し味」ではなく、しっかりと「味付け」するために明暗別色補正を調整します。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	40 ▶▶ 185
	彩度	10 ▶▶ 19



明暗別色補正 (ハイライト)	色相	317 ▶▶ 48
	彩度	10 ▶▶ 23

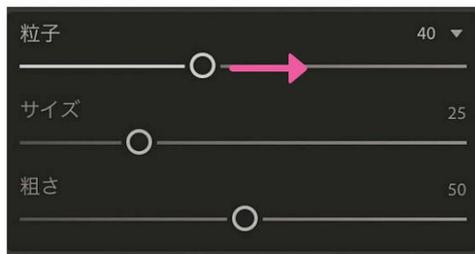
シャドウをグリーン系にしつつ、ハイライトは色かぶり感を強めるためにオレンジ系の色を乗せていく。



Step
4

効果を補正する

35mmフィルムを低照度で使うと粒子が目立つことが多く、これを再現するために粒子の適用量を大幅に増やします。



粒子量を増やして、適度にザラつきを出す。

粒子	31 ▶▶ 40
----	----------

完成



Before | After

グリーンがかった色調と高めのコントラストにより、低照度における35mmらしさが出た。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光

34

Indoor
Daytime

ノーリツ機での現像をイメージ

【作品タイトル】 古民家の夏

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ カラーを調整する

After



3章

自然光

人工光

自然光×人工光

Step
0

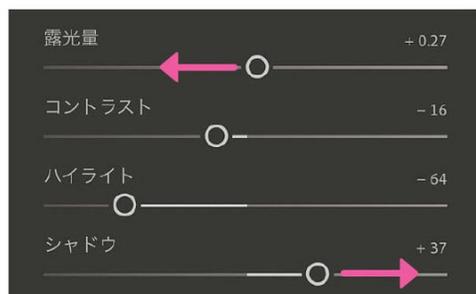
仕上がりをイメージする

古民家のレトロな雰囲気に低彩度な編集が合いそうだと思いながら撮影しました。冒頭でも触れたとおり、同じ銘柄のフィルムでも現像機のメーカーによって色調が異なる傾向があります。この写真はKodak Portra 400をノーリツの現像機(自動補正)でスキャンした同条件の写真を参考に編集しました。

Step 1

基本補正を行う

明るいところと暗いところの輝度差が大きいため、主に暗いところを持ち上げることで調整していきます。



露光量	+0.94 ▶▶ +0.27
シャドウ	+20 ▶▶ +37

ベースプリセットの露光量の設定値だと明るすぎたため、これを下げつつ、室内の暗い部分のディテールが適度に浮かび上がる程度にシャドウを上げる。



Memo

ラ チチュードの広いネガフィルムの階調に近づけるために「ハイライトを下げ、シャドウを上げる」というのがフィルム再現の編集の基本。ですが、過剰に補正すると、不自然なHDR (High Dynamic Range) のようなトーンになりますので注意しましょう。

Step 2

カラーを調整する

[カラー]

この作例は自然光がメインでありつつ、室内の電灯も入っているミックス光源です。人工光源が混ざることによる、色転び感を主に色かぶり補正で表現していきます。



色温度	-12 ▶▶ -25
色かぶり補正	-16 ▶▶ -48

色温度、色かぶり補正ともに、ベースプリセットの設定値以上にマイナス方向に動かし、色転びた感じを出す。

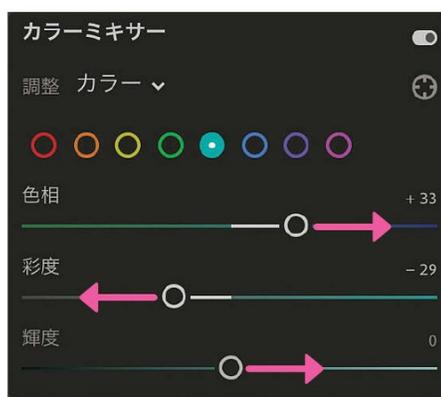
彩度	0 ▶▶ -8
----	---------

ノーリツ機で現像したフィルムは、富士フィルム機での現像と比べて彩度が低い傾向があると感じるため、彩度を下げる。

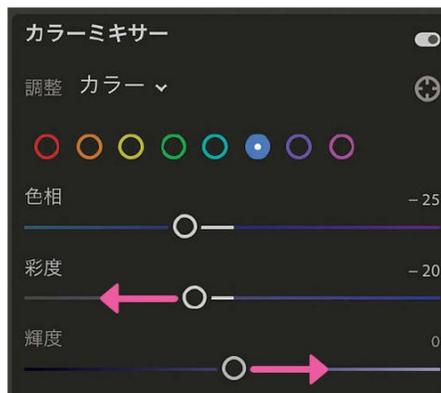


[カラーミキサー]

「No.22 新緑の窓」の編集プロセスでも触れましたが、一見その色が含まれていないような場合でも、色相や彩度を調整することで色調のニュアンスが変わる場合があります。



アクア	色相	0 ▶▶ +33
	彩度	0 ▶▶ -29
	輝度	-38 ▶▶ 0



ブルー	彩度	-5 ▶▶ -20
	輝度	-47 ▶▶ 0

この写真においては青い対象物はほとんど見当足らないが、ブルー系統を調整することで、写真全体の色調を微調整している。



Step2のカラーミキサーの調整は微妙なニュアンスの違いのため、わかりにくいですが、例えば青っぽかったTシャツが白くなっている。

完成



Before

After

健康的な肌が再現できている Before もよいが、今作はフィルムらしく仕上がった After のほうが古民家のシチュエーションにマッチすることができた。

3章

自然光

人工光

自然光×人工光



ここでは、スマホでの写真撮影をより楽しくするための小技をいくつかご紹介します。

● 無音カメラアプリを使う

スマホカメラのシャッター音は一眼カメラ以上にけたたましく、場の雰囲気を壊してしまいます。日本では携帯電話業界の自主規制によって、シャッター音が消せない仕様となっており、海外の人たちは、「なぜ日本人はうるさいシャッター音を鳴らして写真を撮っているんだ?」と疑問に思うようです。筆者にとってスマホカメラを使いたくない理由となっていたシャッター音ですが、これを無音にできるアプリを使うことで、場の雰囲気を壊すことなく撮影ができます。

● 編集もスマホで

スマホで撮影した写真は、Lightroom Mobileに取り込んで編集します。PCのLightroomと連携させれば、PCと同じプリセットが使えて非常に便利です。本書のベースプリセットもスマホ写真と相性がよいので、ぜひお試しください。より気軽に編集したい場合は、フィルムライクなプリセットが揃うVSCOがおすすめです。

● クリームでフィルター効果

スマホカメラは被写界深度が深いこともあり、ともすれば味気のない写りをします。そんなときはハンドクリームをごく少量、カメラレンズに塗ると、まるでソフトフィルターかクモリのあるオールドレンズのような柔らかな表現が可能です。



ハンドクリームをレンズに塗布して撮影



ポートレートモード×ハンドクリーム



ポートレートモードで撮影



Lightroom Mobileで「写ルンです」風の編集

第4章

ポジフィルムと
モノクロフィルムの再現

ポジフィルムとモノクロフィルムの編集プロセス

ここまで、現在のフィルムブームをけん引しているカラーネガフィルムの再現について説明してきました。この章ではカラーネガ以外のフィルム、ポジフィルム（リバーサルフィルム）とモノクロフィルムを再現する編集プロセスを紹介していきます。

● ポジフィルムとネガフィルムの違い

本書の序盤でも触れたとおり、ネガフィルムには決まった色がありません。色や明暗が反転しており、これを正転させ補正したうえでプリントすることで、はじめて写真となります。また、ネガフィルムはラチチュードが広いので、ラフに露出を設定して撮影しても“ちゃんと写る”という特徴があります。他方、ポジフィルムは撮影した像がそのままフィルムに焼き付けられ、ネガフィルムと比べて撮影後の補正はほとんどできないため、より高い撮影スキルが求められます。

一般的にネガフィルムと比べ色再現や解像度の点で優れているとされ、フィルム時代、フォトグラ

ファーはポジフィルムを中心に使っていました。

● ポジフィルムの絵作りにおける特徴

ポジフィルムは、ネガフィルムと比べて色が鮮やかで、解像度が高いことが最も大きな特徴といえるでしょう。プリント時の補正によって色調やトーンが変わってくるネガフィルムと異なり、ポジフィルムは銘柄ごとに明確に絵作りの違いがあります。例えばポジフィルムの代表的な銘柄、富士フィルムのVelviaは、色の鮮やかさが最大の特徴で、中でも赤や緑の発色が濃いことからネイチャーフォトに多用されていました。対極的に、KodakのKodachromeはやや淡い発色で、ドキュメンタリー写真などに用いられていました。

ポジフィルムの再現プロセス

ポジフィルムの中で、比較的中庸な発色の富士フィルム PROVIA 100F を再現すべく、編集をしていきます。なお、ベースプリセットは使用しません。下の写真を編集していきます。



Step 0

仕上りをイメージする

はじめに、ポジフィルムの特徴を整理していきます。いずれもネガフィルムとの比較においての特徴です。

- ・彩度とコントラストが高い
- ・解像度が高い
- ・色調が大きく異なる。特に青の発色に差異がある

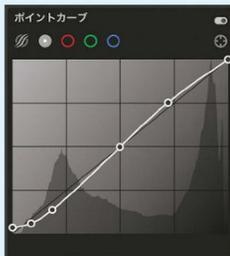
今回リファレンスとする富士フィルムPROVIA 100Fは、同社のデジタル一眼のカラーモード(フィルムシミュレーション)のスタンダードと位

置付けられるだけあり、極彩色といわれるVelvia 50などと比べると、彩度は比較的中庸であり扱いやすいという特徴があります。とは言え、本書でここまで取り扱ってきたネガフィルムとはカラーパレットが大きく異なり、これを再現していきます。

Step 1

ポイントカーブでベースを作る

ポジフィルム独特の色調を再現するために、前章と異なるアプローチで編集を進めていきます。はじめにポイントカーブを使ってベースとなるトーンと色調を作っていきます。ポイントカーブをR(Red)、G(Green)、B(Blue)に分けて調整します。



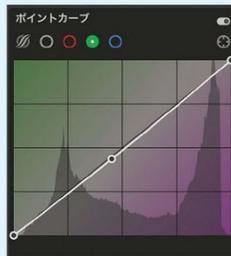
ポイントカーブ

コントラストをやや高めるために、カーブをS字にする。また、ネガフィルムほどでないにしても、暗部を少し持ち上げる。



ポイントカーブ (R)

RGBのポイントカーブ同様にややS字にする。これにより赤系統の色がハイライトにおいて強めになり、シャドウでは弱めになる。



ポイントカーブ (G)

カーブの中心付近にポイントを打ち、ほんの少しだけ下げる。これにより中間調にわずかにマゼンタがかぶる。



ポイントカーブ (B)

中間調を中心にゆるやかに持ち上げる。全体的に少し青くなる。



コントラストが高く、赤系統の彩度が上がりあました。ネガフィルムライクな編集では「マゼンタを抜く」ことが多かったですが、ポジフィルムの再現においては「マゼンタを効かせる」という真逆のアプローチとなります。

4章

Step 2 ライト&カラーを補正する

露光量や色温度などを調整し、ポジフィルムらしい色調に近づけていきます。



色温度	-16
彩度	-14



露光量	+1.40
-----	-------



Velviaのようなイメージに仕上げたい場合は彩度を下げる必要はないと思われるが、ポイントカーブの調整により派手になりすぎたため、彩度を落とした。

Step 3 カラーミキサーを調整する

ポジフィルム再現において鍵となるレッド/グリーン/ブルーの色味を個別に調整します。



色相	+21
----	-----

レッド
色相をプラス側にし、朱色っぽい赤にする。



色相	+18
----	-----

グリーン
色相をプラス側にし、青味がかったグリーンにする。



色相	-29
----	-----

ブルー
この写真ではあまり効果がわかりませんが、輝度を下げて青空のコクを出す。



Step 4

明暗別色補正を調整する

最後に隠し味程度にシャドウにネイビー系のブルーをかぶせたら完成です。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	246
	彩度	11

完成



全体的にマゼンタを乗せたカラーバランスにより、コクのある仕上がりになった。鳥居の赤色の出方にポジフィルムらしい特徴が出せている。

Memo

ネガフィルム風の編集

前 章までのネガフィルムライクな編集と比較すると、「マゼンタを効かす」と「マゼンタを抜く」という真逆のアプローチがわかりやすいかと思います。

この写真は夕刻に撮影しており、ややマゼンタがかかったポジフィルム風編集の空色のほうが撮影時の記憶色に近いです。



4章

ポジフィルム風
モノクロフィルム風

35

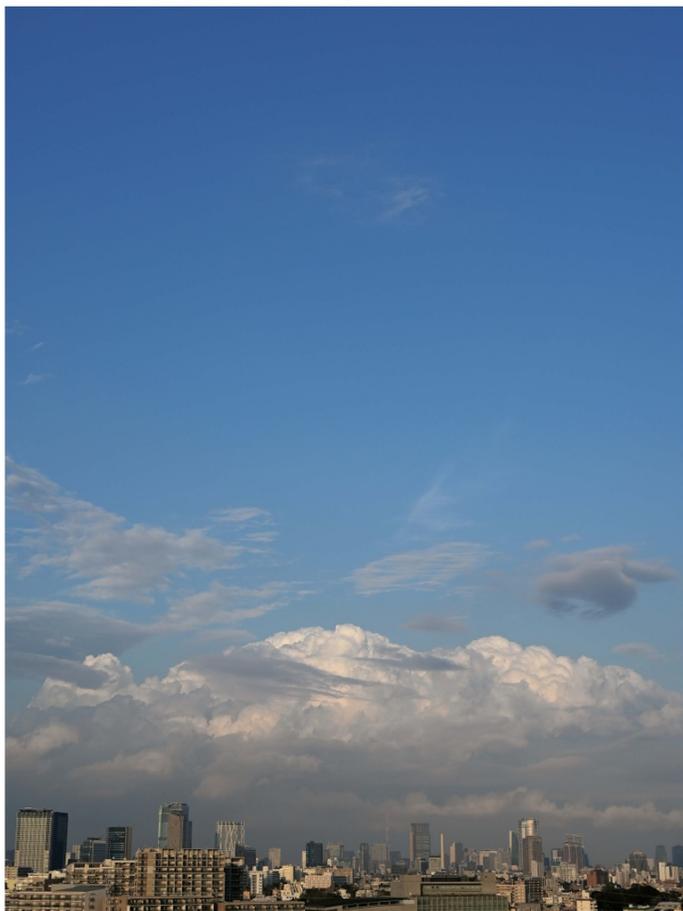
Reversal
Monochrome

マゼンタを活かした濃厚な青空に

〔作品タイトル〕 青い空と入道雲

〔シチュエーション〕 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

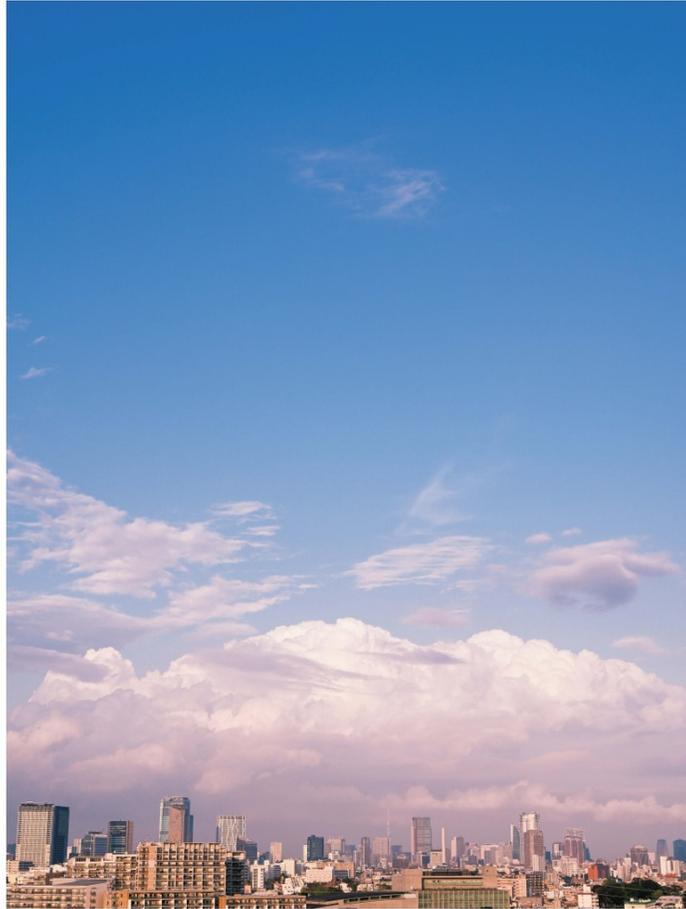
Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ ポイントカーブでベースを作る

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ カラーを調整する

After



Step
0

仕上がりをイメージする

ネガフィルムの再現で行っていた空をシアン系の色に編集するのは違い、マゼンタ寄りのコクのある青空にしたいと思いました。リファレンスは富士フィルムの PROVIA 100Fですが、同社の Velvia 100も参考にしながら編集しています。

4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

Step 1

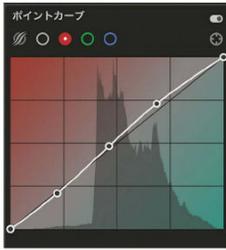
ポイントカーブでベースを作る

アスペクト比を4:3にトリミングしたのち、ポイントカーブをRGBごとに調整していきます。

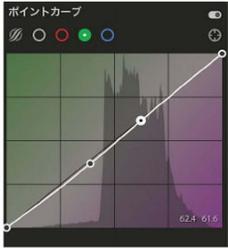
ポイントカーブ



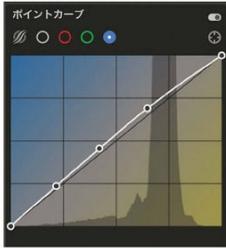
ポイントカーブ (R)



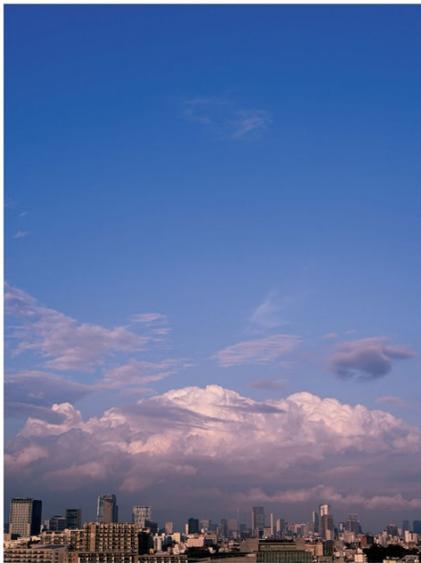
ポイントカーブ (G)



ポイントカーブ (B)



基本的な補正パターンは、前の事例と同じ。写真の色を見ながらポイントの位置などを微調整する。



Step 2

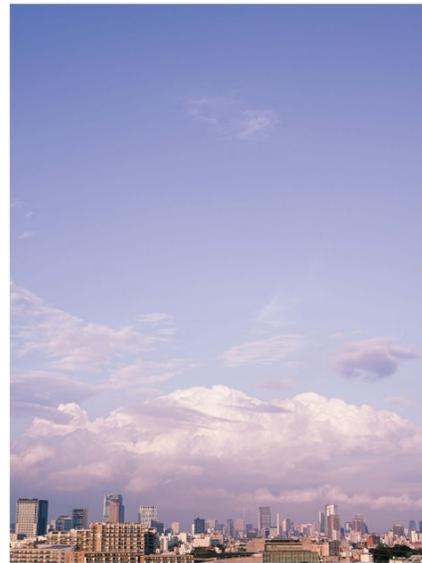
基本補正を行う

ポイントカーブのみで明るさやコントラストの補正は可能ですが、微調整はパラメーターを使ったほうが簡単です。ライトのパネルを使って補正をしていきます。



露光量	+ 0.90
シャドウ	+ 57

写真がやや暗いため、露光量を上げるとともにシャドウを明るくした。



Step
3

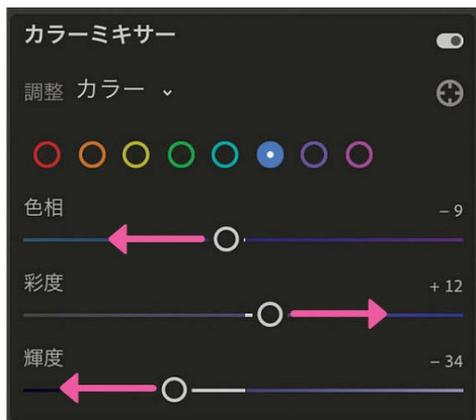
カラーを調整する

Step2までのプロセスでマゼンタに寄りすぎたため、カラーミキサーなどを使って中和します。



色温度	+ 6
-----	-----

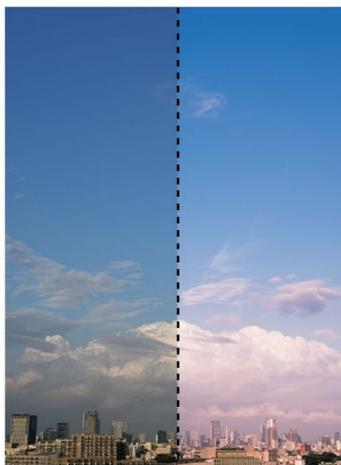
やや暖色寄りにパラメーターを動かす。



ブルー	色相	- 9
	彩度	+ 12
	輝度	- 34

この写真の肝である青空の色は、カラーミキサーのブルーを使って編集する。STEP2で露光量を上げたことで、空の色がイメージしていた以上にマゼンタっぽくなったため、色相をややグリーン（マイナス側）にして調整する。また、彩度を上げ、輝度を下げて、コクのある青空を表現する。

完成



Before After

ネガフィルムの編集と異なる、濃厚な青空が表現することができた。

Memo

ネガフィルム風の編集



前章までの編集方法だと、このようにシアンが強い（マゼンタが弱い）色合いとなる。

4章

ポジフィルム風
モノクロフィルム風

36

Reversal
Monochrome

高彩度ポジフィルムのような夕景

[作品タイトル] 湖の夕景

[シチュエーション] 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

- Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする
- Step 1 ▶ ポイントカーブでベースを作る
- Step 2 ▶ 露光量とカラーを調整する
- Step 3 ▶ 明暗別色補正を調整する

After



Step
0

仕上がりをイメージする

実際の夕景は、Beforeの写真のようにうっすらとオレンジがかったぐらいの色合いでしたが、記憶の中の光景はもっと印象的でした。富士フィルムの高彩度フィルム、Velvia 100で撮ったような色調を目指して編集していきます。

4章

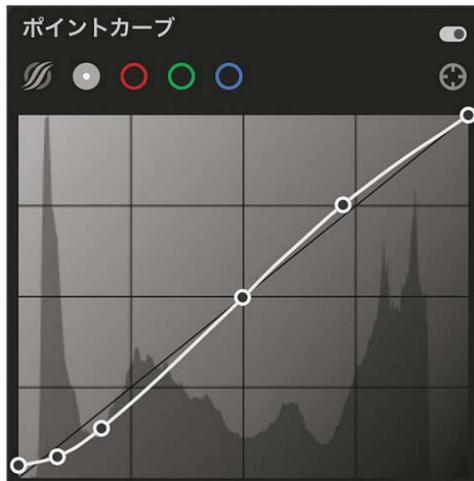
ポジフィルム風
モノクロフィルム風

Step

1

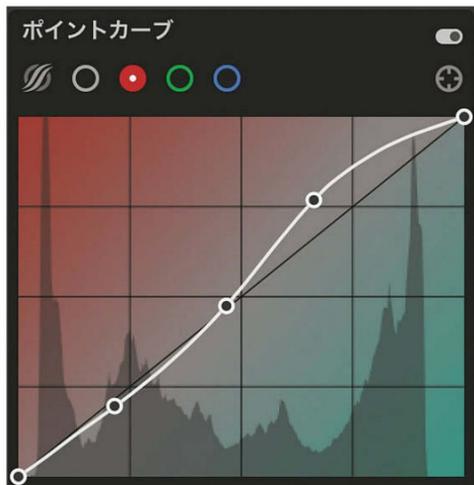
ポイントカーブでベースを作る

アスペクト比を4:3にトリミングしたのち、ポイントカーブを使ってトーンと色調を調整します。



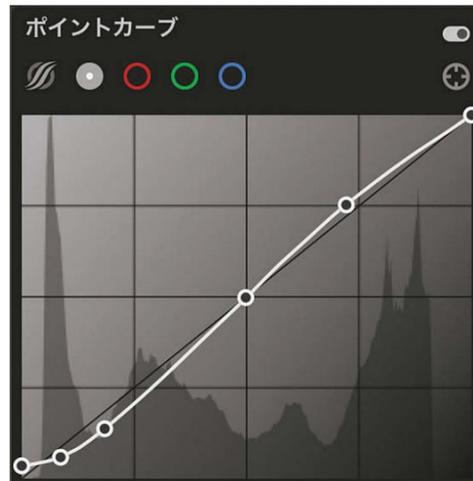
ポイントカーブ

ゆるやかなS字にして、コントラストを高くする。また、暗部を少し持ち上げてフェード感を出す。



ポイントカーブ (R)

ゆるやかなS字にして、コントラストを高くする。また、暗部を少し持ち上げてフェード感を出す。



ポイントカーブ (G)

グリーンを引くことで、全体的にマゼンタを効かせる。

ポイントカーブ (B)

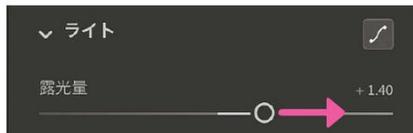
特に変更しない。



Step 2

露光量とカラーを調整する

ライトとカラーのツールを使って、Step1のポイントカーブでの作業を補完します。



露光量 + 1.40

全体的に暗いため、露光量を上げる。



色温度 + 5

わずかに暖色寄りにパラメーターを動かし、温かみを出す。



Step 3

明暗別色補正を調整する

Step2までで赤系統の色を強調したので、シャドウにネイビー系の色をかぶせて、バランスを取ります。



明暗別色補正 (シャドウ)	色相	245
	彩度	11

完成



Before : After

高彩度フィルム Velvia で撮ったような印象的な色合いに仕上がりが、記憶の中の夕景を再現できた。

4章

ポジフィルム風
モノクロフィルム風

37

Reversal
Monochrome

90年代の広告写真のような色調に

【作品タイトル】 テニスコート

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

- Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする
- Step 1 ▶ ポイントカーブでベースを作る
- Step 2 ▶ 露光量とカラーを調整する
- Step 3 ▶ カラーミキサーと明暗別色補正を調整する

After



Step
0

仕上りをイメージする

2000年代初頭までポジフィルムは広告やアー写（アーティスト写真）などの商業分野の一線で使われていました。今回の写真は90年代の広告写真のような色合いをイメージしながら編集していきます。

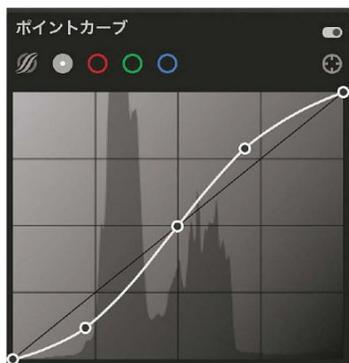
4章

ポジフィルム風
モノクロフィルム風

Step
1

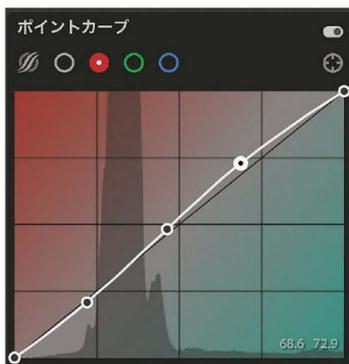
ポイントカーブでベースを作る

ポイントカーブを使ってトーンと色調を調整します。



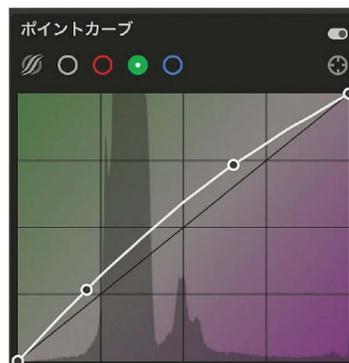
ポイントカーブ

S字にして、コントラストを強くする。パキッとさせたいため、暗部は浮かせず、そのままにする。



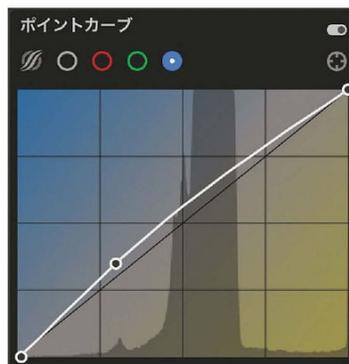
ポイントカーブ (R)

ゆるやかなS字にする。ハイライト側をやや強めに持ち上げると、ポジフィルムっぽい色合いに近づく。



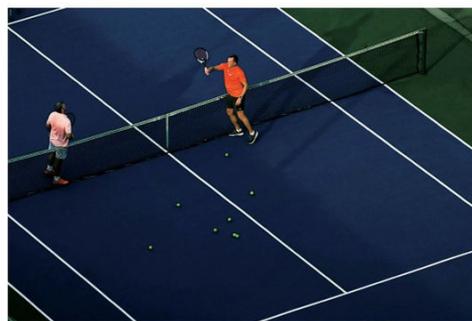
ポイントカーブ (G)

比較的ニュートラルな色合いにしたいため、マゼンタを足さずに、ややグリーン側に持ち上げる。



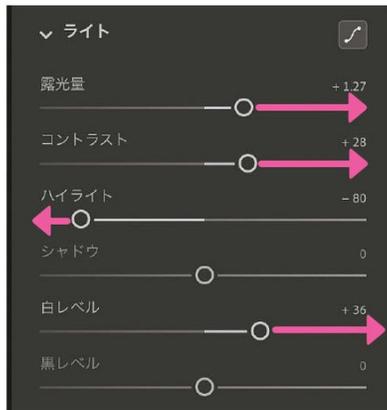
ポイントカーブ (B)

テニスコートの青色のインパクトを強めるため、暗部よりの中間調にポイントを打ったうえでカーブを持ち上げる。



Step 2 露光量とカラーを調整する

テニスコートをグラフィックのような質感に仕上げるための調整を行っていきます。



露光量	+ 1.27
コントラスト	+ 28
ハイライト	- 80
白レベル	+ 36

テニスコートのラインを浮き立たせるために、白レベルを上げることがポイント。



色温度	- 24
-----	------

少しだけ寒色側にパラメーターを動かす。



Step 3 カラーミキサーと明暗別色補正を調整する

ポジフィルムの色鮮やかさとグラフィックっぽさを表現するためにキーカラーの調整を行います。



オレンジ		ブルー	
色相	+ 32	彩度	- 28
		輝度	- 36

オレンジのポロシャツの赤味を減らす。

彩度と輝度のバランスをとりながら、テニスコートの色を微調整する。



明暗別色補正(シャドウ)	
色相	209
彩度	16

シャドウに隠し味程度のブルーをかぶせる。

完成



90年代の広告グラフィックのようにブルーやオレンジといった原色が鮮やかに表現された。

4章

ポジフィルム風
モノクロフィルム風

38

Reversal
Monochrome

階調豊かなモノクロフィルムの再現

【作品タイトル】 夕方の光

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 白黒にする

Step 2 ▶ 基本補正を行う

Step 3 ▶ 白黒ミックスを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



Step
0

仕上りをイメージする

ここからはモノクロフィルムの再現を行っていきます。リファレンスは富士フィルムのネオパン100 ACROS。世界最高水準の粒状性と豊かな階調をうたうフィルムだけあって変なクセがなく、デジタル世代が違和感なく使えるモノクロフィルムかと思います。芝生のディテールやレンズゴーストを活かした編集を心がけます。

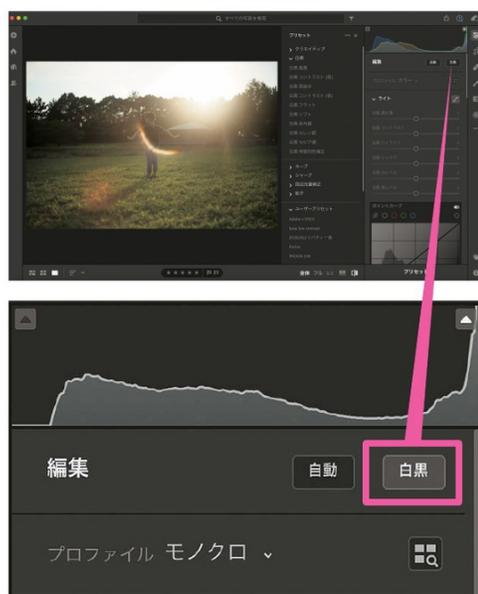
4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

Step 1 白黒にする

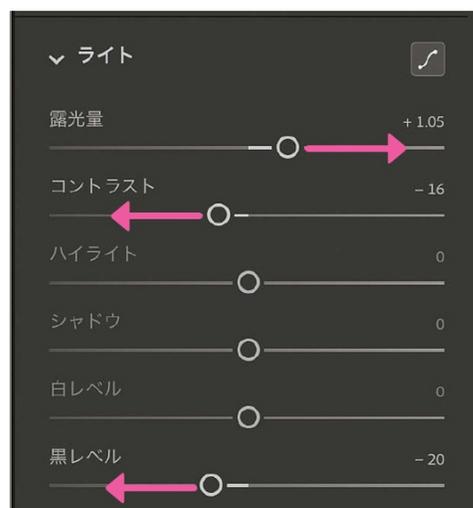
写真をモノクロ化するには、Lightroomデフォルトのモノクロプリセットを使ったり、彩度をゼロにするなど、いくつかの方法がありますが、ここでは編集モジュールの上部（ヒストグラムのすぐ下）にある「白黒」ボタンを押しましょう。



編集モジュールの操作で瞬時にモノクロ写真になる。

Step 2 基本補正を行う

露光量やコントラストを調整します。カラー写真の編集と同じ要領で、イメージする明るさやトーンに近づけていきます。



露光量	+ 1.05
コントラスト	- 16
黒レベル	- 20

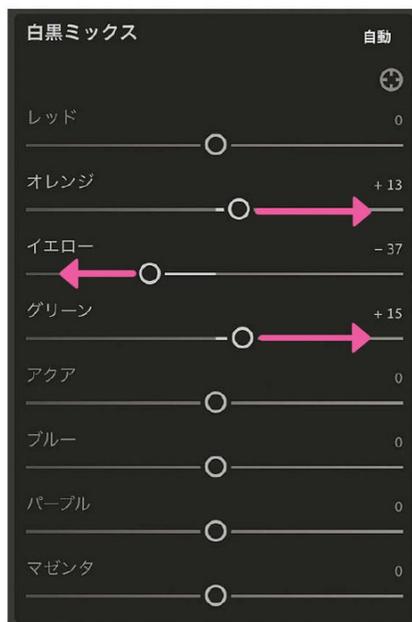
コントラストを下げてやわらかなトーンにしつつ、黒レベルを下げて引き締める。この写真では、主に芝生のトーンに注目しながら黒レベルを調整した。



Step 3

白黒ミックスを調整する

白黒ミックスを使えば、特定の色の明るさを調整することができ、メリハリのあるモノクロ写真に仕上げることができます。



オレンジ	+ 13
イエロー	- 37
グリーン	+ 15

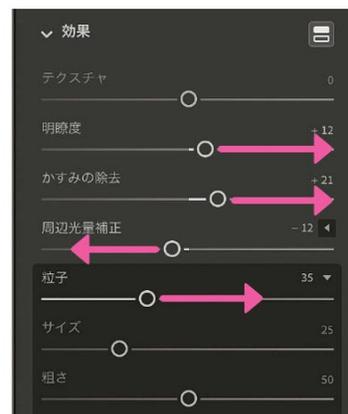
レンズゴースト（オレンジ）と芝生（グリーン）を明るくした一方で、夕日の光（イエロー）を暗くした。



Step 4

効果を調整する

周辺光量補正や粒子で雰囲気たっぷりに仕上げてください。筆者はカラー写真よりモノクロ写真のほうが周辺減光効果は映えると感じます。



明瞭度	+ 12
かすみの除去	+ 21
周辺光量補正	- 12
粒子	35

元の写真が逆光でふわふわとしているため、明瞭度とかすみの除去を上げた。

周辺減光効果と粒子でフィルムらしさを演出する。

完成



見せたいものがはっきりとわかるモノクロ写真に仕上がった。

4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

39

Reversal
Monochrome

グレーが無段階に連なるモノクロに

【作品タイトル】 摩天楼

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

- Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする
- Step 1 ▶ ポイントカーブを調整する
- Step 2 ▶ 基本補正を行う
- Step 3 ▶ 白黒ミックスを調整する
- Step 4 ▶ 効果を調整する

After



Step
0

仕上りをイメージする

白黒写真は白と黒の2色で構成されているわけではなく、実際には白から黒まで無段階のグレーが連なっています。富士フィルムのネオパン100 ACROSのように階調が豊かなモノクロフィルムをイメージして、編集を進めていきます。

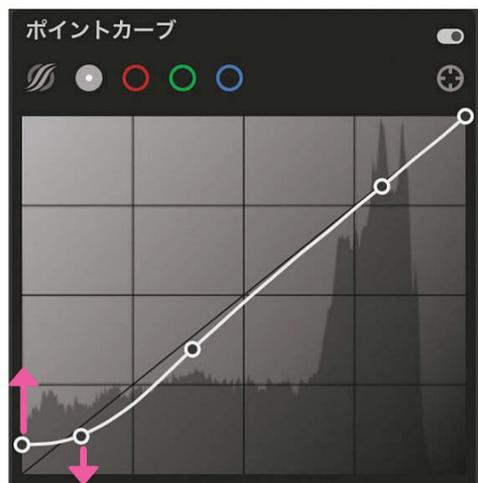
4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

Step 1 ポイントカーブを調整する

編集モジュールの上部の「白黒」ボタンを押してモノクロ化したのち、ポイントカーブを調整してトーンを作ります。



最も暗い部分を持ち上げて軽いフェード感を出しつつ、暗部をやや下げて引き締める。



Step 2 基本補正を行う

やや硬調でディテールが消失しているため、少し軟調なトーンにしていきます。



露光量	+ 0.55
コントラスト	- 16
ハイライト	- 32
黒レベル	- 24

雲の表情がわかる程度にハイライトを下げる。Step1 のポイントカーブで暗部を持ち上げているが、あえて黒レベルを下げて、ビルの窓ガラスの部分などが引き締まるようにする。



Step 3

白黒ミックスを調整する

白黒ミックスで主に空の表情を出していきます。



ブルー -20

Step2でハイライトを上げて空の詳細を浮かび上がらせているが、白黒ミックスのブルーの明るさを下げることで、もう一段階空にコクを出す。



Step 4

効果を調整する

写真の質感を決める「効果」のパネルで、明瞭度や周辺光量などを補正します。



明瞭度 +12

周辺光量補正 -22

粒子 24

周辺光量補正を強めにマイナスにする。カラー写真だと-15よりも強くすると不自然な印象になりがちだが、モノクロはこれくらい大胆に周辺減光させてもよい。

完成



Before After

冬のニューヨークの冷たい空気感が伝わるモノクロに仕上がった。

4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

40

Reversal
Monochrome

夕日を繊細なモノクロで表現

【作品タイトル】 南国のサンセット

【シチュエーション】 朝 日中 夕刻 夜 晴れ 曇り 雨
 順光 逆光 / 斜光 自然光 人工光

Before



Process

Step 0 ▶ 仕上がりをイメージする

Step 1 ▶ 基本補正を行う

Step 2 ▶ ポイントカーブを調整する

Step 3 ▶ 白黒ミックスを調整する

Step 4 ▶ 効果を調整する

After



Step
0

仕上りをイメージする

南国のサンセットは色彩が豊かで、モノクロ化するのがもったいないと思うかもしれませんが、モノクロならではの夕日の表現も素敵なものです。夕焼けの空のグラデーションに注意しながら、繊細な表現になるように編集をしていきます。

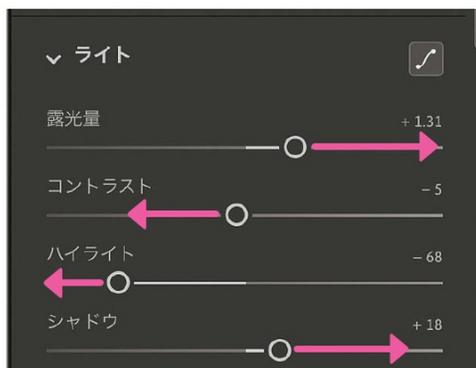
4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風

Step 1 基本補正を行う

夕日のグラデーションや雲など、空の表情をしっかりと見せたいので、その点を意識しながらトーンを整えていきます。



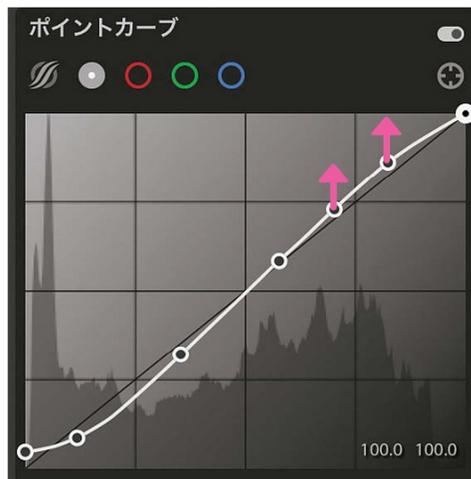
露光量	+ 1.31
コントラスト	- 5
ハイライト	- 68
黒レベル	- 18

白黒ボタンでモノクロ化したのち、ハイライトを大幅に下げて、空のグラデーションをしっかりと出す。最暗部を引き締めるために黒レベルを下げる。



Step 2 ポイントカーブを調整する

ライトを使った補正に加えて、ポイントカーブでニュアンスを加えます。



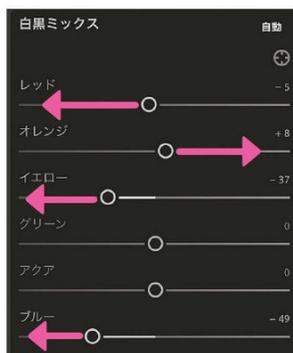
カーブをゆるやかなS字にし、少しだけコントラストを上げる。最暗部に打ったポイントをわずかに上に動かし、シャドウをやや浮かせる。



Step 3

白黒ミックスを調整する

白黒そのままだとメリハリがなく、のっぺりとしてることがあるので、色の系統ごとに明るさを調整していきます。



レッド	- 5
オレンジ	+ 8
イエロー	- 37
ブルー	- 49

元写真の色構成を確認しながら、各色の明るさを調整する。写真の下にある鏡のようなアイコンを押すと、元画像を確認することができる。



Step 4

効果を調整する

最後にニュアンス程度で周辺減光効果や粒子を加えて仕上げます。



明瞭度	+ 10
周辺光量補正	- 7
粒子	33

元の写真が（レンズの特性もあり）周辺減光を起こしていたため、味付け程度に周辺光量補正性をマイナス側に動かした。

完成



Before After

見た人が夕日の色合いを想像できるような、階調豊かなモノクロ写真に仕上がった。

4章

ポジフィルム風

モノクロフィルム風



嵐田大志

Taishi Arashida

東京を拠点に、家族写真やスナップなどを中心に撮影。Instagramにてハッシュタグ「#デジタルでフィルムを再現したい」を発案、デジタル写真をフィルム風に編集することをライフワークのひとつとしている。Adobe Stock Premiumがモバイル編集アプリVSCOと共同展開する「VSCO Collection」の公式クリエイター。

Instagram taishi_arashida

Twitter @Taishi_Arashida

玄光社MOOK

デジタルでフィルムを再現したい

2020年5月24日 初版第1刷発行

著者 嵐田大志

編集 柏倉友弥 (スタジオポルト)

デザイン 関根千晴 (スタジオダック)

発行人 北原 浩

編集人 勝山俊光

編集 吉田 寛

発行所 株式会社玄光社

〒102-8716 東京都千代田区飯田橋 4-1-5

Tel:03-3263-3515

Fax:03-3263-3045

<http://www.genkosha.co.jp>

印刷・製本 シナノ印刷株式会社

JCOPY <(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構 (JCOPY) の許諾を得てください。また本誌を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

JCOPY TEL: 03-5244-5088 FAX: 03-5244-5089

Email: info@jcopy.or.jp

©2020 Taishi Arashida

©2020 GENKOSHA CO., Ltd.

Printed in Japan

A large, light gray, stylized letter 'G' that serves as a background for the text. The 'G' has a thick, rounded stroke and a small notch at the top right.

玄光社
GENKOSHA



*edit digital photos
to look like film*